

紀要47号

研 究 報 告 書

平成22年3月

尼崎市立教育総合センター

はじめに

昭和63年4月1日に「尼崎市立教育総合センター研究員設置要綱」が制定され、今年度で22年目を迎えます。

教育総合センターに研究員を置くことにより、当面する教育課題について、その実態を十分把握し、実証的な研究を深め、教育実践に役立つ研究成果を得て、本市教育の充実を図るとともに、教育についての悩みを持つ市民の要望に応えるため適切な指導助言のできる人材を育成することを目的としています。

平成21年度は8研究部会で研究員35名、当センターの指導主事及び専任講師として、大学教授、准教授及び小・中学校長を招聘し研究を進めて参りました。

「教育相談」では「開発的な教育相談」をテーマに一人一人の実態に応じた指導とともに学級集団におけるよりよい人間関係づくりをめざした研究、「国語科教育」は「確かな言葉の力を育てる指導」をテーマに伝え合う力の育成をめざす研究、「小学校情報教育」は「個別ドリルシステムの効果的な活用について」をテーマに基礎学力向上に向けて個別ドリルシステムを活用した効果的な指導方法についての研究、「理科教育」は「理科の基礎学力向上をめざして」をテーマに基礎学力向上に向けて小・中学校の連携を踏まえた効果的な指導方法についての研究、「外国語活動」は「小学校外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究」をテーマに小学校英語活動におけるコミュニケーション能力を養う授業のあり方についての研究、「算数・数学科教育」は「算数・数学の基礎学力向上をめざして」をテーマに一枚ポートフォリオ評価を活用して子どもを捉えるについての研究、「社会科教育」は「デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法の研究」をテーマに、デジタルコンテンツ等、有効な資料を活用した社会科学習の実践的研究及びその効果についての研究、「生徒指導」は「公立学校の社会的存在と地域連携に関する考察」をテーマに公立学校の現状を基に社会的、法的な視点からその存在に関しての研究について各研究部会で取り組み、専門的な立場から大学教授等からの御指導を頂き探求して参りました。

この報告書の研究成果が、学校・園をはじめ多くの教育関係の方々に御一読頂き、日々の教育活動の前進の一助にして頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この研究を進めるにあたって、専任講師並びに校長先生方々には何かと御指導御鞭撻を頂きましたことを厚くお礼申し上げます。また、研究員の先生方には熱心に研究して頂きましたことに感謝しております。

平成22年3月

尼崎市立教育総合センター
所長 平 垣 新 一

目 次

- 1 算数・数学科教育 算数・数学の基礎学力の向上をめざして……………1
— ポートフォリオ評価法の活用 —

- 2 外国語活動 外国語活動におけるコミュニケーションを図る
楽しさを味わう授業の研究 ……………17
— 英語ノートの効果的な活用を通して —

- 3 社会科教育研究 デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法の研究 ……31
— デジタルコンテンツの活用とその教育的効果の考察 —

- 4 生徒指導 公立学校の社会的存在と地域連携に関する考察 ……………47

- 5 教育相談 開発的な教育相談 ……………59
— 個や集団の質を高める —

- 6 国語科教育 確かな言葉の力を育てる指導の研究 ……………81
— 伝え合う力の育成をめざして —

- 7 理科教育 理科の基礎学力向上をめざして……………103
— 小中連携をふまえた効果的な指導方法についての研究 —

- 8 小学校情報教育 個別ドリルシステムの効果的な活用について……………117

算数・数学の基礎学力向上をめざして

－ ポートフォリオ評価法の活用 －

指導主事	鈴木	美臣	
研究員	鎌田	啓志	(浜田小)
〃	山田	雅行	(名和小)
〃	平山	啓子	(園田小)
〃	真殿	康正	(南武庫之荘中)

【内容の要約】

子どもが1時間の授業をふり返り、わかっていることとそうでないことを自己評価する。指導者はそれを子どもと共有し、必要に応じアドバイスや指導を行う。これを2～3の単元において行う。

取組の手段としては、昨年度に続き、ポートフォリオ評価法を活用する。

本研究に取り組んで2年になる。今年度は、昨年の課題や反省を生かしながら実践を試みた。

キーワード：メタ認知 一枚ポートフォリオ評価 ポートフォリオ評価

1	昨年度の課題	1
2	今年度の取組の方向性	1
3	実践	
	(1) 実践事例1(小学校2年)その1	2
	(2) 実践事例2(小学校2年)その2	5
	(3) 実践事例3(小学校6年)	9
	(4) 実践事例4(中学校1年)	13
4	まとめ	16

1 昨年度の課題

今年度も昨年に引き続き、ポートフォリオ評価法を利用した取組を行い、子どもの学習に対する理解状況や進捗状況の把握、また、指導者の指導方法改善をめざした。

昨年度は、ポートフォリオ評価法に関する類書を読みあさり、手探りでポートフォリオ評価法を実践してきたというきらいもあった。

昨年度の取組における課題や反省には、次のようなものがあった。

- ・一枚ポートフォリオ評価から学力向上にどのようにつなげていくのか検討する必要がある。
- ・書くことの苦手な子どもたちへの配慮が必要である。
- ・つまづいているところを子ども自身で反芻し課題を認識し再構築(メタ認知)する時間を設定することが必要である。
- ・子どもの解答に対して的確なコメントを書き、学習内容を記録させるときの問いかけを工夫していく必要がある。
- ・導入時と最後の授業で行う課題を工夫していく必要がある。

2 今年度の取組の方向性

昨年度の取組後、京都大学教授田中耕治氏からいくつかのご指摘をいただき、また、前述の課題や反省を踏まえ、私たち研究部会では、今年度の取組の方向性を次のように確認した。

- ・昨年度は、ポートフォリオを1枚にすること(一枚ポートフォリオ評価法)を前提にしたが、今年度は子どもの実態に合わせ、ポートフォリオの形にはこだわらない。
- ・最初の問題を診断的評価として位置付けるのであれば、最初の問題には、その単元の前提となる学力を確かめる課題を実施する。または、その単元の活用レベルで最初の問題を提示する。習得レベルで獲得した学力でもって最初の問題にチャレンジさせ、活用を重視した授業後、もう一度実施する。
- ・自己評価を促す取組として、ポートフォリオを前に置いて、子どもと教師の検討会(カンファレンス)を実施する。
- ・子どもがポートフォリオ評価用紙に書いた内容から授業改善を図り、復習や振り返りを行う。
- ・昨年度は、毎時間後にその時間に学んだ内容や感想を書いたが、本年度はそれに加え、その時間のめあてを評価できる評価問題を与え、子どもの習得した状況が確認できるようにする。
- ・実践は、2~3単元を目安に行う。

実践していくなかで、それぞれの研究部員の学級や学年の実態に臨機応変に対応することも必要になってくると考えられることから、月に1~2回程度研究部会を開催し、取組について交流を図ることにした。

また、今年度の顧問講師である兵庫教育大学准教授加藤久恵氏に夏季休業中の研究部会に参加していただき、指導を仰ぎながら実践を深めていくことにした。

3 実践

(1) 実践事例1(小学校2年)

1. 児童の実態

本学級の児童の算数に対する思いを調べたところ、とてもよくわかる53%、わかる35%、あまりわからない9%、わからない3%となった。

算数の学習では、宿題を忘れることなく、意欲的に取り組む児童が多く、進んで発表もする。わからなく困っている児童には、男女の区別なく教えてくれる児童もいる。また、算数を苦手と感じている児童でも、さまざまな課題に対して途中で投げ出すことなく、最後までねばり強く取り組んでいる。しかし、理解の速い児童もいれば、大変時間のかかる児童もおり、指導には配慮を必要としている。

学習内容に対しては、一次元の表やグラフの読み方、2位数と1~2位数の加法・減法、その筆算など計算問題にはよく発表し答えられるが、「なぜそのような答えになるか」と尋ねるとうまく説明できず、思考力を必要とする応用問題を解くことの苦手な児童が多いように思われる。

そこで、授業の後に、学習内容を自分の言葉で説明したり、感想(わかったことやむずかしかったこと)を書かせたりするポートフォリオ評価を取り入れることで、「なぜそのような答えになったか」ということを説明したり表現する力をより深めさせようと考えた。また、児童が理解できなかったところを教師・児童が共に把握し、新たな支援をすることで算数という教科に対する自信をもつことにつなげたいと考えた。

2. 実践内容

「長さをはかろう」「かけ算(1)」の単元でポートフォリオ評価を取り入れた。

単元「長さをはかろう」では、新しい単元(題材)の学習に入る前に、児童の実態を把握するための診断的評価問題に取り組ませた。そして毎回の授業の終わりには、感想を書かせ、その日に学習した内容やその時間の目標・めあてを評価できる授業後の評価問題(チャレンジ問題)を解かせ、児童の習得した状況が確認できるようにした。単元の終わりには、その単元を学習しての感想を書かせ、診断的評価問題と類似または全く同じ問題を解かせた。(実践①)

しかし、この取組では、児童がどれだけその日の学習内容を理解しているか、また、わからなかったところやむずかしかったところがどこなのかを把握しにくかった。

そこで、次に取り組んだ単元「かけ算(1)」では、単元前後の診断的評価問題とその時間の目標・めあてを評価できる授業後の評価問題は引き続き取り組んだが、ポートフォリオ評価用紙に、「よくわかった」「わからないところがあった」「よくわからない」という自己評価欄を設けた。また、感想には、その日の学習内容を書くことを付け加え、理解しにくかった児童も書きやすいように、わかったことだけでなく、むずかしかったことも自分の言葉で説明や感想を書かせるようにした。(実践②)

また、教師は、児童がポートフォリオ評価用紙に書いた授業後の感想や評価問題の解答に対し、次の授業までにチェックし必ず一言コメントをつけて返すことにした。

感想や評価問題などから、理解の不十分だった児童には、休み時間などを利用して、検討会(カンファレンス)を行うようにした。

実践内容をまとめると次のようになる。(図1)

実践①「長さをはかろう」

- ・ 診断的評価問題
- ・ 授業後の感想(わかったこと)と評価問題←教師はコメント
- ・ 単元後の感想と最終評価問題



実践②「かけ算(1)」

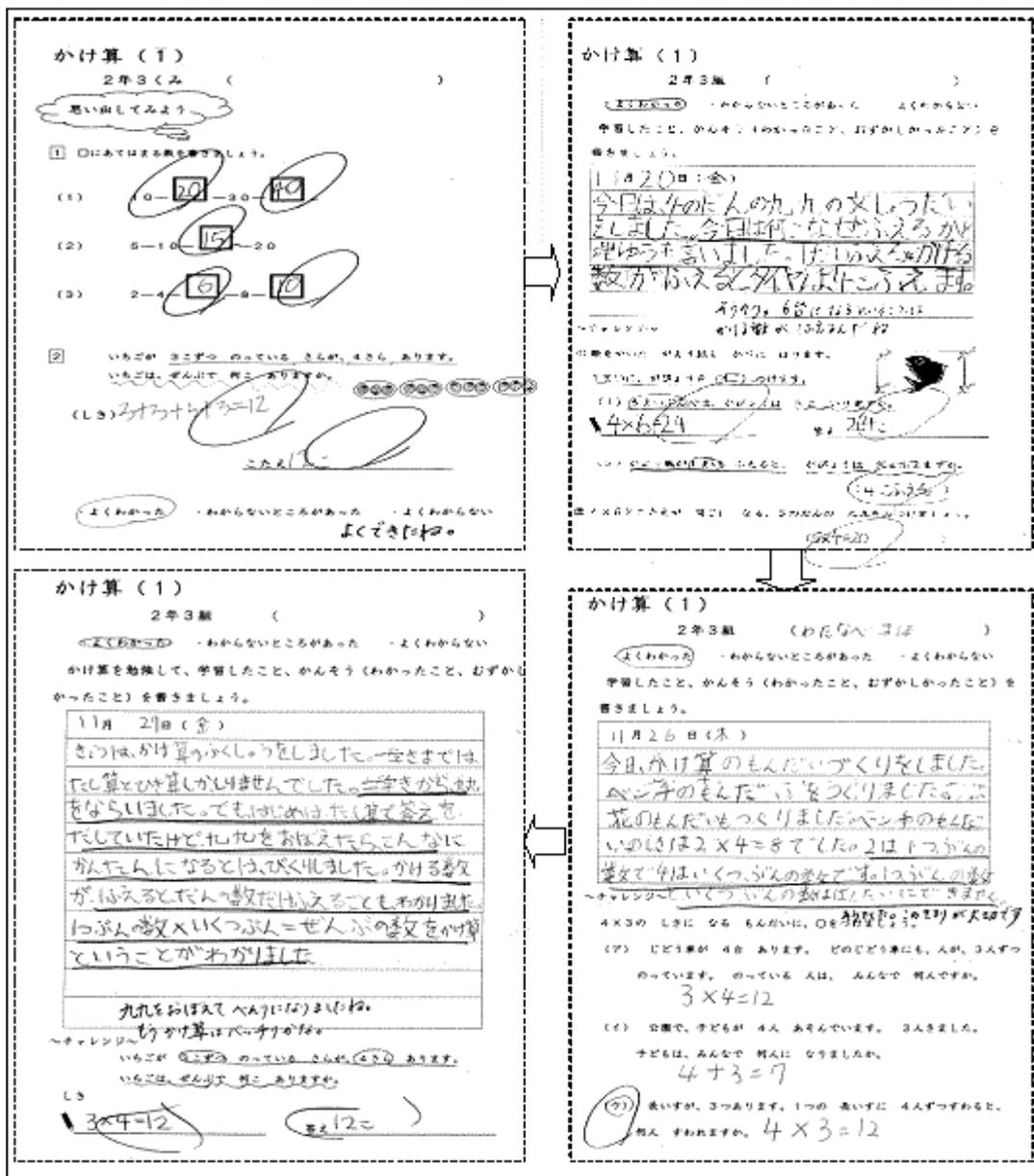
- ・ 診断的評価問題
- ・ 授業の学習内容と感想(わかったこと・むずかしかったこと)と評価問題←教師はコメント
- ・ 単元後の感想と最終評価問題

【図1 実践内容のまとめ】

The portfolio consists of four pages of student work, each enclosed in a dashed border. The pages are arranged in a 2x2 grid, with arrows indicating the sequence of work.

- Top-Left Page:** Titled "長さをはかろう" (Measuring Length) for a 2nd-year 3rd-period class. It includes a grid with two rows of black bars. Handwritten notes include "思い出してみよう!" (Let's think about it!) and "どちらが、何マス目じかいでしょうか。" (Which one is how many squares long?). A student response says "1ばんのほうがいまヌみじかい" (The first one is longer). A small character icon is at the bottom.
- Top-Right Page:** Titled "長さをはかろう" for the same class. It includes a date "6月18日(木)" (Thursday, June 18) and a handwritten note: "きょう、はかばか、おれにでもわかるよ。長さのはかり方をくらべて、mをくらべてわかった。たてとよこがわかってうれしかったです。" (Today, I was able to understand length measurement. I compared rulers and found out about m. I was happy to understand vertical and horizontal measurements). A challenge section asks to measure a rubber band. A drawing of a rubber band is shown with measurements: "たて (3cm)" (vertical 3cm) and "よこ (5cm)" (horizontal 5cm). A small character icon is at the bottom.
- Bottom-Left Page:** Titled "長さをはかろう" for the same class. It includes a diagram of a path with segments labeled 5cm, 6cm, and 5cm. Questions ask for the length of each segment and which is longer. Handwritten answers are "5と10cm", "6と11cm", and "⑥の線が1cmみじかい" (Line 6 is 1cm shorter). A challenge section asks to measure a string. A drawing of a string is shown with a measurement of "8cm7mm". A small character icon is at the bottom.
- Bottom-Right Page:** Titled "長さをはかろう" for the same class. It includes a date "6月25日(木)" (Thursday, June 25) and a handwritten note: "きょうは、おれにでもわかるよ。長さのはかり方をくらべて、mをくらべてわかった。たてとよこがわかってうれしかったです。" (Today, I was able to understand length measurement. I compared rulers and found out about m. I was happy to understand vertical and horizontal measurements). A challenge section asks to measure a string. A drawing of a string is shown with a measurement of "8cm7mm". A small character icon is at the bottom.

【図2 「長さをはかろう」のポートフォリオ】



【図3 「かけ算 (1)」のポートフォリオ】

3. 実践内容の考察

実践後の児童の感想

- ・先生がコメントを書いてくれるから、どんなコメントかわくわくしてがんばってやろうと思った。
- ・日記みたいで書きやすい。
- ・なかなかみんなの前では、わからないところとか言いにくいけど、感想のところに書いたらいい。
- ・チャレンジ問題が復習になった。
- ・むずかしかったことを先生に伝えることができてよかった。

- ・書くことがむずかしくてたいへんだった。

成果

- ・一人一人の児童の学習実態がよくわかった。
- ・どのようなところが児童にとって難しかったのかがわかった。
- ・感想や評価問題から理解ができていないと判断した児童を休み時間に個別に指導することができた。
- ・前時に書いた授業内容や感想、評価問題が次時の導入において前時の振り返りなどに使え有効的だった。
- ・最初は、あまり授業内容のことが書けなかったが、アドバイスすると少しずつ書けるようになった。
- ・授業内容から「わかったこと」をうまく書けない児童もいたが、上手にまとめられた児童の感想などを紹介し、黒板にその日の学習のキーワードとなる言葉を提示すると、自分の言葉でまとめられるようになった児童が増えた。
- ・毎回の教師のコメントを楽しみにしている児童が多く学習意欲が高まった。
- ・教師の説明不足だったところがわかり、次の授業で説明を加えたり、また新たな評価プリントも付け加えて指導することができた。
- ・わかりやすい授業にするため、板書や発問の仕方など授業改善に努めることができた。
- ・文章を書くことが苦手だった児童でも、毎回書くことにより、書くことに対して抵抗が少なくなり、それが他の教科でも活かされてきている。

課題

- ・感想など文章を書くことにあいかわず抵抗のある児童もいるので、根気よく指導を続けることが必要であった。
- ・感想などの記述に対する評価規準の設定が不十分であった。
- ・感想を書いたり評価問題を解かせたりするには、時間の足りないこともあった。
- ・感想を書くことのできなかつた児童が学習内容を理解できていないというわけではないので、児童を多角的に見る工夫がいる。
- ・ポートフォリオ評価用紙から判断し、理解の不十分である児童に対し支援や面談を行ったが、時間等の都合ですべての児童とはいかない時もあった。
- ・毎時間の児童のポートフォリオにコメントをつけることは、大切なことだが、負担も大きかった。

ポートフォリオ評価法は、児童の学習意欲を高め、学習の理解度を見たり、授業の復習や次の授業での振り返りなどに使え、とても有効であった。しかし、上記のような課題も見られた。ポートフォリオ評価法が児童の理解力向上につなげられるよう授業内容・感想・評価問題などの作成に工夫することを大切にしたい。

(2) 実践事例2 (小学校2年)

1. 児童の実態

4月に実施したアンケートから、算数の学習に対して、好意的、積極的な意識を持って取り組んでいる児童が学級全体の72%、消極的な意識の児童は28%だった。算数

の学習を好意的に捉えている理由として、得意であることの他に「難しい問題に取り組める」や「計算がしんどいけど楽しい」などがあり、問題が解けた充実感や達成感が算数の楽しみだと感じている児童がいることがわかった。消極的な児童の理由としては、苦手意識があるということが主であった。

アンケートでは、授業中の発表について、正解を発表したいと答えた児童が88%、考え方を説明したいという児童が12%であった。思考の過程より、結果を重視している児童が多いことがわかった。

このような実態を受けて、ポートフォリオ評価を次の2つの目的をもって活用したい。

・学習内容の整理（思考の過程を可視化する）

児童が本時の学習を行う前に、本時までの学習を振り返るための資料として利用する。また、本時の学習を終える時に、本時の学習を図や文章で書き表すことで、学習内容を整理する。そして、一単元の学習を終えた時に、その単元を学習する前と学習を終えた後との知識や認識の違いを比べる資料にする。このように思考の過程を振り返って、図や文章で表すことに繰り返し取り組むことで、問題解決を目指した思考の過程にも目を向けさせられる。また、学習経過を見つめ直すことで、自分の学習状況を自己評価できる。

・学習理解の実態把握

児童がどこまで学習を理解しどこでつまづいているのか、教師が学習理解の実態を把握することで、指導の改善に活かす。児童の理解が目標にまで到達していない状況であれば、授業計画を見直し、授業を補充する。また、一人一人の学習状況に合わせて、個別指導を行うことで、算数の学習への苦手意識を克服させたい。

2. 実践と考察

ポートフォリオ評価を利用した単元は、1学期「長さをはかろう」、2学期「かけ算」である。

・めあて
・評価問題
・振り返り（学習内容）

① 単元「長さをはかろう」での実践内容(図4)

成果

【図4 ポートフォリオ評価用紙の項目】

- ・児童はポートフォリオ評価用紙を見ながら既習事項をもとに本時の課題を解決しようとしていた。文章や図で学習内容を可視化してあることで、前時の学習内容が振り返りやすかった。
- ・単元の最初に取り組む課題と最後に取り組む課題を同じにすることで、単元が終わった時に、児童自ら認識の変化を自己評価しやすかった。
例：長さ比べをする課題で、初めはキャップや消しゴムを並べて、並べられる数の差で違いを求めていたが、最後はものさしで計ってから引き算をして違いを求めた。
- ・毎時間、ワークシートを用いて学習を行ったことで、児童がノートに問題を写したり、枠を書いたりする必要がないため、時間短縮になった。

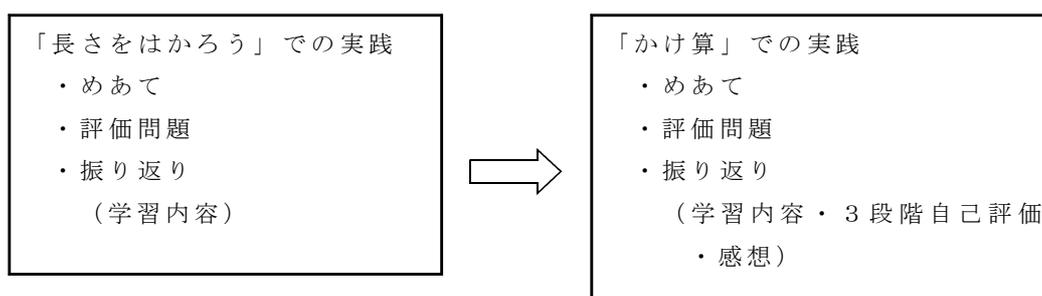
課題

- ・振り返りに学習内容を書く欄を設けたが、なかなか書けない児童と一緒に振り返りながら書かせたため、ポートフォリオ評価を見るだけでは、その児童がどこまで理解できているのか把握できなかつた。学習内容と感想を分けて書かせた方が実態を把握しやすい。
- ・書くことの苦手な児童に、うまく書けている子の文章を紹介するなど、自分の考えや思いを文章化できるようになるための手立てが必要である。
- ・1時間の授業の中で、課題解決（個人・集団）、練習問題（評価問題）、振り返りを行うための時間配分がむずかしかつた。また、授業時間外に個別指導（検討会）のための時間をどう確保するかもむずかしかつた。授業の時間配分や授業時間外の時間の使い方を考え直す必要がある。

・ポートフォリオ評価用紙の枚数が増えると、バラバラにならないように、まとめやすくするための工夫が必要である。

② 単元「かけ算」での実践内容(図5)

単元「長さをはかろう」の実践の反省をもとに、感想を書く欄と、学習理解についての3段階の自己評価を新たに設け、ポートフォリオ評価用紙の様式を改善した。



【図5 改善前後のポートフォリオ評価用紙の項目】

成果

- ・学習の振り返りを毎時間文章や図に書き出す活動を行ったことで、どのように考えて課題解決にあたっていたのか、思考の過程を書き出せるようになってきた。
- ・自分の考えを文章や図で書き出せるようになると、問題の答えだけでなく、解決への過程を発表することに対する抵抗が薄れ、考え方を説明しようとする児童が増えた。発表だけでなく、子ども同士での教え合いも積極性を増した。
- ・感想などを書かせたことで、学習したことについて児童自身がどのように思ったり感じたりしているのか、また、理解や納得ができているのかをつかめた。しかし、十分に思いを文章で表現できない児童もいるため、書くための指導が必要である。
- ・1時間の授業の中で、課題解決（個人・集団）、練習問題（評価問題）、振り返りという流れを継続して行えたため、児童が流れに慣れ活動がスムーズに行えるようにはなってきた。

課題

- ・ポートフォリオ評価用紙を教師が学習後に集めると、児童の手元を離れてしまうので、児童が見たい時に見ることのできるよう集め方の工夫が必要である。
- ・うまく学習内容をまとめて文章に書くことができない児童が少なくない。低学年で

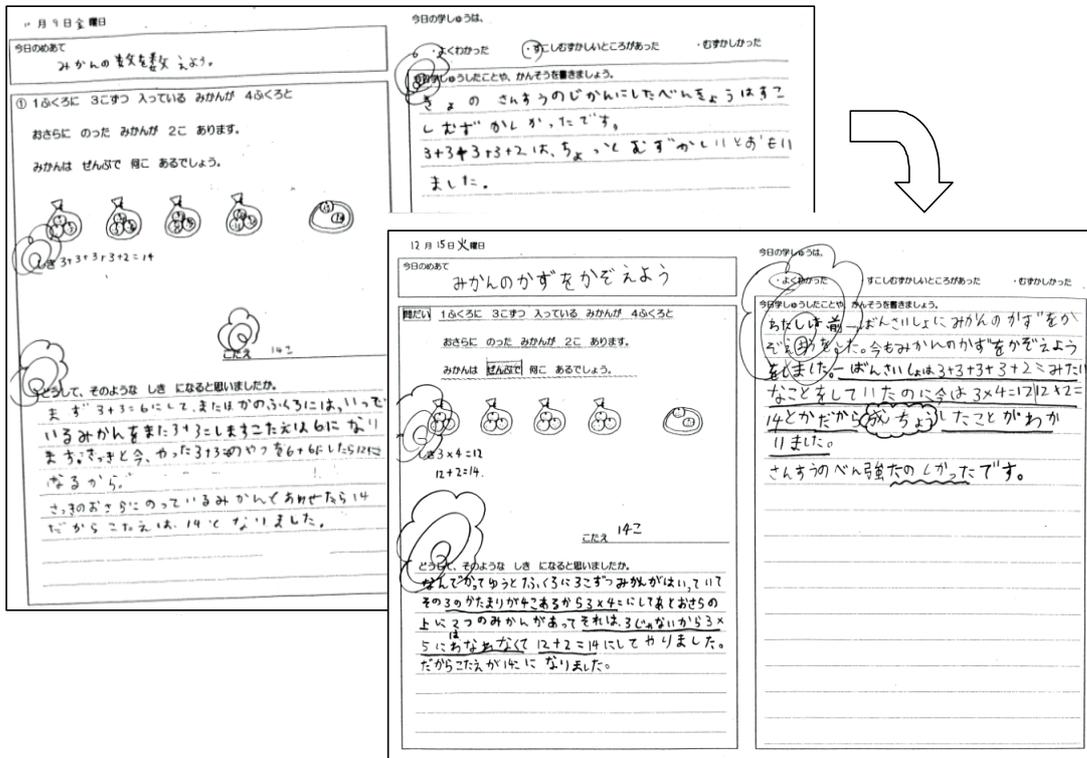
は、学習内容は教師とともにまとめればよいこととし、情意面を中心に書かせるようにしてもよいのかもしれない。

- すべての活動を充実させようとするとう時間内に終われない時があった。時間配分や内容によって重点を置く活動を選ぶなどの工夫が必要である。
- ポートフォリオ評価用紙をもとに個別指導を行うため、時間確保にも工夫が必要だと感じた。

3. 実践内容の考察

単元「長さをはかろう」と「かけ算」での実践を終えてから、児童にアンケートを行った。算数科の学習に好意的・積極的な意識を持っている児童は、全体の84%で消極的な児童は16%であった。4月に比べると、消極的な意識の児童が12%減った。消極的だった児童が積極的な意識に変わったのは、「わからなかったことがわかるようになった時うれしいから」という理由であった。ポートフォリオ評価用紙を見て自分の学習経過を振り返り、学習の前後の知識や認識の違いを確かめることで、達成感や充実感を味わえたようである。ポートフォリオを蓄積していくことによって、自分の学習の成果を確かめることができ、算数に苦手意識を持っている児童にも自信を与えることができたと考えられる。また、「わからないところを先生に教えてもらってわかった時うれしい」という理由で算数に積極的に取り組むようになった児童もいたことから、ポートフォリオ評価をもとに行った個別指導で、わかる喜びを味わわせることができたように思う。

【図6 児童Aのポートフォリオ 「かけ算」 単元導入前→単元終了時】



【図7 児童Bのポートフォリオ「かけ算」 単元導入前→単元終了時】

(3) 実践事例3 (小学校6年)

1. 児童の実態

算数の学習時のみ、クラスを無作為の2グループに分けて授業を行っている。一方のグループは教室で担任が、もう一方は別教室で少人数指導の担当教員が授業を行っており、単元ごとに学習する教室を入れ替えている。人数は15名と16名で机間指導もしやすく、児童の理解度に応じた授業ができています。

算数に関する意識調査を行ったところ、「算数が好き」が23%、「まあまあ好き」が19%、「あまり好きではない」が23%、「好きではない」が35%また、「得意」が13%、「まあまあ得意」が23%、「あまり得意でない」が32%、「得意でない」が32%、また、「算数の問題を考えるのは好き」が10%、「まあまあ好き」が16%、「あまり好きではない」が26%、「好きではない」が48%、という結果となった。

単元テストの平均点は毎回80点代後半で、おおよそ理解できているにもかかわらず、算数の学習に対して否定的な感情を持っている児童の方が多い。特に問題を考えることが好きではない児童は8割近くである。普段から学習には意欲的に取り組んでいるので、6年生になり学習内容がより難しくなり戸惑っているところもあると思われる。

理解の速い児童は「ミニ先生」として教えに行くなど、児童同士での教え合いも積極的に取り入れて、学力が定着できるようにしている。また、全国学力・学習状況調

査 小学校算数調査問題Bのような、数学的な考え方や表現力も含めた学力がつくよう、思考過程や情意面を書きこむノート指導にも力を入れている。

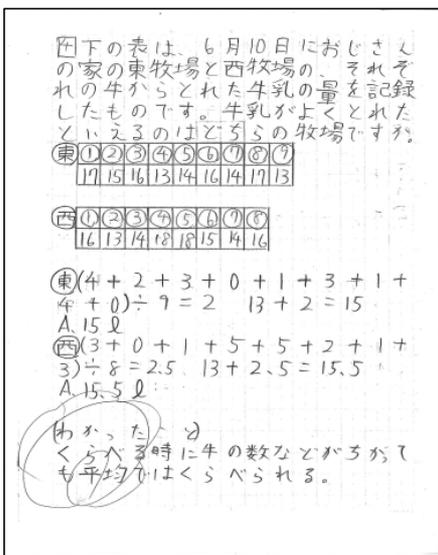
2. 実践内容

次のように考え、「ノートを利用した」ポートフォリオ評価を実施した。

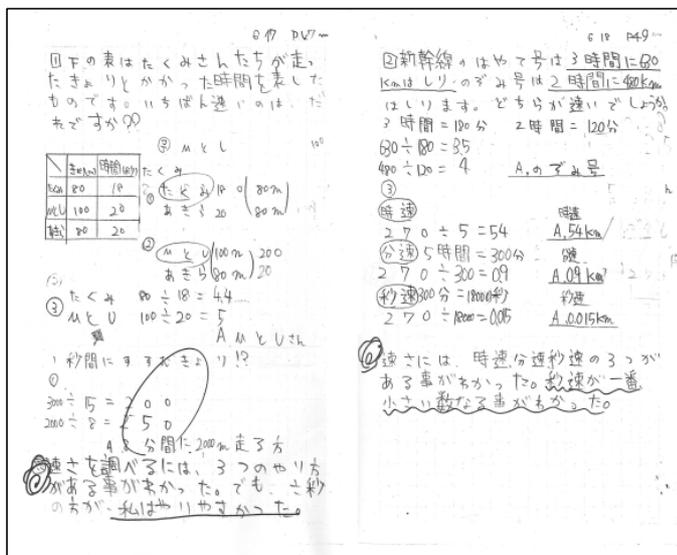
- ・プリントを使わず、普段から使っているノートをポートフォリオにしてしまうことで散逸してしまうことなく、いつでも振り返ることができる。
- ・自分の考えや話し合ったこと等をノートにメモさせておくことで、思考が進み自分の意見を全体の場で表現しやすくなる。メモは後で児童も教師も見ることが可能。
- ・授業の最後にノートに学習感想を書かせることで、書いたノートを振り返りながら復習でき、さらに言語化することで思考力や表現力をつけさせることができる。
- ・ノートに学習内容から自分の考えの変化、学習感想までの全てを記録させることでノートを見れば児童らがどのように学習したか、何を学んだか、その時の感情など学びの様子が一目でわかるようになる。

まず、「平均」、「単位量当たり」の単元において実践を行った。毎時間の最後には必ず学習感想を書くことを念頭に置き、児童が思考過程や考えたことをできるだけ表出できるよう、以下のことに取り組んだ。

- ・単元学習前の知識の確認。
- ・授業展開のパターン化。
 - ①問題文の板書 ②問題文の音読 ③見通しを立てる ④自力解決 ⑤となり同士の交流 ⑥全体での意見交流 ⑦練習問題 ⑧評価問題 ⑨学習感想
- ・考えたことや感じたことを、絵や図・式・言葉などでノートにメモさせる。
- ・学習感想では、学習の感想や新しくわかったこと、疑問に思ったことを書かせる。
- ・ノート指導。(板書の仕方, ノートの使い方)
- ・毎時間後のノートチェックと朱書き。・単元学習終了後の単元感想と単元のまとめ。



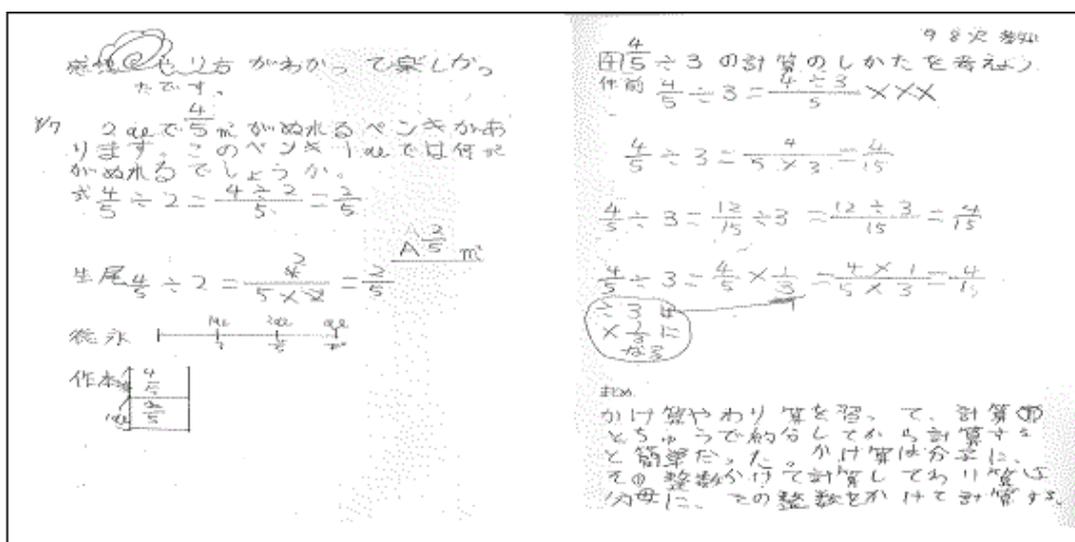
【図8 「平均」のノート】



【図9 「単位量当たり」のノート】

これらの実践を経る中で、大枠の方向性は見えてきたが、学習感想を次時の学習に生かせない、思考力・表現力を伸ばせず学習感想の内容が深いものにできない、カンファレンスがなかなかできない、という反省があった。また、昨年度までの研究で行っていた一枚ポートフォリオのイメージから、1時限の学習に対してノート1ページを使うと限定したため、思考過程や感じたことをノートにメモしにくく、友達の意見や学習感想を書くスペースも少なくなるなどのノート指導の問題も見えてきた。そこで、次の単元「分数のかけ算・わり算」ではこれらの反省より、以下のような修正を加えて次の単元に取り組んだ。

- ・ノートの手本(思考の過程や感じたこと、友達の意見と自分のものとの比較、学習感想がしっかりかけたもの)を配布し再指導する。
- ・ノートの書き方の修正(ページ数にこだわらずゆったりと行間を取って書かせる)
- ・よく書けている児童の前時の学習感想の紹介(授業の導入時に前時の復習も兼ねて)
- ・キーワード作文(各時間のキーワードを考えさせ、学習感想に必ず入れる)の導入。
- ・授業終了後すぐのノートチェックと、その場での即時チェックとカンファレンス。



【図10「分数のかけ算・わり算」のノート】

実践後の児童の感想

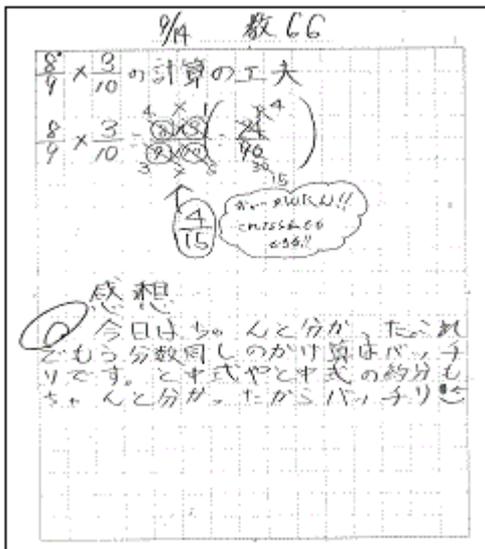
- ・ノートをあとで見直したら役に立った。
- ・学習感想をやってみて、前の勉強を振り返れたりした。
- ・書くことは大変だが、振り返りができるのでいい。
- ・感想など、まとめるのは苦手。
- ・丁寧に書くのでノートが見やすくいい。
- ・書くことで覚えやすくなった。
 - ・その日の出来事、その日感じたことを書いて、ノートを見たら、この日はこういう風なことを学んだのかと思っている。
- ・感想を書くことで計算などのやり方が頭に入る。
- ・同じことを書くことで、どんどん頭に入ってくるので楽しい。
- ・算数がわかりやすくなった。

- ・思っていることがいろいろ書けていい。
- ・すばらしい記憶力がついてきた。
- ・ノートがきれいに書けるようになってよかった。
- ・自分の考えとか勉強したことをまとめるのは好き。ノートをきれいに書いてわかりやすかった。
- ・毎回感想を書くのは面倒だった。
- ・自分のわからない所がわかった。

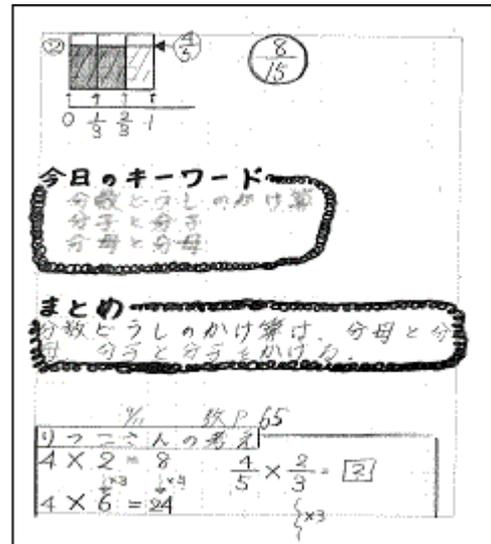
3. 実践内容の考察

成果

- ・授業展開のパターン化による授業改善が図れた。授業の流れに児童らは慣れ、最初にはあった学習感想への抵抗感も少なくなっていた。
- ・ノート指導・板書の改善ができた。ノートの手本を見せたことで、ノートの書き方が劇的に変化し学習感想も変化してきた。使うページを1ページに限定しなくなったので、行間が生まれ、スペースが生まれた。そのおかげで、「ここはわかる」「こういう風に考えればよい」など児童が感じた事などを自由に書き込めるようになった(図11)。また、ページの残りを気にしながら学習感想を書く必要もなくなった。
- ・ノートを利用したポートフォリオにしたことで、最後のわずかの時間で書かれた学習感想やまとめからだけではなく、書かれたノートからすべての学習の様子を見ることができた。また授業後すぐにノートチェックをし、コメントをその場で書きながらカンファレンスを行ったことで、その場でわからなかったところが確認できるなど児童の理解度が見やすくなった。
- ・自分なりの考えを少しずつノートにメモできているので、ノートを見ることで発表できるようになっている。安心して自信を持って発表できるようになった。
- ・自分の言葉で、学習したことを表現できるようになっている。自分の言葉で、さらに情意面まで含めて感想を書くことで学習内容がより頭に入るようになっている。



【図 11 情意面も見えるノート】



【図 12 「キーワード作文」をした学習感想】

- ・自分のノートや学習感想を紹介されることで、学習への意欲につながっている。
- ・キーワード作文をしたおかげで、書き方がわかりやすくなった（図12）。暗記しなければいけない内容があるときには有効であった。一度させると、次からの学習感想でも、キーワードを探すようになった。

課題

- ・本実践はクラス半分ずつ行ったので、学習の進め方などに慣れたころに入れ替えがなされ、途切れ途切れの実践となった。また、半分ずつの少人数指導であったがゆえに毎時間の即時のノートチェックとカンファレンスも可能であったが、クラス全員となると時間がかかってしまう。
- ・キーワード作文、きまり発見作文などを取り入れてみたが、学習感想の内容の深まりに満足できない。友達の考えと比較して考えてみたり、情意面までもっと書き込めたりするようにする手立てを今後、考えたい。そのためには、年間を通じて継続したり、いいものをどんどん手本として取り上げて紹介したりするなどの支援をしていく必要がある。それにより思考力や表現力をさらに伸ばしていけると考える。
- ・表現（国語の力でもある）が苦手な児童への支援の在り方も考える必要がある。算数学習だけではなく、全教科で表現力を身につけさせていかねばならない。
- ・ノートを利用したポートフォリオには、1時間に書かれたすべての学習の様子を見られるメリットもあったが、できるだけノートは児童の手元に持たせておきたいので、教師が目を通す時間が制約された。また、ノートを使い終わった時にノート同士を貼り合わせるなどの手間が必要となった。
- ・1時限で1ページのノートを使用するという限定をなくしたため、ノートの使い方がうまくいかないところがあった。1時限で2ページ（見開き）が理想である。一方で、もったいないという気持ちから、ノートをゆったりと使うことへの抵抗感を持つ児童も少なくなかった。
- ・学習感想の時間を充分にとりたいが、そうすると自力解決や教え込む所や練習などに時間をあまり割けない。各時間の重点を考え、時間配分をしていく必要がある。

(4) 実践事例4（中学校1年）

1. 生徒の実態

今年度の9月に意識調査では、「小学校の算数が好き」が26%、「まあまあ好き」が29%、また、「小学校の算数が得意」が19%、「まあまあ得意」が40%と小学校の算数には、半数以上が好感を持っていることがわかる。また、「中学校の数学は好き」は19%、「まあまあ好き」が45%で合計64%の生徒が数学に好意に思っているが、「数学が得意」が6%、「まあまあ得意」が32%で合計38%と内容の難易度の変化に戸惑っている生徒が増えている。「どんなことをすることが算数・数学か？」という問いには「計算すること」と答えた生徒が87%と計算することに対する意識が高い。「数学的な見方・考え方」に対する意識がほとんどないことがわかった。

2. 実践内容

数学での言語力・表現力の育成を図るため、一枚ポートフォリオを利用して、「毎

時間の内容」と「感想」を書かせた。また、その単元のはじめに診断テスト、終わりに評価テストとして類似した内容のテストを行い、振り返ったときに自分の変化がわかりやすいようにした。ポートフォリオは2つの単元で行い、「文字式」で行った後、研究部員で話し合い、実践方法等を改善して、単元「文字式の計算」で行った。また、このポートフォリオの成果を確認するため、実施前の6月と実施後の12月に「平成21年度全国学力・学習状況調査 小学校算数B」を行い、解答の変化を調べた。

単元「文字式」における実践について

- ・診断テストでは、問題が比較的簡単だったため、62名中、正答50名(81%)、誤答10名(16%)無回答2名(3%)であった。しかし、「式の説明」の欄が、無記入の生徒21名(33%)、「感想」の欄が無記入の生徒13名(20%)、また、記入していても書いた内容が「簡単だった」「難しい」などごく短い文でしか書いていない生徒が29名(46%)いた。
- ・「今日習ったこと」の欄は、単語のみで書く生徒が33名(53%)と多かったのですが、途中で「単語にせず、文章で書こう」と指示したところ、6名ほど文章で書くことができるようになった。
- ・「感想」の欄についても、「よくわかった」「わからない」のような短文で書く生徒が多かった。そのため、「何がわかったのか」「何がわからないのか」「何がおもしろかったのか」まで書くように指示をしたが、ほとんど変化はなかった。

次の単元への改善点について

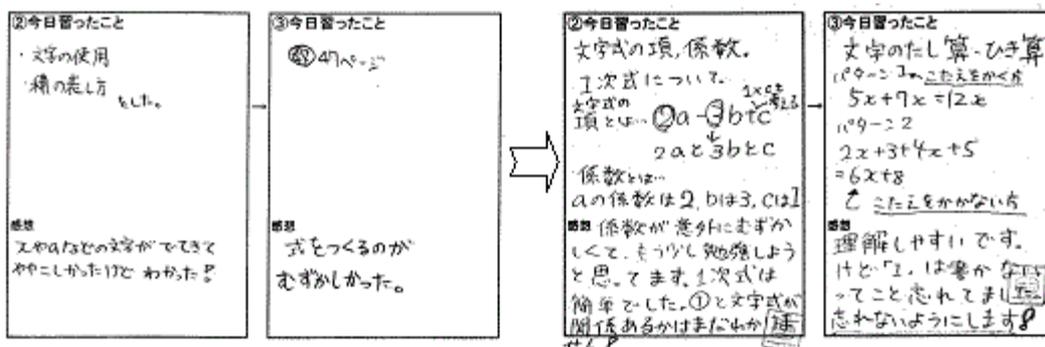
- ・ポートフォリオを毎授業後集め、記入した内容を確認し、生徒の理解度を考えながら、次の授業の組み立ての参考にすることにした。(例 記入した内容に「わからない」が多ければもう一度そこからやり直したり、理解の不十分な生徒を中心に発表させたり、「○○さんから質問があったけど」と授業で取り上げるなど)
- ・上手に書いている生徒の内容を紹介し、どこまで書けば、どんな評価になるのかという基準を示すことにした。
- ・ポートフォリオを確認した後、印を押したり、上手く書けているところには線を引いたり、コメントを入れることにした。
- ・何も記入していない生徒には、「授業を受けてわかったことや疑問に思ったことなど、少しずつで良いから書いていくようにしよう」とメッセージを残して返却するようにした。

単元「文字式の計算」における実践について

- ・診断テストにおいて、「文字式」の単元では、「式の説明」の欄が無記入だった生徒が62名中25名いたが、単元「文字式の計算」では、14名に減少した。しかし、「感想」の欄については、あまり変化はなかった。
- ・「今日習ったこと」の欄は、依然として、その時間の「タイトル」のみを書く生徒が多かったが繰り返し指導していくと、自分で大切だと思う内容や、覚える必要のあるところは、色を変えたり、太字で書いたり、具体的な学習内容を記入したりする生徒が増えてきた。
- ・毎時間、同様のことを繰り返すことで、内容を深めていく生徒もいれば、逆に書くことが単調になっていく生徒もいた。

実践前・後における生徒の変化について

6月のポートフォリオ評価法を始める前に、平成21年度全国学力・学習状況調査の算数B問題を行った。生徒には正解を伝えずに、12月に再度同じ問題を使って正解率を比較したところ、6月の正解率の平均が61%だったのが、12月には66%と5ポイント上昇した。また、単元「文字式」から「文字式の計算」にかけて、ポートフォリオ評価用紙の「今日習ったこと」の欄の記述の内容が、「タイトル」のような書き方から、例題等の内容を用いて具体的に書くなど、自分なりに工夫して書くようになった生徒が18名(29%)いた。(図13)



【図13 「今日習ったこと」の欄に変化のあった生徒の例】

その18名の生徒が、算数B問題において6月から12月にかけて正解率がどれだけ変化したかを表にした。(表1)

正解率が下がっている生徒もいたが、18名の平均正解率が15ポイント上昇していることがわかった。

【表1 「今日習ったこと」の欄に変化のあった生徒18名の算数B問題の正解率】

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
6月 (%)	44	75	25	81	19	81	69	56	38	81	69	75	44	50	81	75	44	13
12月 (%)	69	88	75	81	63	81	69	50	69	95	81	81	56	50	94	81	69	50
(12月)-(6月)	25	13	50	0	44	0	0	-6	31	14	12	6	12	0	13	6	25	37

問題	正解者数		出題の趣旨 (国立教育政策研究所教育課程研究センターの解説資料より)
	6月	12月	
1の(2)	4	8	直接測らなくても調べられる理由を、図形の性質を基に考えることができるか。
1の(3)	6	10	指示された解決方法を理解し、数、言葉と式を用いて記述できるか。
2の(2)	2	7	道筋を立てて考え、表のまとめ方に則して、重さの範囲を言葉を用いて記述できるか。
3の(3)	9	11	道筋を立てて考え、示された判断が正しい理由を式と言葉を用いて記述できるか。
4の(1)	8	11	長方形の面積や長さに着目し、必要なカードの枚数を求めることができるかどうか。
4の(3)	6	11	数値の特徴に着目してきまりを見だし、例をつくることができるかどうか。

【図14 正解者数の増加した問題の出題趣旨】

また、18名中、10ポイント以上正解率の上昇した生徒11名(表1の網掛けの生徒)の解答について、6月には不正解であったが12月には正解になった問題を抜き出してみた。それらの出題の趣旨は図14のようなものである。

このことから、文章で表現することが「出題の趣旨」である問題に対し、正解率が上がっている傾向にあると思われる。これだけで判断することは早計であるが、学習内容を文章や例題などを使い、自分なりに表現できることを身につけることで、自分の考えや計算方法を可視化し、文章で表現する力が向上したと考えることはできないだろうか。

4 まとめ

この実践における成果や課題については、重複を避けるため、ここでは差し控えさせていただきます。本研究は、研究というより実践であり、内容も稚拙で多くのご指摘やご指導をいただきたいところである。

実践のまとめとしてここで述べたいことは、今回の実践で指導者は、子どもの学習状況や進捗状況を細やかに多面的に評価し指導に活かすことができたということである。また、その指導によって子どもたちは、自分の成長を振り返ることができるようになった。そして、何よりも良かったのは、ポートフォリオ評価用紙に書き込む教師のコメント及びポートフォリオ評価用紙を前にして子どもと面談することが、学力向上を前提としたお互いの関係をより深める結果になったことである。ただ、そのことを実践する指導者が費やした時間と労力は計り知れないということを最後に付け加えておく。

【引用文献】

- ・『平成 21 年度全国学力・学習状況調査 小学校算数調査問題 B』(文部科学省 2009)
- ・『平成 21 年度全国学力・学習状況調査 解説資料 小学校算数』(国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2009)

【参考文献】

- ・『紀要 46 号 研究報告書』(尼崎市立教育総合センター 2009)
- ・『児童心理 平成 21 年 2 月号 -学力調査に見る日本の子どもの特徴と弱点-』より(田中耕治 著 2009)
- ・『学習感想を取り入れた新しい算数の学習』(矢部敏昭 編 明治図書 2004)
- ・『確かな学力をつける板書とノートの活用』(細水保宏 明治図書 2007)
- ・『考える算数のノート指導』(尾崎正彦 明治図書 2008)
- ・『算数力がつく教え方ガイドブック』(清水廣 明治図書 2006)
- ・『一枚ポートフォリオ評価中学校編』(堀哲男 編著 株式会社日本標準 2006)
- ・『よくわかる教育評価』(田中耕治 編 ミネルヴァ書房 2005)
- ・『総合と教科の確かな学力を育むポートフォリオ評価法』(宮本弘子 西岡加名恵 世羅博昭 著 株式会社日本標準 2004)
- ・『ポートフォリオのつくり方・すすめ方』(佐藤真編 著 株式会社東洋館出版社 2001)
- ・『ポートフォリオで評価革命』(鈴木敏恵 編著 学事出版株式会社 2000)
- ・『ポートフォリオ評価』(村川雅弘 編著 株式会社ぎょうせい 2001)

外国語活動研究

外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究 ー英語ノートの効果的な活用を通してー

指導主事	寺田忠司
研究員	島田佳幸 (成文小)
研究員	吉本圭子 (園田小)
研究員	西村純 (名和小)

【内容の要約】

外国語活動の授業を実践するにあたり、英語ノートを活用しながら、学習指導要領の目標に迫るための効果的な授業づくりを研究することとしてテーマを設定し、次の3点を重点課題として取り組む。

- 1 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うための教材を開発する
- 2 外国語活動の授業において、担任主導型のあり方を研究する
- 3 授業実践を行う

児童の自由記述から授業実践を振り返ったところ、活動に対する積極的な評価や好意的な感想があった。授業形態の相違が児童の評価を決定するのではなく、どの形態でも工夫によって好評価を得られることが明らかとなった。

キーワード：英語ノート，コミュニケーション，担任主導型，授業実践，教材

1	はじめに	17
2	研究内容	17
	(1) 研究テーマ	17
	(2) 研究テーマ設定について	17
	(3) 重点課題	18
	(4) 研究の取り組み	19
3	実践事例	20
	(1) 公開授業指導案	20
	○実践例1 担任単独での授業	22
	○実践例2 担任とALTによるTTの授業	23
	○実践例3 担任とJTEによるTTの授業	25
4	実践を振り返って	26
5	研究のまとめ	29
6	おわりに	30

1 はじめに

文部科学省は、平成20年3月28日に小学校学習指導要領を改訂し、小学校第5学年及び第6学年に外国語活動が位置づけられた。また、平成21年度4月1日から移行措置として内容を前倒して実施するとともに、平成23年4月1日から全面実施（年間35単位時間、週1コマ相当）することとしている。これを受けて尼崎市では、本年度より外国語活動について授業時数を20時間（Assistant Language Teacher〈以下ALT〉は各校10時間配当）、指導内容を英語ノート1の中から抜粋することとした。

昨年度、外国語活動研究部会では、「小学校外国語活動におけるコミュニケーション能力の素地を養う授業のあり方を探る」をテーマに、①コミュニケーション能力の素地を養うことについて理解を深める、②外国語活動の授業において必要な要素を洗い出す、③授業実践を行うことを重点課題として研究を進めてきた。本年度は、外国語活動の目標を達成するために、英語ノートを活用した効果的な指導について、授業実践を通して研究を進めることとした。

2 研究内容

(1) 研究テーマ

「外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究」
－英語ノートの効果的な活用を通して－

(2) 研究テーマ設定について

外国語活動の目標は、次の3つの柱から成り立っている。

外国語活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

学習指導要領には、積極的にコミュニケーションを図る指導として、①外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること、②積極的に外国語を聞いたり、話したりすること、③言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること、が示されている。また、日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導として、①外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気づくこと、②日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づくこと、③異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること、が示されている。

しかし、教師の実態としてベネッセの読者アンケート（対象：全国の『VIEW21』小学版読者モニター（小学校教師）、実施時期：2009年3～4月、有効回答数：112）では、英語ノートの活用や活動をどのように授業に取り込むか等のコミュニケーション能力育成のための指導法が不明であること、発音などの英語力に自信がないことやどう指導すればよいのかわからないといった担任が指導することへの不安があること等が明らかになっている。

昨年度の取り組みでは、コミュニケーション能力の素地を養うことについて「自分の思いを伝えられてよかったと感じること」が重要であり、授業での必要な要素については「アイスブレイキング（挨拶、歌、ゲーム、チャンツ等）、交流の場の設定（話さなければならない場面設定、気持ちを伝える場面設定、交流方法〈ペア・グループ〉等）、教材、評価」が重要であると指摘されている。

本年度より年間20時間の外国語活動の授業を実践するにあたり、不安を持っている教師が多いことが予想される。英語ノートを活用しながら、外国語活動の目標に迫り、児童に「自分の思いを伝えられてよかったと感じること」が体験できるようにするため、具体的にどのような授業づくりをすればいいか研究することとして上記のテーマを設定した。

(3) 重点課題

研究テーマに迫るため、本年度は次の事項を重点課題として取り組むこととした。

- ① 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うための教材を開発する
- ② 外国語活動の授業において、担任主導型のあり方を研究する
- ③ 授業実践を行う

① 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うための教材を開発する

英語ノート1を活用した教材開発に伴い、具体的な取り組みとして単元構成の分析、学習形態や場の工夫、各活動で育むコミュニケーション力、教材や教具の効果的な活用等を検討することとした。「英語ノート」は、小学校学習指導要領に則してコミュニケーション能力の素地が身につくように編纂されたものであるが、児童の実態に応じて内容を工夫することが重要である。単に英語ノートの内容をそのまま指導するのではなく、児童の興味・関心や発達に合わせたコミュニケーションを図る楽しさを味わう教材について開発を図った。

② 外国語活動の授業において、担任主導型のあり方を研究する

学習指導要領では、授業の実施について「学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施にあたっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること」と示されている。「活用」という言葉からも、指導については担任(担当)主導型の授業が強調されていることがわかる。また、兼重・直山は「カリキュラムや授業案の作成、子どもたちのコントロールなど、授業及びクラスのマネージメントを担当が担うべきである」と述べており、担任(担当)主導型授業の重要性がうかがえる。

しかし、授業について、事前にALTとの打ち合わせをすることが困難な状況や、コミュニケーション不足で担任(担当)とALTとの意思疎通が円滑に行われないこと等から、ALT主導型の授業になってしまうこともある。担任(担当)主導型で、より効果的な指導を行うことができるような展開やALT及びJapanese Teacher of English(以下JTE)との連携のあり方について追究していくこととした。

③ 授業実践を行う

本年度、尼崎市では外国語活動の授業を20時間実施、そのうちALTの配置が各校10時間となっていることから、授業形態として①担任(担当)単独による授業、②担任(担当)とALTによるTTの授業、③担任(担当)とJTE等による授業形態が挙げられる。開発した教材をそれぞれの授業形態で実践を行うことで、成果と課題を具体的に洗い出し研究を深めていくことができると考えた。実践に際しては、同じ場面の授業を展開することで、授業形態の違いによる留意点についても、成果や課題を明確にできると考える。

(4) 研究の取り組み

① 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うための教材を開発する

児童の興味・関心や発達に合わせたコミュニケーションを図る楽しさを味わう教材を、次の内容を重視しながら開発することで共通理解を図った。

○単元構成の分析

英語ノート指導資料では、各単元で段階的にLet's Listen, Let's Play, Let's Sing, Let's Chantがあり、語彙や表現に慣れ親しむことができるように時間配分が設定されている。そこで、児童が積極的に親しめるよう、歌やチャンツ、ゲーム等の活動に中心活動で使用する語彙や表現を取り入れ「語彙の習得」「話形の習得」「話形の活用」と発展していくように単元を構成した。

○学習形態や場の工夫

児童が自信を持って活動できるように配慮し、活動形態を「ひとり活動」「2人活動」「グループ活動」「集団活動」と発展させるようにした。また、必然的にコミュニケーションを図ろうとする買い物の場面を設定した。(「英語ノート1 Lesson6 来語を知ろう」〈オリジナル・パフェを紹介しよう〉)

○各活動で育むコミュニケーション力

いろいろな活動を通して、話形を活用したコミュニケーションを図ることができよう、コミュニケーション能力について「見わかる」「聞き取る」「話す」「リズム身体表現する」「対話する」と発展させるようにした。

○教材や教具の効果的な活用

- ・CD：リズム表現や正確な発音を聞くために使用する。
- ・フラッシュカード、絵カード：語彙の習得や各種ゲーム、板書の提示や掲示等さまざまな活用方法がある。
- ・短冊カード：話形の習得の際に板書の提示や掲示等に使用する。
- ・学習カード(パフェグラス、果物カード)：ラミネート処理したものであれば、のりで繰り返しつけることができる。また、果物カードをシールに印刷することで作業時間を短縮することができる。
- ・ふり返りカード：児童の感想や反省、自己評価等を把握し、今後の指導の参考とする。

② 外国語活動の授業において、担任主導型のあり方を研究する

児童の興味・関心のある題材や活動を設定するためには、担任が児童のことをよく理

解していることが前提となる。また、外国語への不安を取り除き、間違えても大丈夫という学級の雰囲気を作り出すことが担任には求められる。これらは、毎日児童と関わる担任だからこそ可能なことである。外国語活動においても学級担任の存在は欠かせない。

また、英語について不安を抱く児童にとって、担任も英語を積極的に学ぼうとする姿を示すことは、学習する上で良い見本となると考えられる。授業の実施にあたっては、次の授業形態によってそれぞれの留意点を検討しながら共通理解を図った。

○担任(担当)単独での授業

児童に外国語を学ぶモデルとしてその姿勢を示し、発音についてはCD等を活用しながら指導する。

○担任(担当)とALTによるTTの授業

児童に外国語を学ぶモデルとしてその姿勢を示しながら、ネイティブ・スピーカーを活用する。また、児童の様子を把握し、授業のマネージメントをするように指導する。

○担任(担当)とJTE等によるTTの授業

児童に外国語を学ぶモデルとしてその姿勢を示しながら、JTE等を活用する。また、児童の様子を把握し、授業のマネージメントをするように指導する。JTEは発音だけでなく、ジェスチャーや表情にも留意する。

③ 授業実践を行う

授業での必要な要素については「アイスブレイキング（挨拶、歌、ゲーム、チャンツ等）、交流の場の設定（話さなければならない場面設定、気持ちを伝える場面設定、交流方法（ペア・グループ）等）、教材、評価」が重要であると指摘されている。これらを単元計画に取り入れることで児童に「自分の思いを伝えることができ良かった」と感じることをできる展開を考えた。また、児童にとっても毎時間の展開が同じような内容であることで安心して授業に参加できると考えた。そこで、大まかな展開として、次のように内容を設定した。

○挨拶、導入（ゲームやチャンツでは、授業で使う単語や表現を入れる）

○主な活動（デモンストレーション、話形の練習、コミュニケーション活動）

○振り返り、挨拶

3 実践事例

(1) 公開授業指導案

1. 単元名「外来語を知ろう」

教材名 英語ノート1（文部科学省）

Lesson 6 「What do you want? 外来語を知ろう」

2. 単元目標

- ・身近な外来語に興味を持つ。
- ・積極的に好きなものを尋ねたり、注文したりする。
- ・日本語と英語の発音の違いに気づく。

3. 単元について

本単元では、児童により英語に慣れ親しませるために、担任（及び ALT・JTE）や友達とコミュニケーションをとる場面を数多く設けるようにする。ゲームやフラッシュカードを使って、児童が抵抗なく英語に触れられるような場を設定したり、チャンツを活用して会話文をリズムカルに楽しく言えるような雰囲気を作ったりしたい。

パフェを作る活動では、「客と店員」というそれぞれの役割を与えることでコミュニケーションをとる必然性を作り出し、できる限り多くの友達と会話できるような場を設定する。また、英語ノートに提示されているフルーツだけでなく、オリジナルのフルーツやお菓子を加えることでバリエーションを広げ、児童の活動をより身近で豊かなものにしたい。

活動の際は、英語を使ったコミュニケーションが大切であるが、まず児童の「伝えたい、受けとめたい」という思いを引き出させたい。外国人と英語で会話をする際、たとえ英語での会話が不十分であっても身振りや表情でコミュニケーションがとれる場合がある。それと同じように、児童に「伝えたい」という思いが強ければ、たとえ不十分な英語であってもコミュニケーションがとれるという喜びを感じ取らせたい。そして、そこから外国語活動の楽しさに触れ、英語を通じて「伝え合う楽しさ」を児童が感じ取ってくれることを期待している。

4. 語彙・表現

<主な語彙>

果物・野菜・飲食物・スポーツ・動物・楽器・電化製品・色・数 等

<主な表現>

What do you want? Do you have ○○? Yes, I do./No, I don't. ○○, please.

Here you are. Thank you. You're welcome.

5. 単元計画（全4時間）

	目 標	活 動	主 な 語 彙・表 現
1 時	外来語と原語の音の違いに気づき、英語の音に気をつけて発音しようとする。	<u>Activity</u> ・身近な外来語をさがそう <u>Let's Listen</u> ・CDを聞いてどの絵か捜そう <u>Let's Play 1</u> ・ペアでキーワードゲーム	kiwi peach melon cherry grape tomato cabbage pizza salad steak pudding cake dounut soccer ball 等の外来語
2 時	欲しいものを尋ねたり、注文したりする。	<u>Let's Play 2</u> ・おはじきゲームをしよう <u>Let's Listen 1</u> ・CDを聞きどこの国からきた食べ物か考えよう <u>Let's Listen 2</u> ・CDから注文したものを聞き取ろう	Do you have ○○? Yes, I do . No, I don't. What do you want ? ~, please. 例 : Melon, please.

		<u>Let's Chant</u> ・リズムに合わせて言おう	
3 時 (本 時)	店員になって何をトッピングしてほしいか尋ねたり、お客になって具材を答えたりしてオリジナルパフェを作る。	<u>Let's Play 3</u> ・ワードコールゲームをしよう <u>Let's Chant</u> ・じゃなくてチャンツをしよう <u>Let's Listen 3</u> ・何を注文したか聞き取ろう <u>Activity 1</u> ・パフェ屋とお客にわかれて対話しよう	kiwi peach melon cherry grape 等の単語 What do you want ? ~, please. Here you are. Thank you. You're welcome.
4 時	作ったオリジナルパフェを紹介する。	<u>Let's Chant</u> ・リズムに合わせて言おう <u>Activity 2</u> ・オリジナルパフェを紹介しよう	My original parfait. I like ~, ~, and ~. (This name is ~) Thank you.

6. 本時について

(1) 本時の目標

- ・相手に欲しいものを尋ねたり、自分の欲しいものを要求したりして、オリジナルフルーツパフェを作ることができる。
- ・相手の話をよく聞くとともに、積極的に尋ねたり注文したりすることができる。

(2) 展開

○実践例1 担任単独での授業

成文小学校 指導者 島田 佳幸(HRT) 対象 5年1組児童28名

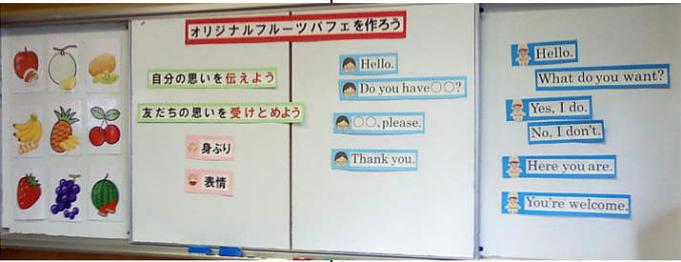
	児童の活動	指導上の留意点(○)・評価(●)
挨拶	・挨拶をする	
導入	<u>Play</u> ・「ワードコールゲーム」をする。 <u>Chant</u> ・「じゃなくてチャンツ」をする。 全体で ペアで	○児童とともに楽しく学習が進められるように盛り上げる。 ○パフェの材料となる単語と発音を確認させる。 ●リズムによって意欲的に取り組んでいるか。
主	<u>Listen</u> ・パフェ屋さんでの注文の場面のデモンストラーションを見て内容を理解する。 お客: Hello	○「Hello」「Thank you」「bye」などの挨拶

な 活 動	店員：What do you want ? お客：～, please. 店員：Here you are. お客：Thank you. 店員：You're welcome. Activity ・全体で話形を練習する。 ・パフェ屋とお客にわかれて対話活動する。 ・パフェ屋とお客を交代する。 	挨拶を適宜入れさせる。 ○しっかり伝え合うために、はっきり大きな声で言うこと、最後までよく聞くこと 身振り手振りや表情、気持ちを入れることに留意させる。 ○2人組や友達同士で助け合わせる。 ○苦手な子へのアドバイスをする。 ●欲しいものを尋ねたり、答えたりすることができたか。 ●身振り、手振りや表情、感情も加え豊かに楽しく表現できたか。
ふ り 返 り	・学習のふり返しをする	○自己評価の理由も書かせる。 ○対話活動で活躍していた友達について、理由もつけて書かせる。
挨拶	・挨拶をする	

○実践例2 担任とALTによるTTの授業

園田小学校 指導者 吉本 圭子(HRT) Alan Miller(ALT) 対象 6年2組児童35名

	児童の活動	HRT …㊸ ALT …㊹	指導上の留意点 (○)・評価 (●)
挨拶	<はじめの挨拶> Hello. How are you? I'm fine. I'm happy. I'm hungry. I'm sleepy.	㊸㊹全体で挨拶をする。 ㊸㊹児童と1対1で挨拶をしていく。	○目を見て挨拶させる。
導入	< Practice > 単語の発音練習 < Let' s Play > カードあてゲーム Do you have ○○? Yes, I do. No, I don't.	㊸フラッシュカードを見せる。 ㊹英単語の発音を聞かせる。 ㊸問題を出す。 ㊸わからない時は日本語でヒントを出す。	○ ALT の発音をよく聞かせる。 ●意欲的にゲームに参加しようとしているか。(観察)

	<p>< Let's Chant > What do you want? ○○, please.</p>	<p>㊥㊤食べ物カードを見せながら一緒にチャンツを言う。</p>	<p>○身振りも付け加えながら、テンポよく行う。</p>
主 な 活 動	<p>< Activity1 > ・店員と客に分かれ、オリジナルフルーツパフェを作る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>客 : Hello. 店員 : Hello, What do you want? 客 : Do you have ○ ○? 店員 : Yes,I do./ No,I do't. 客 : ○○,please. 店員 : Here you are. 客 : Thank you. 店員 : You're welcome</p> </div>	<p>㊥㊤店員になって材料を渡したり、客になって材料を集めたりしながらオリジナルフルーツパフェを作ることを説明し、やり方をデモンストレーションで示す。</p> <p>㊥㊤全体で話形を練習する。</p> <p>㊥店員は配置につき、客は店をめぐって、必要な材料を集めに行くよう指示する。</p> <p>㊥店員と客を入れ替えさせる。</p>	<p>○身振りや表情を付け加えると相手によく伝わることを知らせる。</p> <p>○言いにくそうな児童がいれば、一緒に活動を行う。</p> <p>○相手の欲しいものを尋ねたり、自分の欲しいものを要求したりできているか確認する。</p> <p>●店員…客の欲しいものを英語で尋ね、パフェの材料を渡すことができる。(観察) 客…自分の欲しいものを店員に要求して、パフェの材料を集めることができる。(観察)</p>
			
ふ り 返 り	<p><ふり返り> ・自分が頑張ったところ、友達が頑張っていたところを発表する。</p>	<p>㊥相手の話を一生懸命聞こうとしていた児童や、自分の要求を一生懸命伝えようとしていた児童を褒める。</p>	<p>○身振りや表情をつけて友だちとコミュニケーションがとれていた児童を評価する。</p> <p>●友達の良いところを見つけることができたか。(発表, プリント)</p>
挨拶	<p><次時の予告> <終わりの挨拶> Good bye. See you.</p>	<p>㊥自分の作ったパフェを紹介することを伝える。</p> <p>㊥挨拶をする。</p>	

○実践例3 担任とJTEによるTTの授業

名和小学校 指導者 三浦 眞岐子(HRT) 西村 純(JTE) 対象5年3組児童35名

	児童の活動	HRT…④ JTE…①	指導上の留意点(○)・評価(●)
挨拶	<p><はじめの挨拶> Hello.How are you? I'm fine./I'm happy./ I'm hungry./I'm sleepy</p>	<p>①全体に挨拶をする。 ④④ HRT と JTE で挨拶 ①④ HRT,JTE と児童で挨拶する。</p>	
導入	<p>< Let's Play > カードあてゲーム Do you have ○○? Yes,I do./No,I don't.</p>	<p>①食べ物カードを見せながら一緒にゲームを行う。</p>	<p>○ HRT と JTE でデモンストラーションをして児童に見せる。 ●意欲的に参加しようとしているか。</p>
	<p>< Let's chant > What do you want?</p>	<p>①食べ物カードを見せながら一緒にチャンツを行う。</p>	<p>○児童が飽きないようにテンポよく行う。</p>
主な活動	<p>< Activity > 店員と客のグループに分かれ、買い物をし、オリジナルパフェを作る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>客 : Hello. 店員 : Hello, what do you want? 客 : Do you have a strawberry? 店員 : Yes,I do./ No,I don't. 客 : Strawberry,please. 店員 : Here you are. 客 : Thank you. 店員 : You are welcom.</p> </div>	<p>①英語で説明する。 ④日本語で説明・補足を行う。 ④どんなパフェを作るか考え、欲しいフルーツを買うことを告げる。 ①④客と店員のやり取りを JTE と HRT でデモンストラーションする。その後、JTE と児童で練習する。</p>	<p>○ HRT は子どもたちが理解できるよう日本語で説明・補足をする。 ○児童が買い物をしている間、各店をを回り、児童がしっかりやり取りをして、自分の欲しいものを手に入れたり、店員が丁寧に声かけをしているか等を見て回る。 ●(客) 自分の欲しいフルーツを店員に伝え、パフェの材料を集めることができる。 ●(店員) 客の欲しいものを英語で尋ね、パフェの材料を渡すことができる。</p>
振り返り	<p><振り返り> 自分が頑張ったところ、 友達が頑張っていたところを発表する。</p>		<p>○児童の良かった点を具体的に評価させる。 ●友達の良いところを見つけたことができたか。</p>
挨拶	<p><終わりの挨拶> Good bye.See you. So long.</p>	<p>①④挨拶をする。 Good bye.See you. So long.</p>	

(3) 準備物 フラッシュカード・ピクチャーカード・CD プレーヤー・パフェ容器カード・果物カード (シール)・のり・振り返りカード

(4) 板書計画例

オリジナルフルーツパフェを作ろう

自分の思いを伝えよう！
友だちの思いを受けとめよう！

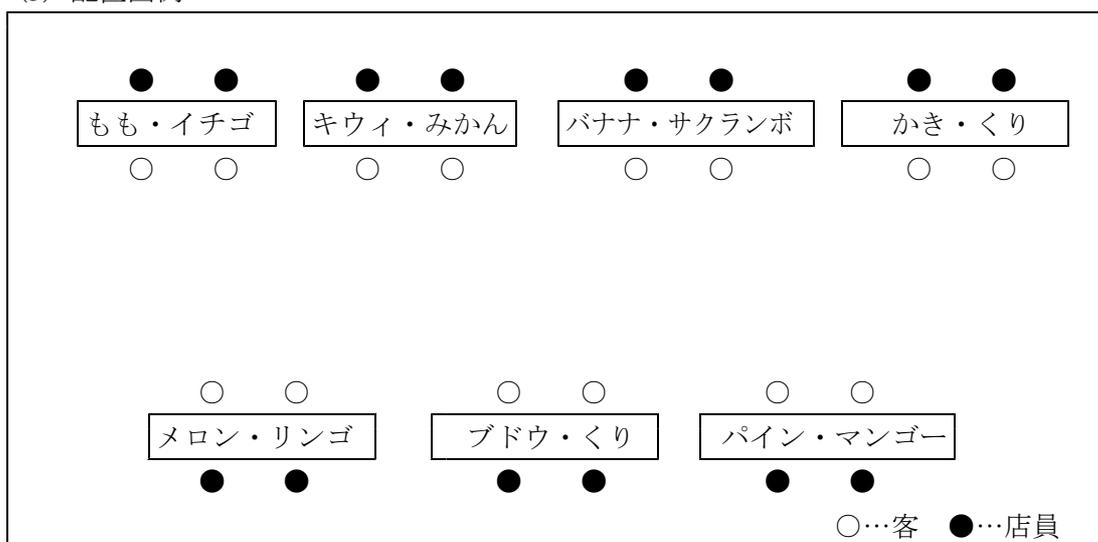
身ぶり

表情

果物カード

客: Hello.
店員: Hello,
What do you want?
客: Do you have ○○?
店員: Yes, I do./No, I don't.
客: ○○, please.
店員: Here you are.
客: Thank you.
店員: You're welcome.

(5) 配置図例



4 実践事例を振り返って

① 教材, 授業構成, 場の設定, 提示について (○…成果 ■…改善点及び課題)

実用型の場の設定, 複数の対話, 話形, 語彙に結びつくゲームやチャンツ, カードの活用等を工夫することで, 楽しくかつ効果的な学習を進めていくことができた。

○フルーツパフェ作りで使用するフルーツの単語や話形を, ゲームやチャンツで扱うことで子どもたちが無理なく英単語を覚えることができていた。また, スムーズに活用することもできていた。

○チャンツは, 座ったままですのではなく, 立ってジェスチャーをつけながら行うことで楽しみながら発音することができた。

- 気に入った具材を注文し工夫して作り上げることができたり、いろいろな友達と会話できるので教材や場の設定は適切と思われる。
- 店ごとに9種類のフルーツを置いた場合、店にシール（9種類の果物を1シートにまとめたもの）を一枚渡した結果、買い物をする子どもたちが欲しい果物を探して、たくさんのお店を回ることができた。また、男女気にすることなく店を回ることができた。（実践例2,3）
- 店をフルーツ別にした場合、売り場への来客数に偏りがあった。予想して組み合わせを考えたが、はずれてしまった。→児童がトッピングしたい具材を予め把握することで店のフルーツの組み合わせを調整することができる。（実践例1）
- パフェグラスのワークシートについて、ラミネートしたものにスティックのりで貼ると、貼り直しや再使用が可能で活用しやすい。（実践例1）
- オリジナルパフェ作りの際は、果物シールを使うことで活動中に手早く貼れるようになり、時間内に多くのコミュニケーションをとることができた。（実践例2,3）
- 話形については、児童が安心して買い物ゲームができるように、黒板に掲示しておいた。これは、英文を読ませることを目的としているのではなく、頭文字のアルファベットから会話文を思い出させることをねらいとして掲示した。英文のみの話形カードであったが、会話の途中で何を話すのかわからなくなった児童は、黒板を見ながら話している場面が見られた。また、友達同士で教え合いをしている場面も見られた。英会話に慣れ親しむ上で、友達同士の協力やコミュニケーションが重要である。
- 「買い物」という実用的な場の設定は、子ども自身も単なる会話だけでなく、総合的な表現力やコミュニケーションの必要性を感じ取ることができたと思われる。
- 児童に次時はオリジナルパフェを紹介することを知らせることで、買い方（フルーツを選ぶ視点）が変わっていたかも知れない。児童も学習計画を知ることで活動に取り組みやすくなると考えられる。
- 店員に帽子やエプロンを着させることで、その役に成りきらせることができると思われる。

② 会話・話形・表現力について

対話の場を設定し工夫することで、児童の「伝えたい、受けとめたい」という思いを引き出させ、会話に身振りや表情を加えた総合的なコミュニケーション力の向上を図るとともに、英語を通じて「伝え合う楽しさ」を児童が感じ取ることができた。

- 買い物では、「自分の思いを伝える、相手の思いを受けとめる」というめあてを持って活動を行った。児童は、会話文だけにとらわれず表情を付け加えることで、よりスムーズにコミュニケーションが図れることを体験を通して学ぶことができた。
- 買い物に必要な会話文はゲームを通して、児童に抵抗なく慣れ親しませるようにした。その結果、児童も楽しみながら自然に会話文を覚えていくことができた。
- 話し方がわからなくなった時、英語の話形の掲示物を見てヒントにしている児童がいたので話形の掲示は有効であった。日本語の表示がなくても参考となっていた。
- 会話だけでなく身振り手振りを含んだコミュニケーション力についても今後経験を

積んでいく必要がある。

■本時では、スムーズな会話を期待するというよりも、いろいろな友達との対話を繰り返すことによって次第に会話に慣れてくるというとらえ方で良いと思う。今後、外国語活動において、どれだけ話形や語彙を定着させるか、(外国語活動以外の)どの時間で、どんな方法で、どのぐらい練習させるかは議論の余地がある。

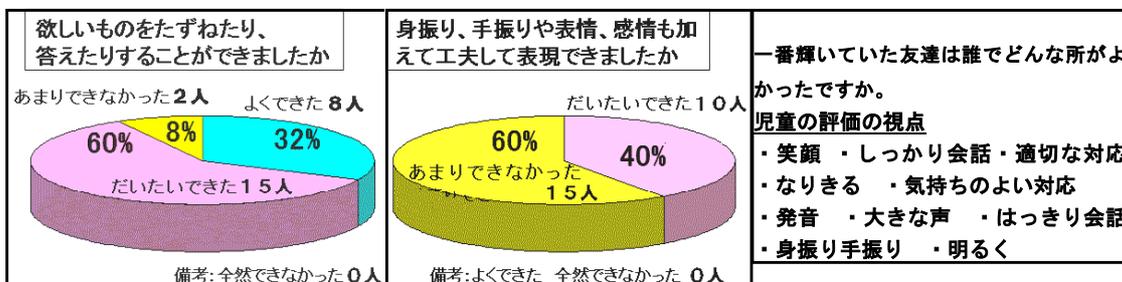


図1 実践例1(担任単独授業)におけるふり返しカードに基づく児童の自己評価

③ ふり返しカード, 自己評価について

ふり返しカードを活用することにより, 児童が自分の視点や目標を持って取り組んだり成果や反省をもとに今後の学習に役立てていくのに有効である。また, 児童が何をどう感じているのか, 今後の指導における参考としても役立つ。

○児童は, 会話だけでなく身体表現や気持ちも含めた総合的なコミュニケーション力にも着目できていることが, ふり返しカードからうかがえる。また, 会話は概ねできたという自己評価が多いが, 身振り手振りを含んだコミュニケーションについては厳しい自己評価をしている(実践例1)。児童が自分の視点や目標を持って取り組んだり, 活動をふり返るには非常に有効である。

○教師による活動の評価は「観察」が占める割合がほとんどであるため, ふり返しカードは欠かせないものと思われる。また, 児童自身もただ「楽しかった」だけで終わることなく, 次の活動に生かせるようなふり返しを行うことで, 今後の学習に深まりを持たせることができると考える。

○児童が何をどう感じているのか, 今後の指導における参考としても非常に有効である。

④ 授業形態及び英語ノートの活用について

ALTやJTEとのよりよき連携を図ったり, 英語ノートに準拠した形で教具や場の設定を工夫することで, 担任主導型の授業展開が可能となる。

○担任(担当)単独の授業については, 児童を前にして英語を話すことへの不安や自信のなさから消極的になりやすいが, CD教材を活用したチャンツや会話練習を行うことで, 負担が軽減できる。

■担任の英語による指示(クラスルームイングリッシュ)は, 増やしていくことが必要だが, 焦らず1回の授業で1つ増やすぐらいのつもりで増やしていくとよい。

○担任(担当)とALTのTTについて, ネイティブな発音に数多く触れることで, はじめは英語が全く聞き取れなかった児童も, 次第にALTの話す内容を理解できるようになっていった。児童の活動を充実させるために, ALTの存在は大きい。

■担任(担当)とALTの効果的な活動をねらう場合, 事前の打ち合わせが重要になる。

1時間の授業の流れやHRTとALTそれぞれの役割をしっかりと分担した上で授業

に臨むことが大切ではないだろうか。そういった HRT と ALT とのコミュニケーションが円滑に行われることで、児童の活動が充実したものになっていくと思われる。

■校内や地域の人に JTE として授業に参加してもらい、少しでもたくさん英語を聞かせることで英語に対する抵抗がなくなる。一年を通しての積み重ねや、日々の生活の中での英語の活用が大切である。

○英語ノートは、各単元や各時間において、段階的に語彙や表現に慣れ親しむことができるように配列配分が設定されている。英語ノートに準拠しながら、場の設定や活動内容、教材教具に工夫を加えることで、児童の実態や教師の指導力、授業形態に応じて、より効果的に学習を進めることができた。

5 研究のまとめ

研究テーマ「外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究－英語ノートの効果的な活用を通して－」に迫るため、児童が「自分の思いを伝えられてよかったと感じること」を体験できる授業づくりを研究してきた。英語ノートの単元構成を分析し、場の工夫や教具の効果的な活用を目指した授業を行った。その結果、ふり返りカードの自由記述から次のような感想や自己評価が述べられていた。

- たくさんのお店があつて、いろいろな友達と会話できてよかった。
- 難しい英語を楽しく簡単に覚えることができた。
- 日本語に頼らず英語だけでできてよかった。
- 友達と英語でたくさん会話ができた。
- 身振りや表情をつけることで、相手に気持ちを伝えやすくなることがわかった。
- 相手に自分の思いが伝わってうれしかった。
- 英語をちゃんと話せて、伝わってうれしかった。

ふり返りの多くが、このような積極的評価や好意的な感想が述べられていた。これらの記述が示すように、多くの児童が、単に英語で話すことができたうれしさだけではなく、英語によるコミュニケーションを図ることで、友達と意思疎通できたことへの喜びも感じ取ることができたのではないだろうか。これらの体験を積み重ねていくことがコミュニケーション能力の素地を養う上で重要であると考えられる。

また、記述には次のような感想もあった。

- 身振り手振りがあまりできなかった。
- もう少し練習しておいたらスムーズにできたと思う。
- 英語を話すのが少し恥ずかしかった。

これらは英語によるコミュニケーションをうまく図ることができなかった反省と捉えることができる。身体表現やスムーズに会話すること、気恥ずかしさについては、経験や慣れによるところが大きいと思われる。学習体験を重ねるとともに、今後は、行動観察や振り返りカードの活用等、児童の様子を把握する手立てや苦手意識を持つ児童に対する具体的な支援の方法についても考慮することが必要であろう。

担任単独による授業、ALT との TT の授業、JTE との TT の授業と異なる授業形態で授業を行い、それぞれの授業形態で成果と課題を挙げることができた。また、授業者として

は、次のようなことが実感として挙げられる。

- 授業を重ねるごとに担任が英語を話す割合が増えてきた。
- コミュニケーションを図る楽しさは、教師も子どもと一緒に味わうことが大切。
- 児童はたくさんの英語を聞くことで抵抗がなくなる。一年をとしての積み重ねや日の生活で英語を活用することが大切。

どの授業形態でも共通して、担任は外国語活動を通して英語を学ぼうとしたり楽しもうとしたりする姿があった。これらの姿は、児童にとってよいモデルを示すこととなり、苦手意識を持つ児童にとっても勇気づけになったと考えられる。また、担任主導型の重要性も再認識することができた。

また、英語ノートの活用や教材研究、授業実践については、教師個々だけでなく学校全体で組織的に取り組むことが肝要である。教材教具の作成や蓄積・保管、人材活用、情報交換、実技研修等を校内で協力的に行うことにより、教師間の温度差の解消やひとりの教師にかかる負担軽減、不安解消や効率・効果的な学習指導が期待できる。さらに、市内各学校における取り組みや成果、課題などを収集・解析することで、広く深い追究が可能となる。これらの点については、次年度に向けての課題とし、実用研究としてより意義深いものにしていきたいと考える。

6 おわりに

本年度の取り組みは、英語ノートの効果的な活用を通してコミュニケーションを図る楽しさを味わうことをねらいとして単元計画や展開等を考えた実践研究であった。さまざまな討議をする中で「英語ノートを教えるのではなく、英語ノートで教える」ことが大切で、英語を使って何をさせるかが重要であると感じた。また、児童だけでなく、教師も英語を楽しんだり学んだりする姿勢でいることが大切だと実感した。

来年度、英語ノート2を活用することもあり、教材や教具の開発が重要視されると予想されるが、これまで作成した教材や指導案等の成果物を共有し、活用しやすい環境を整備することも必要である。また、研修や授業発表参観等による教師の不安を軽減する取り組みも必要である。今後も平成23年度外国語活動全面実施に向けて、授業を円滑に進めるための準備を進めていきたい。

参考文献

- 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」文部科学省 2008 pp2.4
- 「小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編」兼重 昇 直山 木綿子 2008 明治図書 pp49.57
- 「英語ノート1」文部科学省 2009 pp36～pp41
- 「英語ノート1 指導資料」文部科学省 2009
- 「『英語ノート1』完全対応 指導ハンドブック1」英語ノート指導研究会 2009 開隆堂出版株式会社 pp74～pp83
- 「VIEW21 vol.1 小学版」ベネッセ教育開発センター 2009 pp1～pp19

デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法の研究 ーデジタルコンテンツの活用とその教育的効果の考察ー

指導主事	小原 誠
研究員	田中 良宜（啓明中）
〃	浅田 宗良（大島小）
〃	馬場 憲一郎（園田南小）
〃	貝畑 健太（武庫東小）
〃	原田 麻 敏（園田北小）
〃	西野 貴美子（上坂部小）
〃	笠井 美香（浜田小）

【内容の要約】

教育の情報化は、情報活用能力の育成を目指した情報教育の充実及びICTを効果的に授業で活用することによる「わかる授業」の実現を目的としている。これらの目的を達成するためには、ICT環境の整備はもとより、それらを活用する教員のICT活用指導力の向上が不可欠である。

社会科教育においては、平成23年度の社会科副読本「私たちの尼崎」の大改訂に向けての作業が進んでおり、各学校でも、地域教材を取り入れた授業の充実に取り組んでいる。

こうした状況の中、本研究部会では、社会科における「効果的な指導のためのコンテンツ活用」という視点のもと、地域教材の作成に目を向け、特に授業で活用出来るコンテンツの開発と地域と関わりの深い教材開発に取り組んできた。そして、作成したデジタルコンテンツを用いた授業実践を通して、児童の変容からデジタルコンテンツの有効性を検討した。その結果、デジタルコンテンツは、児童の授業に対する興味・関心を高めることに関与することが明らかになった。

キーワード：新学習指導要領 情報教育 情報活用能力 ICT活用 コンピュータ
デジタルコンテンツ 実践授業 興味・関心・意欲 思考力

1	はじめに	31
2	研究の内容	31
3	デジタルコンテンツを活用した授業実践について	32
4	研究のまとめ	46
5	おわりに	46

1 はじめに

教育の情報化は、情報活用能力の育成を目指した情報教育の充実及びICTを効果的に授業で活用することによる「わかる授業」の実現を目的としている。これらの目的を達成するためには、ICT環境の整備はもとより、その環境を活用する教員のICT活用指導力の向上は必要不可欠である。本研究部会では、「授業中にICTを活用して指導する能力」の育成を目指し、平成14年度からデジタルコンテンツを使った授業実践を研究の中心に据え、デジタルコンテンツ利用の有効性、その教育効果について研究を進めている。

平成19年度の研究では、授業に使えるデジタルコンテンツの開発と授業実践と共に、黒板投影型コンテンツの作成や地上デジタル放送を活用した授業実践を行った。

平成20年度の研究では、「より広い活用」をめざし、今までの国語科、算数科、理科に止まらず、社会科や体育科にも広げ、デジタル掛け図やビデオ機能を使った授業実践を行ってきた。その中でも社会科でのデジタルコンテンツ活用は、子どもの「興味・関心」を導き、問題解決のための「思考・判断」に役立ったという声が多かった。

本年度は昨年度の反省を生かし、社会科に教科をしばるとともに、原点に立ちかえり、「社会科における効果的な授業のためのコンテンツ活用」という視点のもとに、デジタルコンテンツの開発と授業実践を行い、分析と考察を行うことにした。

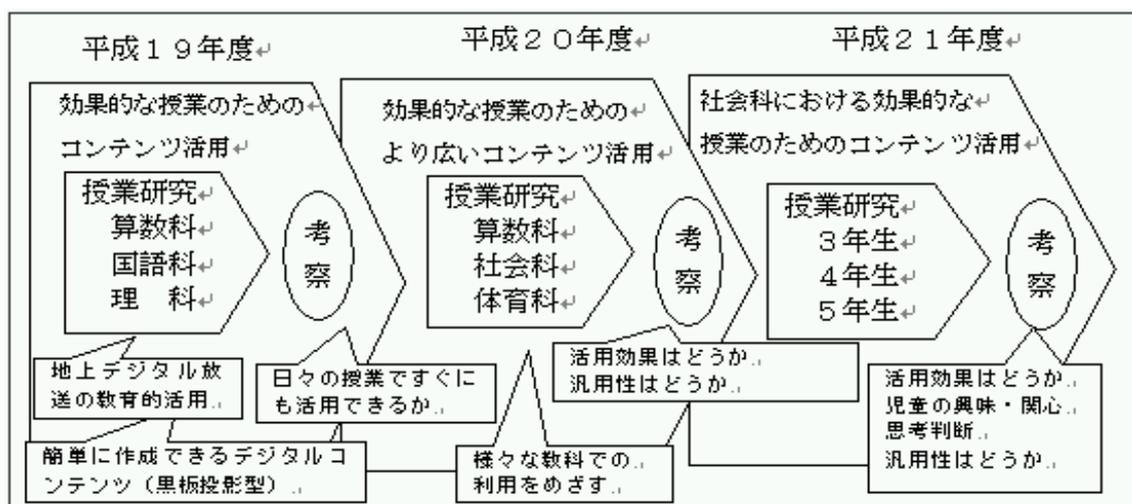
2 研究の内容

(1) 研究テーマ

デジタルコンテンツを活用した効果的な指導法の研究

(2) 研究方法

平成22年度は、社会科副読本「わたしたちの尼崎」の大改訂の年である。それに伴い、地域教材の開発に目を向けたデジタルコンテンツの開発を行い、そのコンテンツを用いた授業実践をすることにより、「ICTを効果的に授業で活用することによる「わかる授業」の実現」をめざす。また、授業の事前研究、授業の様子、事後研究を通して「活用効果」、子どもの「興味・関心」「思考・判断」「汎用性」等を考察し、テーマに迫ることにした。研究活動の流れは、【図1】の通りである。



【図1 研究の流れ】

3 デジタルコンテンツを活用した授業実践について

(1) 実践事例 その1

5年生の「工業を支える人々」においてデジタルコンテンツを使った授業を実践した。指導を進めるにあたっては、ただ、工業地帯や工業地域の名前を覚えるだけの学習にならないように、工業地帯や工業地域の位置が理解でき、様子もイメージしやすいようなデジタルコンテンツを準備した。授業では、どんな所に工業地帯や工業地域があるのか予想させ、デジタルコンテンツで日本地図を提示しながら位置を確認した。写真も提示し、児童がよりイメージしやすいようにと考え使用した。また、地域教材として、自分たちが住んでいる尼崎市も阪神工業地帯の一部であることを実感させるために、尼崎港の様子を撮影したビデオも使用した。

1. 実践の概要

目標

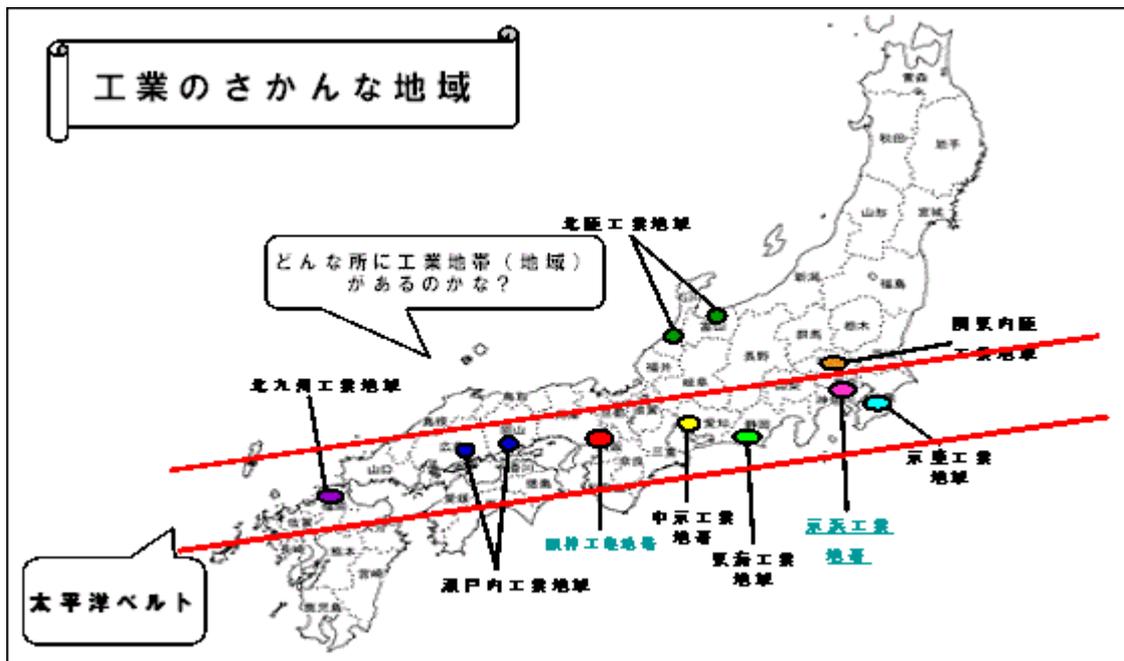
- ・日本の工業のさかんな地域をデジタルコンテンツを使ってつかむことができる。
- ・工業地域と土地の条件や交通網との関わりについて気づくことができる。

準備物

- ・フラッシュカード
- ・デジタルコンテンツ（パソコン、プロジェクタ）

展開

学習活動	指導上の留意点・支援	評価
1. 前時を振り返る	・どんな種類の工業があったかを 確認する	
2. めあてを知る	・めあてを提示する	
工業のさかんな地域は、どんな所かしらべよう。		
3. 工業のさかんな地域を予想し、どこに工場があるか調べる	・県名クイズを使い県名の習得もさせる ・地図帳を使い、調べさせるようにする	
4. 工業地帯・工業地域の名前と場所を確認する	・デジタルコンテンツを使って日本地図を提示し、教科書や資料集と対応させて確認させる	・意欲的に、地図帳や資料集を用いて調べることができたか
5. どんな所に工業地帯や工業地域があるのか考え、発表する	・地図帳や資料集を使って調べさせる ・これまで学習してきたことを想起させ、どんな所に工業地帯・工業地域があるのかを考えさせる	・工業がさかんな理由について地理的、社会的条件を関わらせて、自分の考えを持つことができたか



【図2 工業地帯と工業地域】



【図3 阪神工業地帯】

2. 授業の様子や感想等

子どもたちは普段の授業と比べて集中して学習に取り組むことができた。

また、工業地帯や工業地域がどんな場所にあるのか自分なりの考えを持つことができ、その考えをみんなで共有することができた。

3. 授業をふりかえって

日本地図を使ったデジタルコンテンツを利用したことで、子どもたちは、工業地帯と工業地域の場所と名前が理解しやすかったと考える。また場所と名前を確認した後どんな所に工業地帯や工業地域あるのかを考える時にも、子どもたちの考える手助けとなった。そして授業の最後に尼崎港の様子を動画で見せたことによって、自分たちが住んでいる街も阪神工業地帯の一部であることを知ることができ、興味・関心を深めるのに効果的だった。

今回利用したデジタルコンテンツでは、日本にある他の工業地帯や、工業地域の様子がわかるような写真を提示することが少なかったために、子どもたちにとってなじみの薄い地方の工業地帯や、工業地域の様子をイメージすることが難しかった。また子どもたちが自分で調べる時間をとりすぎたため、意見の交流をする時間が短くなり、話し合いがあまり深まらなかった。

4. まとめと汎用性

単元「工業を支える人々」の工業地帯や工業地域を覚えたり、どんな所に工業地帯や工業地域があるのか考えたりするのに活用できると考える。さらに各工業地帯や工業地域をクリックすることによりそれぞれの写真が見られるようにすることで子どもたちが興味・関心を持って学習に取り組むことができる。

教室が明るい場合、スクリーンが見えにくいことがあるので、教室に光が入らない工夫をしたり、黒板に映像を映したりするなど、映し方を考える必要がある。しかし、少しの工夫をすることで、簡単に教室でもパソコンとプロジェクタを使ってデジタルコンテンツを活用した授業をすることができると実感した。



【図4 社会の授業の風景】

(2) 実践事例 その2

4年生の社会科の授業において、デジタルコンテンツを使った授業を実践した。

学習の流れとしては、単元「地域の祭りを伝えていこう」の導入場面で、自分たちの住む町（校区）の昭和20年代の様子を撮影した航空写真と現在の様子を撮影した衛星写真を使って見比べてみて、町の様子の違いや移り変わりについて考える。その中でも、昔から変わらない場所や残っているもの（神社、寺、池や川、木々などがある場所、道路、田んぼ）があることについて着目させながら、学校や自分の家の周りが大きく変わってきたことを把握する。そして、変わらずに残っている場所（神社）には、「今まで残ってきた理由があるのではないか。」と問いかけ、その場所とともに受け継がれてきた行事（秋祭り）に目を向けさせるという流れである。

パワーポイントを使って、2枚の写真を順に提示していったり、2枚を並べて比較しやすく提示したりするようにした。また、プロジェクタを使い大画面でわかりやすく全体に提示することで、子どもたちが考えたり話し合ったりしやすくすることを意識して作成した。次時へのつながりとして、本時の最後に秋祭りの様子を撮影したVTRをDVDに編集し、動画で見せることにより興味関心を持たせることをねらった。

1. 実践の概要

目標

- ・自分たちの住むまち（校区）の昔と今の様子を航空写真で見比べて、移り変わりについて考える。

準備物

パソコン プロジェクタ スクリーン

DVD（秋祭り） 昔の祭りの写真 ワークシート

展開

学習活動	指導上の留意点・支援	評価
1. 今の写真（校区の航空写真）を見て、気づいたことを発表する	○写真に写っているものが、何であるかを捉えることができるよう補足説明をし、読み取らせる	○写真を見て気がついたことを意欲的に発表することができる（関心・意欲・態度）
2. 昔の写真（校区の航空写真・S23）を見て、気づいたことを発表する		
むかしと今のまちの様子をくらべよう		
3. むかしと今のまちの様子を比べる	○話し合う時に、一枚ずつで考えるのではなく、昔は△	○グループの話し合いの中で、自分の考え

<ul style="list-style-type: none"> ・ちがうところ (変わったところ) ・同じところ (変わらないところ) <p>をグループで話し合いながら 見つける</p>	<p>△だけど、今は△△だ、昔も△△で、今も△△だなど、時間的な経過を考えた発表をさせる</p>	<p>を伝えることができる (技能・表現)</p>
<p>4. グループで見つけたことを発表する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループ1つずつ発表 ・発表されていない意見があれば、もう一度発表する 	<p>○自分たちが見つけたことと、他のグループが見つけたことが同じか違うのか各発表をしっかりと聞いておくようにさせる</p>	<p>○自分たちのグループの考えが、他のグループと同じか違うかを捉え、発表したり聞いたりすることができる (思考・判断)</p>
<p>5. まちの様子の変り変わりについてまとめる</p>	<p>○変わってきたところばかりでなく、変わらずに残っている場所もあることを、写真で確認していく</p>	<p>○学習のまとめを、グループで協力してワークシートに書くことができる (知識・理解)</p>
<p>6. 次時の学習活動の予告をする (秋祭りのVTR視聴)</p>	<p>○昔から残る場所で行われている、年中行事(秋祭り)について学習を進めていくことを知る</p>	

2. 授業の様子や感想等

航空写真と衛星写真を使うことにより、子どもたちは興味を持って考えることができた。

2枚の写真を見比べて昔と今の違いや変わっていないところを見つける場面(図5)では活発に意見交流することができた。

グループ討議の場面では、グループ毎に手元のワークシートにも写真を載せ、より考えやすくなったこともよかった。



【図5 2枚の写真を見比べる】

次時の学習につなげるのに、秋祭りの様子をDVDで見せたことは効果があり、子どもたちに興味関心をもたせることができた。

3. 授業をふり返って

2枚の写真を大きな画面に並べることで、比較して考えやすい効果があった。

児童にも自分たちの住んでいる町の移り変わりに興味を持たせることができ、これからもっと調べていこうという意欲を持たせることができた。

話し合いの場面（図6）でも、児童が指示棒で指しながら全体に説明することができたので、わかりやすかった。

昔から残る場所に囲み線を入れたり色分けしたりすることで、位置関係の把握もしやすかった。今回は、グループ毎にワークシートを使って進める方法をとったが、時間の都合やクラスの実態にあわせて、全員（1人1人）にワークシートを持たせて、個人で考えさせ発表させることもできる。

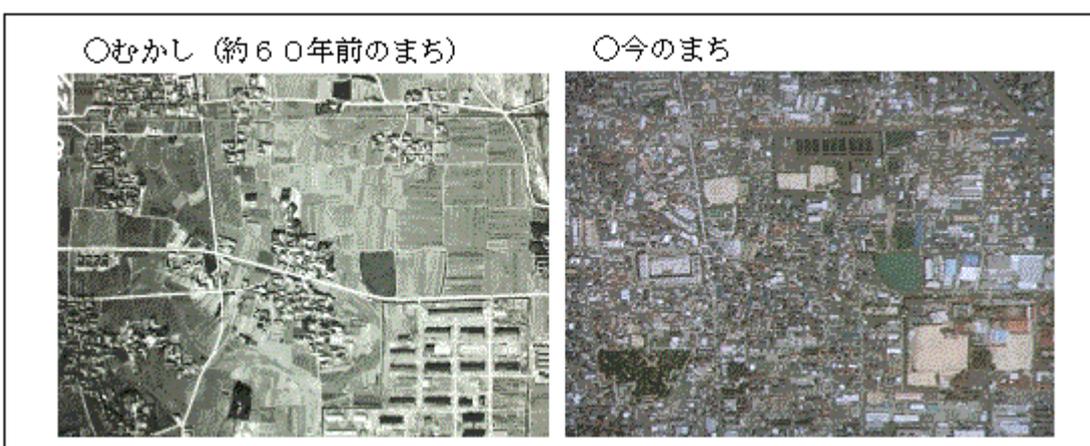
神社やお寺を見つけるには、もう一枚地図記号のある絵地図を用意して、子ども自身で見つけるような手だてをすると、地図記号の習得及び活用にもつながる。

4. まとめと汎用性

昔の資料もデジタル化することにより、容易に加工したり提示したりすることができる。スクリーンとプロジェクタとパソコンがあれば、手軽に提示することができ、汎用性は高い。



【図6 話し合いの場面】



【図7 提示した資料】

(3) 実践事例 その3

3年生の社会科の単元「市の人たちの仕事 はたらく人たちの思いを知ろう」においてデジタルコンテンツを用いた授業を実践した。児童は、自分たちが食べている野菜が、農家→JA→卸売市場→小売店・スーパーマーケットと流通することを既に学習している。ここでは、その仕組みを復習するとともに、生産者や販売者の悩みや工夫、思いを考えさせたい。授業においては、デジタルコンテンツの特性を考慮して、①大画面でコンテンツを視て知識を共有させる、②各自のペースで繰り返し視て、自分なりの考えや疑問を持たせるように活用した。①の取り組みとしては、農業についてのグラフ（副読本に記載）を正確に読み取らせるために、教師がスクリーンで各児童のパソコンに画像を転送し、電子ペンで書き込んで支援した。②では、『社会科デジタル掛図Ver 2. 尼崎市版』で、キャベツ作りには、水・太陽・土・農薬・機械が必要であること等を理解させた。また、見たこと＝「わかった」ではなく、実物に触れたり、書いたり、継続して自分で調べたりすることで、考えを深めさせられるよう指導した。

1. 実践の概要

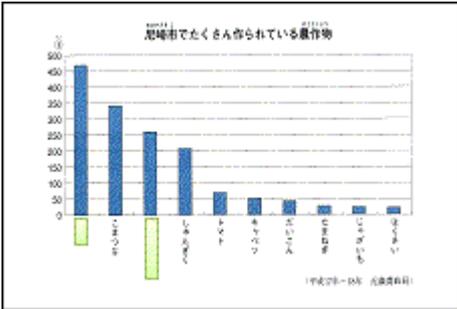
目標

- ・作物作りや出荷の様子や工夫を知ることができる。
- ・農家の人たちの思いを考え、感想や疑問を持つことができる。

準備物

- ソフト『社会科デジタル掛図Ver 2. 尼崎市版』
- 副読本の写真やグラフのデジタルコンテンツ
- ワークシート フラッシュカード 大きめの付箋（4色）

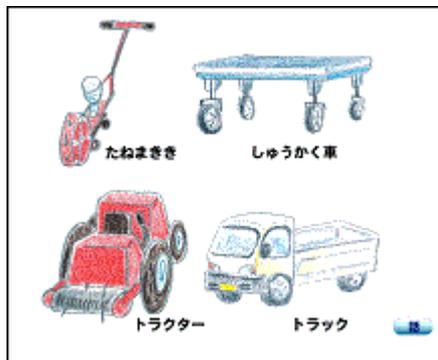
展開

学習活動	指導上の留意点・支援	評価
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;"> 農家の人たちのくふうをさぐろう </div> <p>1. 既習事項を復習する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・尼崎の農業 ・作物を作る工夫 ・出荷の工夫 <p>2. グラフを見て意見を発表する</p> <p>「どんどん減っている」</p> <p>「他の仕事をしている農家が多い。」</p>	<p>○尼崎の農家についてグラフやフラッシュカードで想起させる</p> <p>「品種改良」「JA」の意味や「ビニールハウス」の役割を確認させる</p> <p>○兼業農家が多いことに気づかせる</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>【尼崎でたくさんつくられている農作物】</p>	<p>○既習事項を理解しているか（知識・理解）</p>

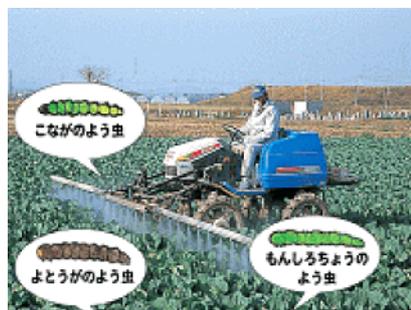
3. キャベツ作りの農家について考える

- ①水 ②太陽 ③土
- ④農薬 ⑤機械

○問いかけながら見せる
『社会科デジタル掛図Ver2. 尼崎市版』



【農家で使う機械】



【農薬の散布と害虫】

○農業に必要なことを理解できたか
(知識・理解)

4. 知りたいことを書き、発表する
「残った野菜は、どうするのか」

「機械の値段はいくらか」

「JAはどんなことをしているのか」

「尼崎の野菜を売っているのか」

○質問したい人を選んで、考えさせ書かせる（4色の付箋に）

○学習に関連した質問がかけられているか
(思考・判断)



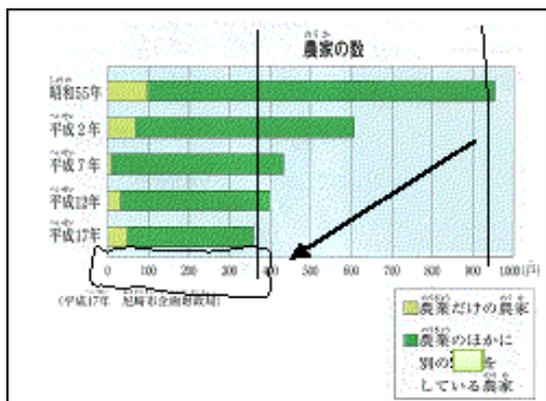
【各児童の課題設定の場面】

5. 次時の学習を知る

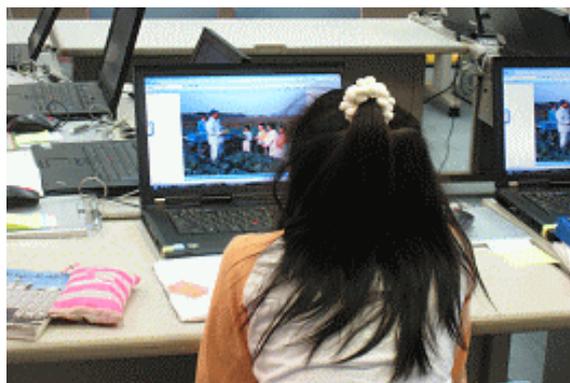
○おかし工場についてまとめることを知らせる

2. 授業の様子や感想等

「農家数の推移」などのグラフを理解することができた。また、一部を隠して質問したことは、既習事項の復習に有効であった。『社会科デジタル掛図』の活用では、〈子どもからの質問→農家の人の答え〉を音声で聞けるので、クイズ形式で楽しく学習をすすめることができる。学習活動4では、図9のように、視たいところを各自が選び、「農薬は悪いと思っていたけれど、虫に食べられるから必要。何回ぐらいまくのかな?」「機械は、いくらぐらいするのかな?」など自分なりの感想や疑問を持つことができた。



【図8 電子ペンの活用で支援】



【図9 選んで見る 知識の定着・思考】

3. 授業をふり返って

○ コンピュータ室での学習

コンピュータ室は、座席の配置が一斉授業には適さないこともあるが、図10のように「聞くときは、おへそを向ける」などのきまりを授業のたびに意識させると、有効に活用できる。スカイメニューを活用し、全員に指導者の画面を各パソコンに転送することができ細かい点も確認しやすかった。しかし、ノートパソコンはタイムラグが生じることがあるので注意したい。



【図10 大画面に集中 知識の共有】

また、事後研究会で学習活動4の発表では、児童が書いた付箋をOHCなどに写し出す手だてを考えると、さらにわかりやすいというご指導をいただいた。

○ 書く活動・実物の教材を重視

最後のまとめで、質問を書かせるだけではなく、「感想のまとめ→質問」の二段階にするとよかった。また、授業の最初または途中で、授業のゴールを意識させ、メモをとらせることで知識が自分のものとなり、最後の質問の内容がさらに深まったのではないかと反省している。

また、実物の教材に勝るものはない。授業では、図11のように、品種改良された形のいいさつまいもと曲がったさつまいも、まっすぐなきゅうりと曲がったきゅうりの値段やどちらを買うかを考えたり、近郊野菜のきくなやほうれん草を見せ、市内の野菜の種類やどこで販売されているのかを考えさせたりした。デジタルコンテンツを駆使した授業であったが、実物を見せた場面が、児童の反応が一番よかった。さわったり、においをかいだりして、児童は野菜に愛着がわいたようだ。

4. まとめと汎用性について

今回の授業では、副読本の写真を大きく映し出し、「ここはおさえたい」というところは「一部隠す」という方法を用いたが、シンプルなものほど活用しやすいと実感した。『社会科デジタル掛図』もシンプルな形式で、農家以外にも、スーパーマーケットやお菓子工場などのしくみや働く人たちの様子を、クイズのような感覚で学習することができた。何度も活用できたので、児童もすっかり操作に慣れていった。

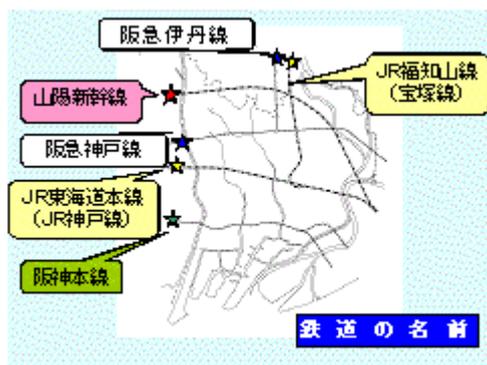
また、副読本の写真は、ほとんどデジタル化し、普段の授業でも活用している。その時は、児童の集中力は格段に違うと感じる。図12のように尼崎市のことで知らせておきたいことは、授業の初めにドリル的に使用することもある。

しかし、視たことはわかったことでないので、ノートやワークシートで基本的な知識や、自分の感想はしっかりと書かせることが大切である。今回は書いた疑問を農家や卸売市場の方へお手紙で質問するなど、次への活動に広がった。

これからも、書く活動・実物の教材を大切にしながら、シンプルなデジタルコンテンツを効果的に活用した授業のデザインを考えていきたい。



【図11 形がいい値段の高い野菜
曲がった安い野菜 どちらを買う？】



【図12 ドリル学習 (パワーポイント)
☆をクリックすると鉄道名がわかる】

(4) 実践事例 その4

5年生の「工業を支える人々」の単元の「世界とつながる自動車」の場面においてデジタルコンテンツを用いた授業を実践した。指導に当たっては、自分たちの生活は、外国との貿易と大きく関わっていることを感じられるようにするとともに、貿易の諸問題について知ることができるようにした。そして、これからの貿易や世界との関わり方について自分なりの考えをもてるようにしたいと考えた。

今回作成したデジタルコンテンツは、世界地図やグラフを取り入れ、それらの見方を共有化できるように考えた。また、比較的短い単元であること、すべてを関連付けて学習したほうがより理解しやすくなると考えたことから、単元全体をスライドショーにまとめた。

このコンテンツを使うことで、貿易を通じた世界の国々との関わり方をより具体的に理解し、自分の考えを深めることにつながれば、と考えた。

1. 授業の概要

目標

- ・日本の貿易の特色や問題をまとめることを通して、これからの貿易の進め方について考えをもつことができる。

準備物

デジタルコンテンツ (パソコン, プロジェクタ), ワークシート, フラッシュカード

展開

学習活動		
<p>1. 前時をふり返る</p> 	<p>○デジタルコンテンツを使い、尼崎や日本と世界のつながりを思い出させるようにする</p> 	
<p>2. 輸入品, 輸出品ともに「機械類」がなぜ一番多いの</p>	<p>○日本の会社が海外に製造工場を作っていることを知り、加工貿易だけではないことに気づかせる</p>	<p>○理由づけをして考えることができる</p>

輸入品	輸出品
<ul style="list-style-type: none"> 鉄鉱石 石油 小麦 液化ガス 魚・肉類 精密機械 	<ul style="list-style-type: none"> 鉄鉱石 自動車 精密機械 自動車部品 船舶 有機化合物

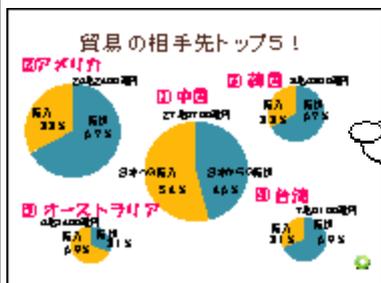
日本に輸入される日本の工業生産品は、日本へ輸出される日本の工業生産品と比べて、どのような違いがあるか？

○マレーシアにある日本の会社の工場の写真（デジタル掛図）を提示し、理解が深まるようにする

3. グループごとに貿易の相手先トップ5に入る国を考える

○それぞれのグラフから、特徴を読み取り、理由づけをして答えられるようにする

○グラフから特徴を読み取ることができる



その他の国とはどんな取引をしているのかな？

4. 製品によって輸送の方法が違うことを知る

○船と飛行機で運ぶそれぞれの長所と短所を理解し、製品にあった運び方を知ることができるようにする

○船と飛行機の輸送の違いに気づくことができる

<p>長所 大量のものを安く運ぶことができる。 輸送費が安く済む。</p>	<p>長所 迅速に運ぶことができる。 輸送費が高くなる。</p>
<p>短所 輸送費が高くなる。</p>	<p>短所 輸送量が限られており、 重いものは運べない。</p>

大きなもの 重いもの 値段の高い工業製品 新鮮な素材

輸送のポイント

5. 日本の貿易についてまとめ、これからの貿易の進め方について自分なりの意見をもつ

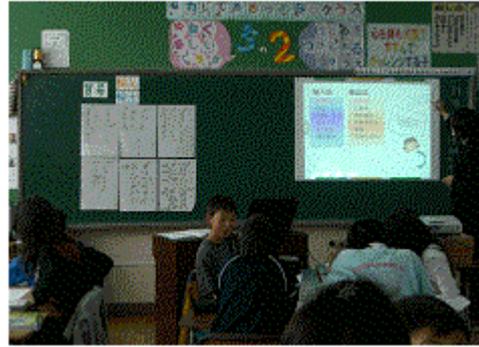
○これからの食料生産や自動車生産の学習も想起させるようにする
 ○貿易の相手国の立場に立って考えさせるようにする

○日本の貿易の問題に気づき、これからの進め方について考えをもつことができたか

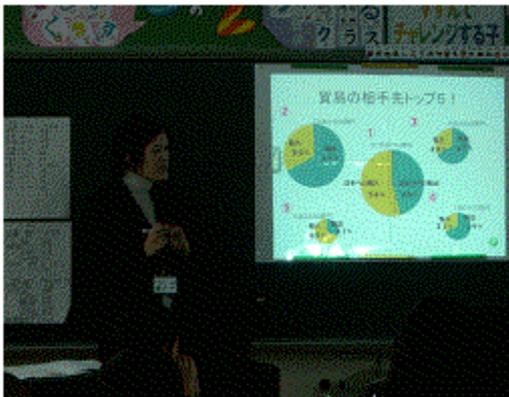
2. 授業の様子や感想等

世界地図を提示した場面では、今回の単元で重要な国の名前など必要なことだけを表示できることと、大きく提示できることで、子どもたち全員と確認することができた。

また、グラフから読み取る場面では、ホワイトボードシートにスライドを映し出すことにより、線を書き込んだり、メモを書いたりして、説明することができた。



【図 1 3 シートに書き込む】



【図 1 4 グラフの読み取り】

自分たちの意見を持つことの手助けとしてクイズ形式のスライドを使用したのが、予想していたよりも子どもたちの反応がよく、意見交換を積極的に行うことができた。

授業後に、子どもたちに感想を聞くと「楽しかった」「一人で資料集をみるよりも分かりやすかった」という声が多かった。普段は社会の授業は苦手、と感じている子どもからも同様の感想を得ることができたので、興味・関心を得るという点では有効であると感じた。

3. 授業をふり返って

いつもは社会の授業は楽しくない、と感じている子どもたちも積極的に取り組み、自分の考えをもつことができたのは良かった。グラフの見方が算数で学習するよりも早く出てきたことが、理解が難しかったことの原因のひとつであったことがわかった。

前時に尼崎と世界の関わりについて学習していたため、自分たちの住んでいる地域と日本全体とを比べることができた。



【図 1 5 前時に使用したスライド例①】 【図 1 6 前時に使用したスライド例②】

予想していたよりも、「日本の貿易相手国トップ5」を考える場面で子どもたちの意見が多く出た。盛りだくさんの内容にしてしまったため、折角の子どもたちの意見をひろうことができず、残念だった。デジタルコンテンツは、資料の提示に適していると考えていたが、それだけではなく、使い方によっては子どもたちの意見や考えを引き出すことにも効果を発揮できるのでは、と感じた。

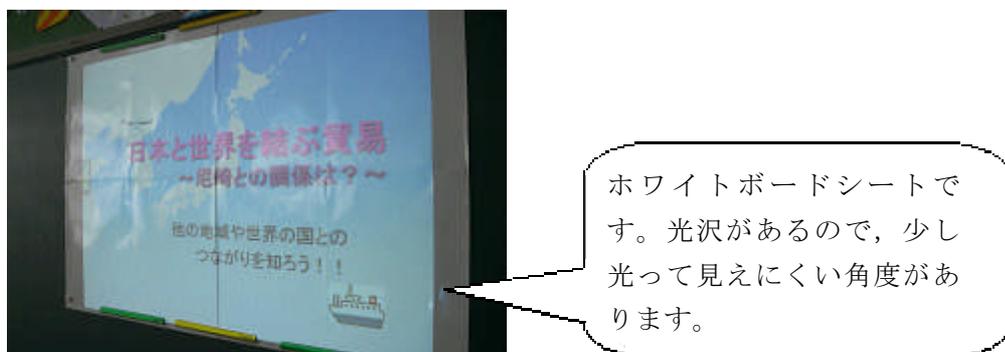
4. まとめと汎用性

今回の授業で使用したような自作のデジタルコンテンツでは、使いたい資料だけを取り入れたり、子どもたちの実態に合わせてたりすることができる。また、次時の授業で復習する場面では、同じスライドを映し出すことにより、思い出しやすく、時間も短縮することができる。

プロジェクタを使用して教室でスライドを映したが、天気の良い日はカーテンを閉めても明るく、見えにくいことがあった。教室の前方だけでも暗幕などを用いるなどの工夫も必要であると感じた。

今回使用した「ホワイトボードシート」は、紙でできているので、使用しないときは小さくたたむことができること、ホワイトボード用のマーカーを使えば書き込みができ、消すことができること、安価であることで大変便利であった。電子黒板ほどではないが、代用品として使用できると感じた。特に、社会科の場合はグラフや写真などを取り入れることが多いため便利であると感じた。

社会科で初めて自作のデジタルコンテンツを使い授業を行ったが、子どもたちが関心をもって集中して前を向き、進んで自分の意見や考えを持つことの大きな手助けになったように感じた。これからもいろいろな場面で活用していきたい。



【図17 ホワイトボードシートに映したデジタルコンテンツ】

4 研究のまとめ

今年度は、3年生「市の人たちの仕事 はたらく人たちの思いを知ろう」、4年生「地域の祭りを伝えていこう」、5年生「工業を支える人々 工業のさかんな地域」、「工業を支える人々 世界とつながる自動車」の授業で、デジタルコンテンツを使った授業を実践した。どの授業においても、授業のはじめにフラッシュカードやクイズを使って既習したことを確認する場面を設定した。場面がテンポよく切り替わることにより、子どもたちもリズムよく答えることができ、知識・理解の習得に役に立った。

また、地域教材に目を向けたデジタルコンテンツの開発も手がけた。そして、開発したコンテンツを授業で使い、その有効性について様々な面から検証を行った。3年生の尼崎の農業推移のグラフ、4年生の今と昔の航空写真や地図、5年生の阪神工業地帯の一部である尼崎港のビデオ等である。これら、子どもの実態に即したコンテンツの活用は、子どもの興味・関心を高めるのに大いに役立った。また既存のコンテンツであるデジタル掛図は、授業で押さえないポイントをしっかりと提示でき、児童の思考力を高める一助となった。

5 おわりに

本研究では、ICTを普通教室の中でのという理念のもとで研究を進めてきた。兵庫県のネットディ事業により、尼崎市内各学校の普通教室のLAN整備率が高くなってきている。また近々、大型液晶ディスプレイの各教室導入により、プロジェクタやスクリーンを用意なくても、いつでもICTを活用した授業が手軽にできる環境が整ってきている。授業へのICT活用には、デジタルコンテンツをいかに有効に授業に内包できるかが鍵となってくる。

授業において、デジタルコンテンツをいつ、どの様な場面で、どんな目的で使うのかを考えて授業を設計・展開していく教師の授業力が大切である。

本部会においては、この流れのもと、「多くの教員が使えるデジタルコンテンツ」をめざし、コンテンツの開発と授業実践を行ってきた。その一つが社会科副読本「わたしたちの尼崎」の一部デジタル化の試みと、それらを使った授業実践である。地域教材をデジタル化することには、子どもたちの授業に対する興味・関心を高めるのに非常に有効であった。今後も、デジタル掛図という既存のコンテンツを使った授業実践と併せて、「コンテンツの有効性」「子どもの興味・関心」「思考・判断」「汎用性」という視点から、だれでも使える、また使ってみたいと思えるデジタルコンテンツ開発に力を入れていきたい。

参考文献

- ・小学校学習指導要領総則編（平成20年度） 文部科学省
- ・小学校学習指導要領社会科編（平成20年度） 文部科学省
- ・中学校学習指導要領総則編（平成20年度） 文部科学省
- ・中学校学習指導要領社会科編（平成20年度） 文部科学省
- ・教員のICT活用指導力向上研修テキスト2008 教育情報科推進協議会
- ・教育の情報化の推進に資する研究（ITを活用した指導の効果等の調査書）報告書
独立行政法人メディア教育開発センター
- ・ひょうご教育創造プラン(兵庫県教育基本計画) 兵庫県教育委員会

公立学校の社会的存在と地域連携に関する考察

指導主事	上 原 郁 雄
研究員	比 嘉 勲 (小田南中)
〃	橋 本 武 史 (小田南中)
〃	中 島 将 雄 (園 田 中)
〃	藤 田 孝 幸 (武庫南小)

【内容の要約】

学校・地域の連携から

- 1 学校を取り巻く状況について、地域の学校に子どもを通わせている保護者と保護者以外の地域住民に関し調査を行ったところ、現在、地域の学校に通う子どもがいなかったり、地域の学校との接点がない地域住民は、地域の公立学校に子どもを通わせている保護者よりあいさつ程度の関わりは多かったものの、密接な関わりは少ないことがわかった。
- 2 保護者と教員の望むものの方向性の違いにより発生する問題について、その違いの内容について調べた。評価、問題行動、安全、については概ね同一の結果が得られた。
- 3 1及び2より、単に地域コミュニティの一部が学校であるのではなく、学校を地域コミュニティ参加への機会とした学校と地域相互のメリットでの連携が大切でありその為の簡単なモデルの考察をしたことで、今後地域と学校の関わりについて考えていける基礎となったと考える。

キーワード：連携，地域，地域社会，公立学校

1	はじめに	47
2	研究について	49
(1)	研究テーマ	49
(2)	方法	49
3	結果と考察	49
4	おわりに	57

1 はじめに

本市の平成19年度研究紀要の「問題行動の広域化」1)において、「学校、地域および関係機関との連携」について考察をおこなった。しかし、学校と地域社会との関係について、問題行動のみならず日常的な影響も含め、それぞれのおかれた立場を明確にすることで、連携する場や方法について、より実質的な新しい関係を構築できるのではないと考えた。

公立小・中学校は、私立学校等へ通学する者を除き校区の子どもを受け入れなければならないことから、必然的に地域との関わりは密接となるはずである。しかし、地域の教育力の低下や地域社会の希薄化などと言われるように、地域差はあるものの、地域での活発な活動は減少傾向にあり、子どもを対象とした活動がほとんどなされていない地域も存在する。一方、本来地域社会が持っていた習慣や伝統なども学校が肩代わりをしているケースもある。

そして、地域社会には様々な階層や利害が混在し、一定の基準で括れるものではない。しかし、地域社会は、その範囲をもたない様々な利害と共に学校との関わりをもってくる。このようなことが、現在まで幾度と無く繰り返され、学校と地域の立場は明確さを失い、地域の教育力の低下や地域社会の希薄化も伴い、善意と規範意識から学校の責任の範囲を広げて来た結果、地域の教育力ばかりか家庭での教育力も奪ってしまったのではないだろうか。

すでに、学校の責任範囲を広げすぎて、教育は教師任せというわけにはいなくなってきた。学校も、様々な事象をすべて抱え込んでしまうのではなく、保護者や地域の人たちが関わっていく子育てを地域にやってもらうことが大切になってきている。それに合わせて、学校自体も、変わっていかなければいけないと考える。

2006年3月に文部科学省が公表した義務教育諸学校における学校評価ガイドライン 2)は、①学校運営についての自主的組織的改善、②外部評価の実施公表による保護者・地域住民の信頼獲得と学校運営への参画、③評価結果に応じた教育の質の保証の3点を目的として述べられている。

それ以前、2004年11月文部科学省の「学校評価及び情報提供の実施状況」3)では、学校評価を通じて得られた成果とは、主として次年度の取り組みの参考、改善点の明確化、教職員の共通理解の推進など、自己点検的な側面が中心であった。

しかし、ガイドラインでは、外部評価自体が保護者・地域住民に対するアカウンタビリティと相互理解の促進として解説され、「地域の教育力」や「学校・地域の連携」をキーワードとして用いられるのである。これらのキーワードは、誰から見ても「良いこと」であるが、実際には、主体は学校であり、その責任範囲の拡大が見込まれるだけで、学校と地域の連携や地域の教育力を高めるまでにはいかないであろう。(図1)

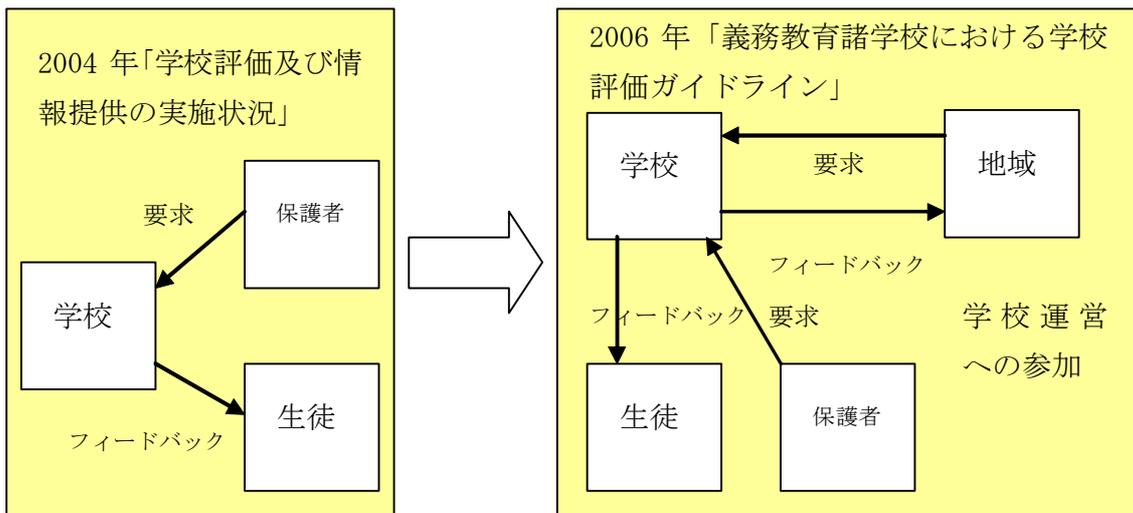


図1 学校評価の移行

学校評価のように、学校が責任範囲を広げ、肥大しながらも積極的に地域との社会的存在を高めていこうという行為とは別に、学校へ理不尽な要求をする保護者も増えてきていることは、学校関係者や研究者ばかりではなくマスメディアでも取り上げられている。そこには、本来の教育機関への期待とは別なものも多く含まれてきている。学校がサービス産業化し保護者や地域がそれを利用するお客となってしまうのではないかと考えられる。客は自分の欲するサービスを受けようとするが、公立学校においては、かゆいところに手が届き全てを満足させるような所ではない。保護者は、小学校から中学校、高等学校と子どもの成長に合わせて一緒に努力してもらわなければならない。

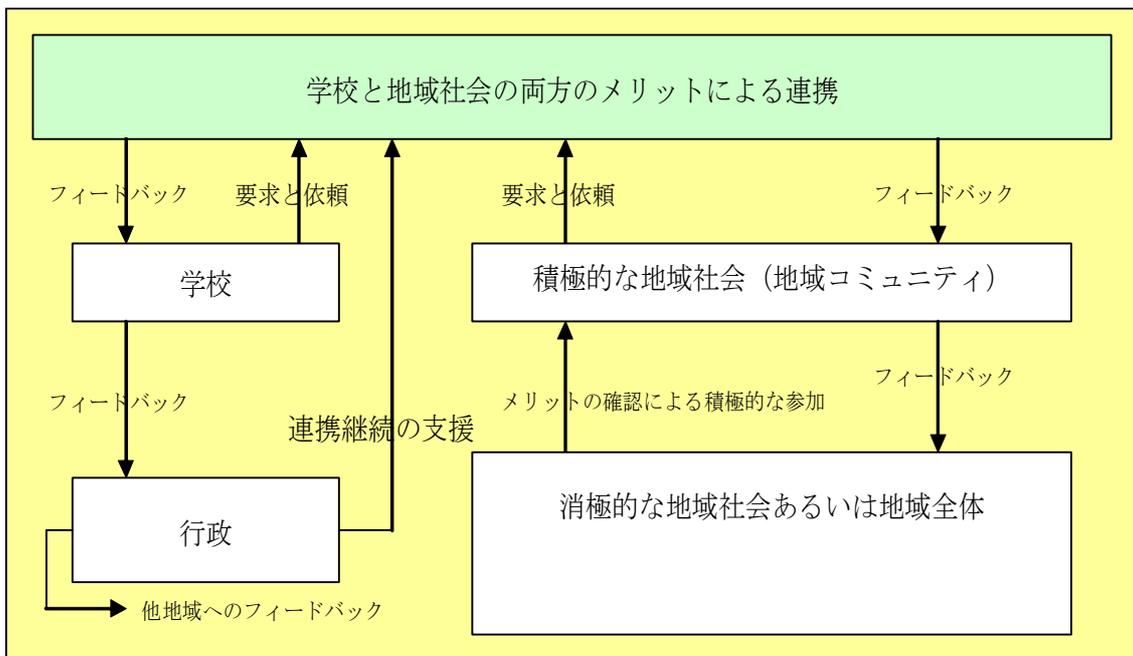


図2 学校と地域の連携

現状では、一定期間に行われる行事などのつながりは確保できるものの、漠然とした地域全体に関するつながりは続いていく可能性は低い。その為、仮説として、学校と地域の連携を、互いのメリットによる連携を表した図である。(図2)

ここで、学校と地域の他に大切な役目を負う行政(自治体)がある。本来、円滑なコミュニティの形成・運営の援助は行政の仕事である。しかし、行政がその主導権を担えば、地域の主体的な発展は望めない。地域の主体的な取り組みが、地域の教育力の向上に繋がっていくと考え、地域の主体的な取り組みや学校と地域の連携継続の支援が、行政としての方向ではないかと考えた。さらに、合理的にできあがった地域をモデルとし、他地域へのフィードバックもその役割として重要ではないかと考えた。なぜならば、地域格差が大きく現れることによって起こる弊害が考えられるからである。このような自主的な地域社会の構成は、現在のような学校依存から、学校も含めた地域の活性と向上に繋がると考えた。

本研究においては、単に地域コミュニティの一部が学校であるのではなく、学校を地域コミュニティ参加への機会とした学校と地域相互のメリットでの連携が大切でありその為の簡単なモデルの考察をしたことで、今後地域と学校の関わりについて考えていける基礎となったと考える。

2 研究について

(1) 研究テーマ

学校と地域との関わりについて、教師、保護者及び保護者以外の地域住民を対象とし、面接及び質問紙によるデータ収集およびその分析を通して、①保護者及び保護者以外の地域住民と学校がお互いに望んでいること、あるいは望んでいるだろうと思っていることの差を明らかにすること。②地域コミュニティを形成する中で、学校の役割を明確にし、保護者を含めた地域社会にその責任の一端を戻し、そこから学校と地域の連携を始めることにより、地域の教育力の向上の手がかりとなればと考える。

(2) 方法

本稿は面接と質問紙による回答を分析し考察する。基本事項の確認について、妥当性と信頼性を確保するためにデータ収集の前に目的を明確にする必要がある。本研究は、多角的な現象の把握を必要とするため、問題検索型のデータ収集を行い、必要が生じた時点で、焦点を絞った現象の理解を目的とした仮説検証型を採用することにした。次に正確さについて回答の偏りやばらつきの問題をどのように考えていくかという問題について、信頼性は高いが回答の偏りがある測定結果もあり得るという判断から、今回は回答の偏りに関して測定値を信頼した。さらに、質問の内容の吟味をするとともに同じ構成概念についての複数の指標を利用することも前提とした。

3 結果と考察

保護者と保護者以外の地域住民の学校への要求（期待）と教師の考える保護者及び地域住民の要求との違いを調査した。

各項目とも50%を超える期待があり教師も予測は出来ている。しかし、教師の予測は信頼関係を除きどの項目においても高いものになっている。（表1）

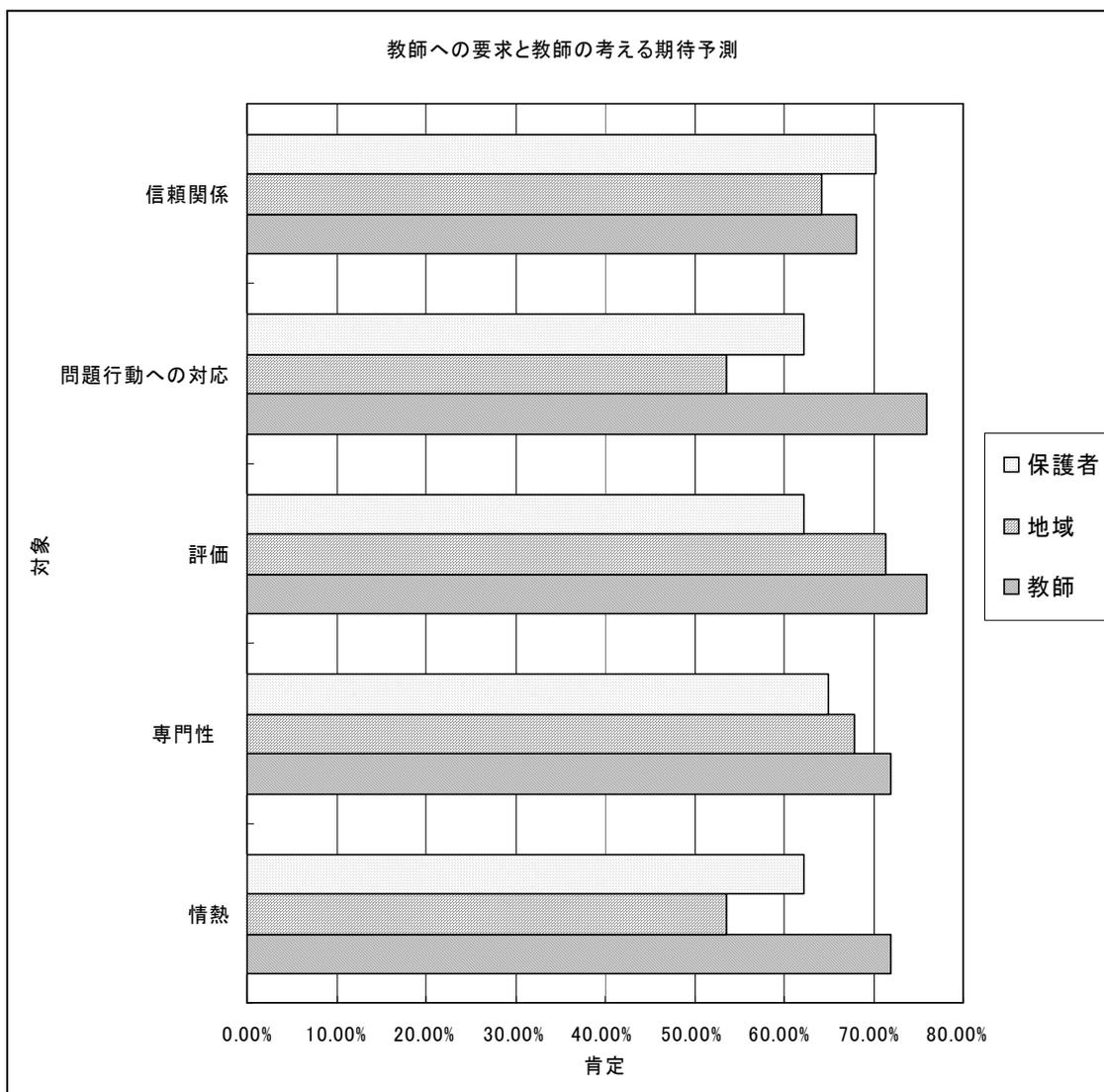


表1 教師への要求と教師の考える期待予測

更に、学校に期待することは「社会の基本的なルールやマナーを身につけること」「学力をきちんと身につけること」「多くの友人をつくり楽しい学校生活を過ごすこと」と続く。具体的な項目を設定すると期待度は増す。細分化して実感しやすくすることで、学校への期待は現実的なものとなる。（表2）

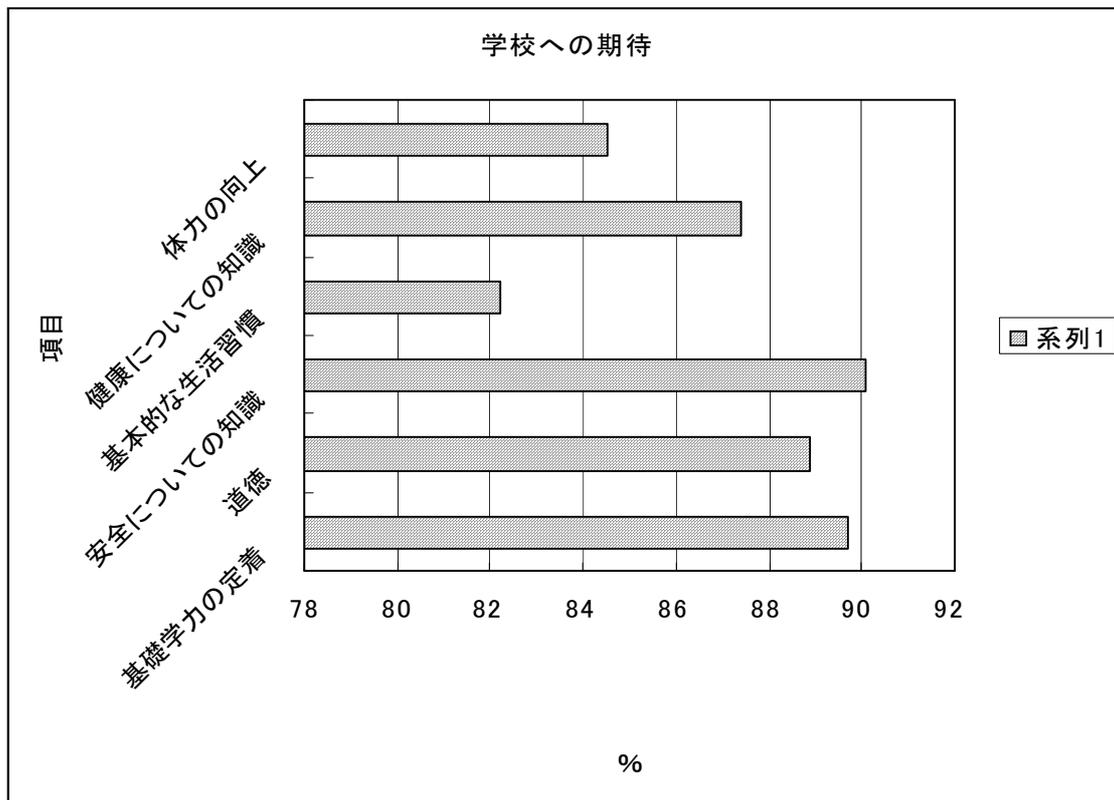


表2 学校への期待

学校への期待と教師の予測に大きなずれは存在しなかった。しかし、その回答は大きく二分される。表3は表1の専門性で期待の回答をした対象が評価に関しても期待しているのである。このことは、教師、保護者、地域の3者においても同様の傾向が見られる。

	評価	
	いいえ	はい
専門性	いいえ	はい
いいえ	68.97%	31.03%
はい	13.11%	86.89%

表3

さらに、表4では情熱を期待している者が信頼関係にも期待をしていることがわかる。

	信頼関係	
	いいえ	はい
情熱	いいえ	はい
いいえ	79.41%	20.59%
はい	3.57%	96.43%

表4

これらを比較すると、教師個人の人間性に期待するグループと教師のスキルに期待するグループに分けられる。同様に情熱と問題行動の対応についても同じ結果が現れた。(表3、表4、表5)

情熱	問題行動の対応	
	いいえ	はい
いいえ	85.29%	14.71%
はい	7.14%	92.86%

表5

教師個人の人間性に期待するグループをa群とし、スキルに期待するグループをb群とする。a群の特徴としては、①地域の行事等への積極的な参加をしている場合も多く見られる。②子供が課外クラブに所属している。a群は、いわゆる「お任せ」であるが、教師との相性で、学校への協力も期待できると考える。

b群の特徴は、教科の学力向上に関心が高く、学校への期待は、評価や専門性に寄っている。PTAや地域への参加はa群よりは少ないが大きな差はみられなかった。

a群、b群に属さない数は少ないもののその特徴は3種に分けることができる。

①ほとんどの項目に期待するタイプ、②ほとんどの項目に期待しないタイプ、③それ以外のa、b群にも属さない規則性のないものである。①のほとんどの項目に期待するタイプをc群、②のほとんどの項目に期待しないタイプをd群、③のそれ以外でa、b群にも属さない規則性のないものをe群とする。(図3)

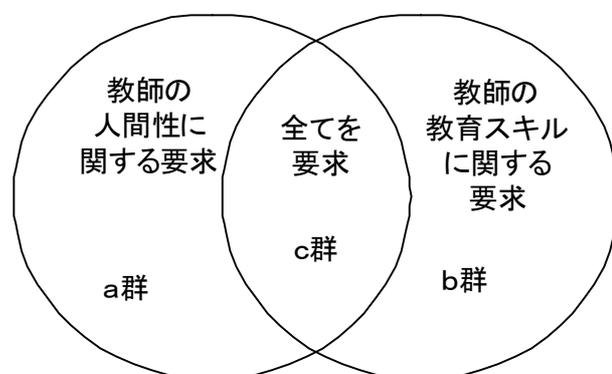


図3 学校への要求

c群は地域よりも保護者にみられる。学校への依存が強いが過度に期待しているタイプである。これは、学校のサービス産業化によって発生したいわゆる「客」ではないかと考える。要求が多いため、期待と現実とのギャップも他よりも多く感じる場合もある。学校へ理不尽な要求をする保護者も増えてきていることは、学校関係者や研究者ばかりではなくマスメディアでも取り上げられている。このことについて、門脇4)はクレームの主演は若い世代に属すると指摘し、小野田5)は、保護者の本当の思いは別のところにあると踏まえ、学校で何が起きているかを正確に把握する必要性を指摘し、学校に対

する要望の変化を示している。

学校は、すべてのお膳立てができたところではなく、子どもも保護者もなにがしかの努力を必要とし、その努力によって成長していく場所であるとの認識を持たさなければならぬ場合が出てくると予想される。

d群は保護者より地域にみられる。これは子供が学校に通学していないため関心がないと考えられる。このタイプは近所づきあいも活発ではない。(図3)

a群b群c群は、学校に対し何らかの期待をし、そのことから学校を介した地域コミュニティへの参加も可能であると考えられる。

子どものいる保護者と学校へ通学する子どものいない地域住民との近所づきあいの状況をみると、「ほとんど無い」は保護者1.1%、地域住民8.1%と地域住民の比率が高い。

近所づきあいの内容について比較してみると、「立ち話」(保護者49.6%、地域

45.7%)、「子ども同士の行き来」(保護者31.5%、地域住民12.7%)そこで、近所づきあいが子どもとおして形成されていると考えられる。

記述には、「まちづくりは大切だ。」「行政ももっと協力してほしい。」「積極的に関わりたい」と多くの保護者が地域活動に関心を示していることがわかった。

そのことから、地域のコミュニティに関して学校との連携は、初期段階では学校を発信源として形成していくことが必要ではないかと考えた。子どもを通じたつきあいからの発展的な地域コミュニティを子どもが地域の学校を卒業してからも続けていけるように形成していくことで、一時的なコミュニティから次の世代も含めつながるものへと変わるのではないかと考えた。

	子どもの行き来	趣味	立ち話	あいさつ	ほとんど無い
教師	0%	0%	1.3%	4.6%	79%
地域住民	12.7%	19.9%	49.6%	54.1%	8.1%
保護者	31.5%	5.2%	45.7%	41.3%	1.1%

表6

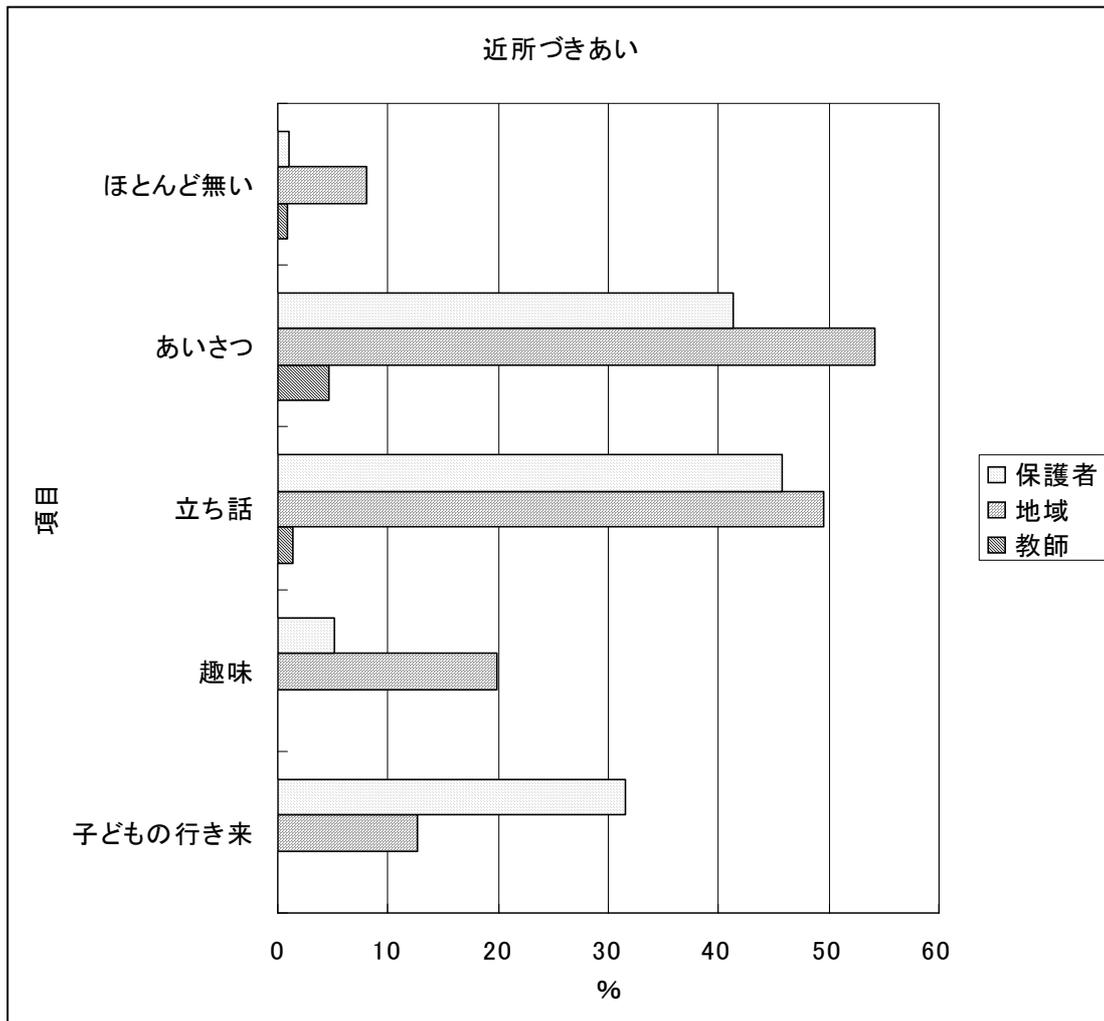


表7 近所づきあい

単に学校と地域社会の連携という漠然としている。学校と関係機関の連携は目的も明確で連携対象も限られてくる。では、学校と地域の連携について、どのような連携が双方向のメリットを生み出すのか、それは、地域の教育力と安全である。

地域の教育力について、地域人材の活用、地域施設の活用、地域素材の題材化、地域自然環境の活用、地域社会との交流という要素を、信州大学教育研究室 8)は、「地域の教育力とは、子どもたちの学びにおいて、優れた影響を与えるであろう地域社会に存在する、あらゆる人、物、自然等、を指し、地域に根付いた教育資源となり得る価値あるものにとらえる」と定義している。さらに、地域社会が担う地域教育力である。地域のコミュニティが社会規範の維持、地域防犯、異年齢交流、伝統行事の維持などがあげられる。

学校と地域の教育力との関係がもたらすメリットについて、前述した学校評価は、保護者に対するメリットはあるものの、過大な要求が行われる可能性もあり、教員にとってのリスクもある。(図4)

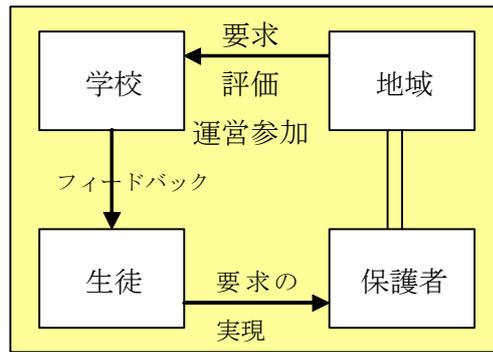


図4 学校評価

地域人材の活用は、個人へのメリットはあるが、地域社会へのメリットは少ない。
(図5)

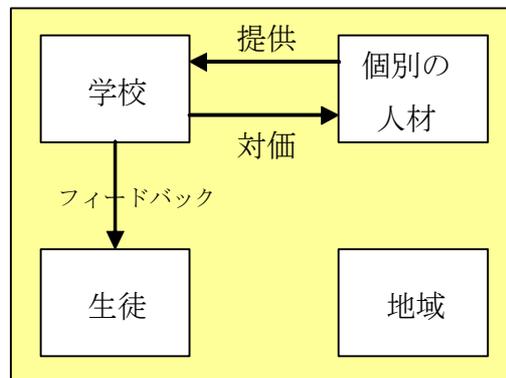


図5 地域人材

地域社会が担う地域教育力は、地域社会に大きなメリットがある。放課後など学校が直接関わっていない時間帯での安全など学校と地域社会がメリットを共有できる。
(図6)

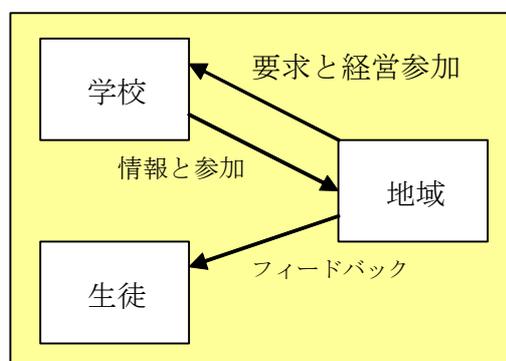


図6 地域教育力

そこには、学校と地域社会の連携と調整が継続的に行われないと活動が停滞する。よって、地域社会と学校の両方にメリットがあると考えられるのは地域社会が担う地域教育力であると言える。

コミュニティの形成は単純で短期間であれば早期の実現も可能であるが、地域のコミュニティとしては不完全であり、学校にとってメリットは少ない。学校への理解がある長期にわたるコミュニティを形成することで、そのメリットは現れる。しかし、漠然としたテーマではなく、より学校に近い関係での地域コミュニティの形成が重要である。

図7は、上述の地域コミュニティ形成をモデル化した物である。学校におけるPTA活動を地域の活動まで広げることで、生徒が卒業した後も地域活動を続ける可能性を考えた。PTAを中心とした始まった活動は、学校との距離が近い物であり、その後の活動もその傾向が継続されると考えられる。

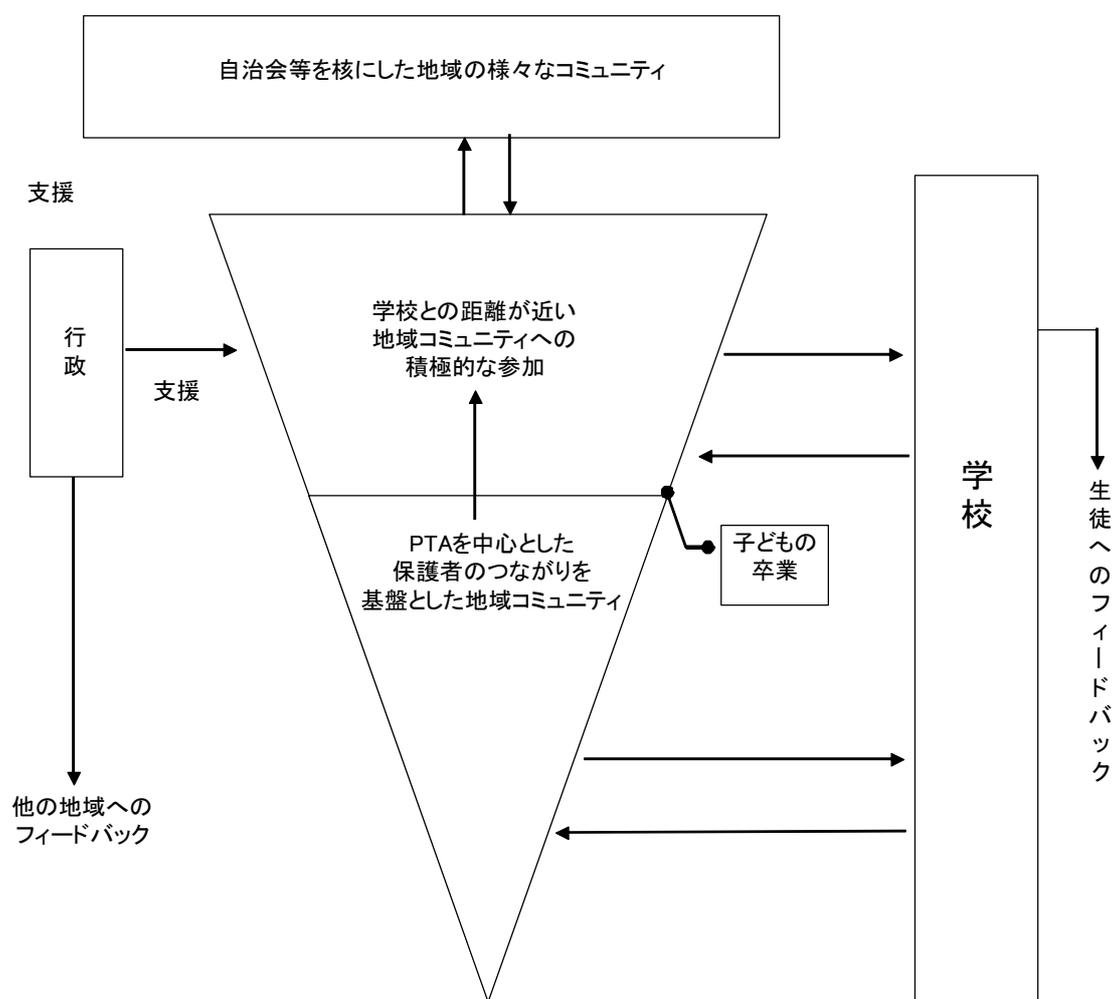


図7 学校と地域の連携に関するモデル図

子どもが卒業してからの活動は、更に地域への広がりが期待できる。しかし、1校区単位のコミュニティであれ、継続させるには様々な問題がある。学校との連携においては双方のメリットが働く関係上形を変えながら継続していく可能性もあるが、地域全体

の観点から考えると、行政の支援は必要且つ不可欠である。

さらに、成功している地域コミュニティのシステムはモデルとして、行政が他の地域に紹介していかなければならない。このようなフィードバックは行政にとっても有益なものであると考える。

4 おわりに

今回「公立学校の社会的存在と地域連携に関する考察」というテーマで考察を行ってきたが、教師、保護者そして地域住民において、学校への要求や教師の予測もほとんど差はなかった。今回の調査では、連携を阻害する材料が見えてくると予想したが、地域において学校は、教師が考えている学校と大差なく、教師の予測は、ほとんどの項目において保護者や地域住民の要求を上回る結果となった。このことに関して、教師の自覚が高いと考える。しかし、学校を取り巻く問題は次々とその様相を変え現れる。教師はその新しい事象に対し、後追的な対処や事後処理に日々追われている。学校だけで子どもたちの安全確保や成長の助成していくことは困難であり、地域を切り離して考えてはいけない。公立小・中学校が地域の一部であり、地域コミュニティの基礎となり得る可能性は、子どもを介したつきあいから発展させる基盤を学校が中心となって行うことで、学校にとって大切なのは、学校がサービス産業化し責任範囲を広げるような方法を改め、保護者や地域との関係性を強めることである。すなわち、学校は保護者や地域に教育の現状を公開し、必要な協力を求め、また保護者や地域からの協力要請には進んで協力するような関係性を築くことが大切ではないだろうか。保護者や地域が学校に依存するのではなく、学校と共に地域の教育を向上させるという意識を持ってもらい、学校にも保護者や地域に教育の正しい知識や情報を提供する姿勢が求められる。

文献

- 1) 研究報告書「紀要45号」尼崎市立教育総合センター2008
- 2) 文部科学省「義務教育諸学校における学校評価ガイドライン」2006
- 3) 文部科学省「学校評価及び情報提供の実施状況(平成15年度間調査結果)」2004
- 4) 門脇厚司「クレーム社会を加速する若い親たちの特性」児童心理61(8)
- 5) 小野田正利「学校への“無理難題要求”の急増と疲弊する学校現場―「保護者対応の現状」に関するアンケート調査をもとに」季刊教育法 147
- 6) 藤田英典「教育改革」岩波書店 1997
- 7) 富江英俊「地域社会が学校組織風土に及ぼす影響についての考察：学校・地域連携の現状と可能性(〈小特集〉学校改善と学校の個別性に関する研究)」東京大学大学院 教育学研究科教育行政学研究室紀要 17号
- 8) 信州大学技術教育研究室「地域の教育資源」に関する教育情報」2000
・久富善之「地域と教育」『教育社会学研究第50集』東洋館出版社 1992

- ・久富善之「教員文化の社会学的研究」多賀出版1988
- ・露口健司「公立学校における保護者セグメントの解析ー都市部近郊の小学校を事例として」日本教育経営学会紀要49
- ・ベネッセ未来教育センター「学校教育に対する保護者の意識調査（速報データ）」ベネッセ未来教育センター・朝日新聞社共同調査
- ・高階玲治「学校危機管理マニュアル」東洋館出版社
- ・豊田秀樹「購買心理を読み解く統計学ー実例で見る心理・調査データ解析」東京図書
- ・岸祐司「地域暮らし宣言ー学校はコミュニティアート」太郎次郎社 2003
- ・豊福晋平「積極的情報開示と外部評価による学校改善」日本教育工学会研究報告集2005

開発的な教育相談

—個や集団の質を高める—

指導主事	荒木伸子
研究員	平岩裕美(梅香小)
〃	片山亮(立花北小)
〃	泉知恵(武庫庄小)
〃	溝口みどり(立花中)
〃	森葉子(園田中)

【内容の要約】

社会の変化が激しく、人のつながりが希薄化してきている。児童生徒においても人間関係を結ぶ力の未熟さが指摘されている。このような状況の中、家庭・学校・地域が連携して、児童生徒に自尊感情と他者にかかわる気持ちを育てることが求められている。そこで、今年度は、「自己存在感」、「自己決定の場」、「共感的人間関係」の3点を大切にしながら、個や集団の質を高めることをめざして研究する。

キーワード：自尊感情、いごちのよいクラス、Q-Uアンケート、グループ学習、個別の指導計画、掲示板、ワーク

1	はじめに	59
2	研究の内容	59
3	実践事例	59
	(1) 小学4年生 自尊感情を育てる	59
	(2) 中学1年生 いごちのよいクラスをつくる	64
	(3) 中学2年生 グループ学習を通して学習意欲の向上を図る	69
	(4) 特別支援学級 個別の指導計画を工夫して作成し、活用する	72
	(5) 保健室 保健室前掲示板を利用して もっと知ろう、もっと伝えよう、自分のこと	77
4	研究のまとめ	80
5	おわりに	80

1 はじめに

人は、それぞれの所属する集団や地域社会に居場所を確保し、対話をし、周りの人に支えられ、また、他者のために何かができることを喜びとして日々暮らしている。ところが近年は、社会の変化が激しく、人間関係が希薄化している。児童生徒にも、対人関係を結ぶ力の未熟さが指摘されている。このような状況の中、家庭・学校・地域が連携して、児童生徒に自尊感情の向上と他者とのかかわりを望む気持ちを育てることが求められている。学校・学級は、いごこちのよい人間関係の中で、児童生徒が安心感や信頼感をもち、他者に受け入れられている体験から、自分の感情をコントロールする力や、自分を適度に主張する力をつけ、生きる力を育む場となることが大切である。

そこで、教育相談研究部会では児童生徒の人格的成長・発達をめざして学校における「開発的な教育相談」を行う。

2 研究の内容

学校で行う教育相談とは、『心理臨床大事典』（2004）によると、「学校に在籍するすべての子どもを対象とするもので学校教育における予防的なかかわりともいえる。さらに、児童生徒の人格的な成長・発達を旨とする点を強調して、開発的な教育相談ともよばれる。」とある。

本部会では、「問題が発生してから対策を講じるのではなく、日頃からよりよい人間関係をつくる活動を取り入れ、問題の発生を予防することが理想的な解決策である。また、児童生徒の生きる力を支援し、問題解決能力を高めることは、予防とともに開発的な教育相談の姿である」と考え、研究をすすめる。

今年度は、「自己存在感」、「自己決定の場」、「共感的人間関係」の3点を大切にしながら、児童生徒の実態を把握し、個や集団の質を高める指導に取り組む。そして、変容を捉え、評価、改善を行う。

3 実践事例

(1) 実践事例1 小学4年生 自尊感情を育てる

1. 児童の実態

4月当初より明るい児童が多く男女の仲もよい。授業中も自分の考えを発言できる児童が多かった。より楽しい学校生活を送るために、自主的に話し合いをする姿も見受けられた。しかし、被害者意識が強かったり、自分から友だちの輪に入ることができず一人で遊んだりする児童もいた。

そこで、児童の傾向を客観的に把握するため、7月にQ-Uアンケート(*1)を実施した。学級全体の傾向としては、学級生活満足群19人(63%)非承認群0人(0%)侵害行為認知群6人(20%)学級生活不満足群5人(17%)という結果だった。(図1)侵害行為認知群の児童は、学級生活満足群

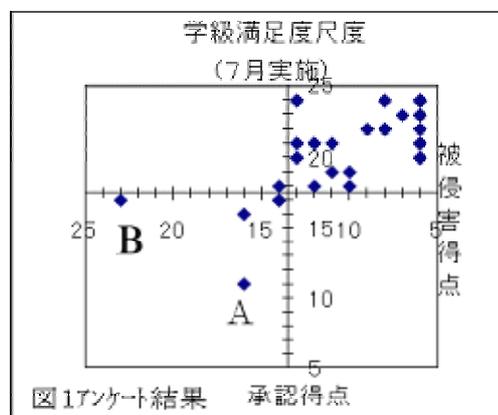


図1アンケート結果

の数値に近いので、ほとんど問題はないと考えられる。また、学級生活不満足群の中にいる5人中の1人は転校し、2人は学級生活満足群に近い数値を示しているため各自適切な配慮を重ねた。しかし、残り2人については、1人が要支援群に入り(以下A児とする)、もう1人(以下B児とする)は被侵害得点が高い傾向にあるため、支援が必要と考えられる。

A児(女子)は、4月当初なかなかクラスになじむことができず、自分から友だちに声をかけることもなく一人で行動することもあり、友だちとのささいなトラブルでも傷付き、いつまでも引きずる傾向にあった。授業中は自ら発言することは少ない。B児(男子)は、友だちとかかわりを持つことが難しく、休み時間は兄とその友だちと遊んだり一人で遊んだりする傾向にあった。授業中も自分の考えに自信が持てず、積極的な姿勢は見られない。以上の点から2人に対しては、予防的援助が必要であり、自尊感情を高め、日常のトラブルに対処する力を養いたいと考えた。研究では、このA児とB児に焦点を置き、実践が効果的であるか検証していくことにした。

2. 実践

児童のセルフエスティーム(自尊感情)を高めるために道徳や特別活動の時間の中で学び合いの場を持ち、ライフスキル(*2)を使ってトレーニングを行った。

実践としては、日々意図的に友だちと関わる状況を作ったり、「二分の一成人式」を通して体験的な活動を取り入れたりするなど具体的な手立てを講じることで、より一層深まりのある人間関係を築きたいと考える。

*1 Q-Uアンケート

Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES) とは、『楽しい学校生活を送るためのアンケート』という標準化された心理検査のひとつ。子どもたちの学級生活での満足度と意欲、学習集団の状態を、質問紙によって測定するもの。グラフの右上学級生活満足群、右下非承認群、左上侵害行為認知群、左下学級生活不満足群この左下要支援群である。

*2 ライフスキル

ライフスキルとは、世界保健機構(WHO)が日常の様々な問題や要求に対してより建設的かつ効果的に対処するために必要不可欠な能力と定義づけた10の技術のこと。この研究では、西宮ライフスキル研究会が提唱するプログラムを採用する。(参考文献 『ライフスキル 互いに高め合うセルフエスティーム』西宮ライフスキル研究会著)

	時間	教材名	つきたい力
第一段階	1	感情パズル	情動対処スキル ストレス対処スキル
	2	怒りへの対応(怒りタワー)	情動対処スキル ストレス対処スキル
	3	自分となかよくできないわたし	情動対処スキル ストレス対処スキル
	4	ハートビーイング	コミュニケーションスキル 対人関係スキル
	5	コラージュ	自己認知スキル
	6	イメージ画(スクウイグル)	創造的思考スキル 批判的思考スキル
第二段階	7	成人式ってなんだろう?	問題解決スキル
	8~10 (本時)	本当に知っている?自分のこと。	自己認知スキル 他者認知スキル
	11	等身大の自分	自己認知スキル
	12~15	なりたいわたし, なれるわたし	自己認知スキル 意思決定スキル

16～21	10才を記念して二分の一成人式を祝おう！	コミュニケーションスキル 対人スキル 創造的思考スキル
-------	----------------------	--------------------------------

②研究授業（第二段階 第2時）

(ア) 教材名「本当に知っている？自分のこと！」

(イ) ねらい

- ・自分のよさを知り，自分らしさに気付くことができる。
- ・友だちのよさを知り，お互いに認め合おうとすることができる。

(ウ) 展開

活動内容	指導上の留意点
1. 本時の学習を確認する。	・二分の一成人式に向け，自分のよさを知ることを確認する。
2. 本時の学習の課題を確認する。	
自分や友だちのよいところを知ろう	
3. クラス全員の良いところを用紙に無記名で記入する。	・記入例を示し，具体的に友だちのよいところを書くように指示する。
4. 自分の用紙に書かれていることを知った上で，自分自身でもよいところを書き加える。	・自分に書かれたことを読ませ，一旦用紙を回収し，再度ランダムに配布する。
5. 友だちの「よいとこカード」を見ながら，二つの事柄を選び，自己紹介の要領で自己紹介をする。その際、聞いている人は、紹介されている人が誰かを考える。	・紹介をする人の特徴を捉えた事柄を選んで紹介することや，発表のルールを伝える。
6. 学習のまとめをする。	・友だちに書いてもらって嬉しかったことや新たに自分や友だちについて発見したことを書かせ発表させる。
7. 次時の学習を知る。	

③抽出児童の感想

- A児 今日たこしょうかいをして少しうれしい気持ちになりました。自分で気付かなかったことも書いてくれたからです。一番うれしかったのは、「けじめついているね」「給食いつも早いね」と書いてあったことです。また，たこしょうかいしたいです。次はみんなのたこしょうかいができたらいいです。
- B児 ぼくは今日たこしょうかいをして二重とびがうまいねということがいっぱい書いてあってうれしかったです。ほかにもせがたかいねとか書いてありました。でもせが高いねと書いてあったのは少しざんねんでした。こんな風に見られてるんだ一と思いました。みんなのを見ていたら，とってもやさしいねとかうんどうしんけいばつぐんとかがかいてありました。そんな風になりたいです。

④授業の考察

A児は授業中終始笑顔であった。自分の用紙が戻ってきた時はとてもうれしそうな様子だった。自ら発表しようとする場面が何度もあり、積極的に授業に参加しようとしていた。

B児は、他己紹介の時「戦争について詳しい」というコメントからほとんどの児童がB児のことだとわかり、得意気な様子だった。手を挙げる回数は少なかったが、周りの様子を探りながら自分が発言するタイミングをうかがっていた様に見られた。

日常的な取り組み

①席替え直前出し物大会

日番が一巡したら席替えをする。その直前に班ごとに出し物をするのである。児童は、それまでに出し物を班で相談しなければならない。一度他の班が行った出し物はしてはいけないルールになっている。相談は給食中や休み時間に行く。日番が一巡するのは一か月弱であり、計画的に準備を進めておかないと間に合わなくなる。持ち時間は一班10分。出し物大会後は、それぞれの班の感想を書き、最後に班のメンバーに「ありがとうさようならカード」を書く。これを1学期当初から取り入れている。

②みんな遊びの会

毎週火曜日の業間遊びにはクラス全員で運動場に出て遊ぶ。遊びの内容は司会係りが決める。ドッジボールをすることが多いが、色々なバリエーションの鬼ごっこをしたり長縄をしたりもする。これも1学期当初から取り入れている。

また、この日以外にも教室に残っている児童を連れて担任も運動場で児童と遊んだ。男女問わずたくさん友だちと遊ぶことができる。

①日記等からみえる抽出児童の心の動き

	A児	B児
4年生当初	<ul style="list-style-type: none"> ・先生が1年生の時と同じだったのでうれしかったが、友だちがいないので寂しい。 ・男の子にいじめられるのではないかと不安。 ・最初は〇〇さんが話しかけてきてくれてうれしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・知らない子が多くて不安。 ・休み時間は遊ぶ人がいないので、教室に一人でいたり、兄とその友だちと遊んだりしていた。でも、クラスのみんなは仲良くしてくれるのではないかと思った。
1学期末	先生と共に外で遊ぶようになり、話ができる友だちが増えてうれしい。	女の子と楽しく話ができるようになった。でも、男の子と遊びたい気持ちもあった。
友だちが増えたきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・出し物大会で友だちが増えた。出し物大会の日よりも、計画を立てて準備をしている時の方が楽しい。 ・班の人といっぱいおしゃべりができてうれしい。 ・話し合いでは、自分から人に話しかけることができるようになった。 ・先生と一緒に遊んでくれるのでうれしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出し物大会の準備の時にみんなで色々なアイデアを出し合うのが楽しい。 ・みんな遊びの日にクラスみんなで遊ぶことが楽しい。 ・「手打ちで人数が足りないから一緒にやろう」と誘われてうれしい。 ・先生が「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれるから、友だちが増えた。

2学期末	<ul style="list-style-type: none"> ・仲良しの友だちが女子6人男子3人できた。 ・学校生活は楽しく、特に友だちとおしゃべりをする時が一番楽しい。 ・4月当初苦手だった男子とはけんかをするのがなくなり、不安な事は全然ない。 ・学校生活を楽しんでいるので、お母さんは安心して思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちから誘われるのがうれしい。 ・男の子で心を許せる友だちが5人できた。 ・お母さんは友だちが増えたことを喜んでくれている。
------	---	--

3. 実践の考察

2回目のQ-Uアンケートを2学期末に行った。抽出児童2人の変化は、表1と図2の通りである。

表1 抽出児童のQ-Uアンケート結果

A児

	承認 得点	被侵害 得点	
1学期(7月)	11	16	要支援群
2学期(12月)	15	19	学級生活不満足群

B児

	承認 得点	被侵害 得点	
1学期(7月)	17	23	学級生活不満足群
2学期(12月)	16	15	学級生活不満足群

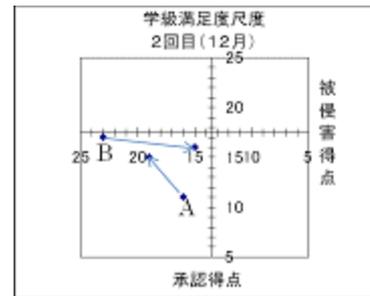


図2 Q-Uアンケート結果

A児は、気の合う友だちができ毎日学校に来ることが楽しみになり、その友だちを通して他の友だちとのかかわりも増え、休み時間は、たくさんの友だちと遊ぶことができるようになった。A児が欠席した時に、たくさんの児童が心配してくれたということが、友だちに認められているという自信につながった。家庭でも笑顔が増え、保護者も安心されているようである。

B児は、4年生当初、休み時間は兄の友だちとしか遊ぶことができなかったが、今では男女問わず仲良くなり、友だちからの遊びの声かけも多くなった。また、保護者が、友だちが増えてうれしい気持ちをB児に伝えたことで、B児自身が喜んでいる。

抽出児童のこのような変容から、授業の取り組みでお互いを認め合い、自尊感情を高める工夫をしたことや、日常的な取り組みで仲間意識を高める工夫をしたことが、効果的だったと考えられる。特に、「席替え直前出し物大会」は、班で何かを創り出すという目標で活動したことが、一体感・達成感につながったと思われる。また、メンバーが入れ替わるので、たくさんの友だちとのかかわることができた。

しかし、まだ両児童とも学級生活不満足群の中に含まれており、今後も学級生活満足群に位置できるよう友だちとのかかわりを見守りながら、支援していくことが課題である。

(2) 実践事例2 中学1年生 いごこちのよいクラスをつくる

1. 生徒の実態

明るく活発な生徒が多く、学校行事や学級活動に対して熱心に取り組むクラスである。また、優しい気持ちで友だちに接する雰囲気が全体的に見られ、生徒たちの間で「友だちと仲良く過ごしている」という意識があるように思われる。

ただ、けじめをつけて学校生活を送ることが大きな課題であり、時と場所をきちんと理解してすばやく行動することがなかなか出来ない。ルール的重要性を理解させなければならない状況である。

また、小さなけんかやちょっかひのかけ合いが見られることもあり、相手の気持ちを考えずに行動したり、自分の気持ちをうまく伝えられなかったりする生徒がいることも事実である。同じ生徒が、トラブルを繰り返してしまうこともあり、生徒一人一人のコミュニケーションを図る場をつくるのが、いごこちのよい学校生活を送るための大切な働きかけだと考える。

このような実態を客観的に明らかにするために、6月にQ-Uアンケートを実施した。実施人数は39人である。結果は以下の通りである。(図3)

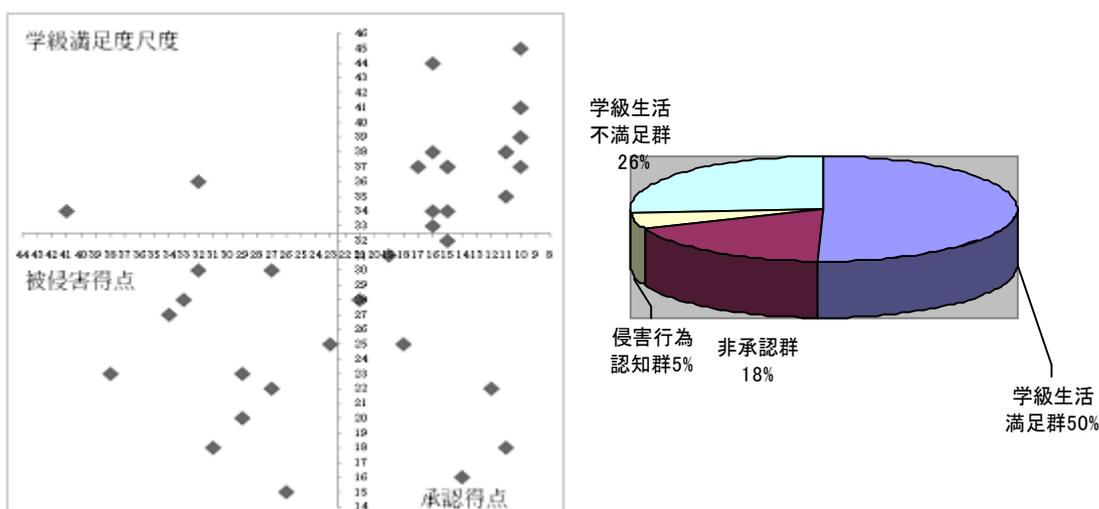


図3 Q-Uアンケート結果(6月)

グラフの形として斜めにのびている分布が一番近いと思われるが、特徴としては学級内でのルールの定着が低く、人間関係も希薄な状態であるということがあげられる。学級生活に満足している生徒が半数をしめているが、反面不満を抱いている生徒の数が3分の1に達していることもわかる。その中でも特に支援が必要であるという結果になったのは、学級の中でもすぐにちょっかひをかけられて自分の意見をすぐに引っ込めてしまう生徒C、自分の意見をきちんと表現できず、ちょっかひをかけて人とかかわりを持つようとするために、すぐにトラブルにつながってしまう生徒Dの2人である。この2人に関しては、クラス全体の取り組みにプラスして対話を持つように心がけた。会話の中では、「自分に自信を持つ」「言葉で自分の気持ちを表現する」ということを繰り返し言い続けた。

2. 実践

生徒同士のより深い人間関係を築いていくために、構成的グループエンカウンター

を用いることにした。特に、小集団の中で自分の意思を伝えることに重点を置き、グループワークでの取り組みを行った。

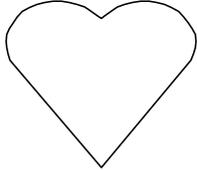
①「友だちの良いところをほめよう」

(ア) 展開

クラスを生活班（8人×5班）に分け、その中でも男女（各4人）に分けてかたまって座らせる。ワークシート（資料1）を配布し、4人でお互いのニックネームを確認し合ったり、実践時は合唱コンクールが近かったので、それぞれのパートを言い合うなど、本題に入る前に発言しやすい雰囲気をつくるよう心がける。

メンバーのことを知っていますか?? 氏名 ()		
名前	ニックネーム	合唱のパート

〈言われて嬉しかったこと〉



〈感想〉

資料1「友だちの良いところを言い合おう」ワークシート

ウォームアップの後、各テーブルの中から1人を選び、「ゲスト」と書いた札を渡す。そして、1分間という時間を設定し、周りの3人の生徒が「ゲスト」の良いと思うところを思いつく限り言う。終了の合図が出たら、時計回りに「ゲスト」の札を回し、「ゲスト」が交代していく。最終的に全員がメンバーから自分の良いところを聞いていく。1周したら、それぞれ自分の言われたことに関して、嬉しかったと感じた発言を思い出し、ワークシートに記入する。また、仲間のことを誉める・自分のことを誉められることについて、どのように感じたのかを感想に書く。

(イ) 生徒の様子

ウォームアップの時点では、和やかな雰囲気でお互いのことについて話す様子が見られた。しかし、本題の「友だちの良いところを見つける」という課題に関しては、なかなか難しかったようで、お互いが照れてしまう場面や話が脱線してしまう班も見られた。

(ウ) 生徒の感想(抜粋)

- ・相手のことをほめるのはすごく恥ずかしい。あまり思いつかない。
- ・元気で明るいわって言われてすごく嬉しかった。
- ・ほめられるのは嬉しいけど、ちょっと恥ずかしい。
- ・素直にほめるのって、とっても恥ずかしいと思った。
- ・いきなりほめるのは難しいことだというのがわかった。
- ・意外と嬉しかったです。
- ・個人個人でまたみんなをほめていきたいと思います。
- ・意外と思いついても、言葉にするのは難しいなと思った。
- ・意外と面白く、自分も良い気持ちになりました。よかったです。
- ・ほめるのは簡単やけど、ほめられるのは恥ずかしい。

- ・友だちの良いところはいっぱいあるのに、いざとなったらわからなくなった。
- ・ほめられるよりほめる方が楽しかった。
- ・相手をほめるのが難しかった。逆にほめられるのも、どんな反応をすればいいのか困った。
- ・微妙だった。
- ・ほめてもらったけど、嬉しくなかったです。
- ・あまりでてこなかったのが残念だった。
- ・面白いとかは言われたことがあるけど、他のことはあまり言われたことがなかった。今回、言われて嬉しかった。
- ・言うことの大切さを学んだ。

②「生活の振り返りビンゴ」

『エンカウンターで学級づくり 12カ月 中学1年生：吉沢 克彦・津村 誠編』を参考に研究者が作成

(ア) 展開

ワークシート(資料2)を配布し、自分たちの生活を振り返って、当てはまる内容の項目にチェックを入れさせる。その後、チェックが何個入ったか確認をし、その項目を使ってビンゴカードを完成させる。この時、自分にあてはまる項目がビンゴのマス数に満たなかった場合は、友だちが選んでいそうな項目を選んで、カードを埋めるように指示する。

あなたの生活を振り返って!!																	
1年2組 () 番 名前 ()																	
<p>1. 困っているお年寄りや小さな子供などを助けた 2. 教室に落ちているごみを拾って捨てた 3. 花火大会に行った 4. 蛍を見た 5. 清掃ボランティアに参加した 6. お祭りの手伝いをした 7. 犬の散歩などで近所を歩いた 8. 近所の人に会って挨拶した 9. どのゴミを何曜日に出すか知っている 10. 家の近くの小さい子と話したり、遊んだりした 11. USJ に行ったことがある 12. つかしんで買い物したことがある 13. ゴミだしをする場所を知っている 14. 大きな地震や災害などの時、自分の家族の避難所はどこなのかを知っている 15. 学校の校歌を 2 番までしっかり歌える 16. 藻川で遊んだことがある 17. 田能遺跡に行ったことがある 18. 洗い物を手伝ったことがある 19. アイロンをあてたことがある 20. 家族全員の誕生日を知っている 21. 置き勉強はしたことがない 22. 教室のゴミ捨てに行ったことがある 23. 合唱の朝練にしっかり参加した 24. 阪急電車に乗ったことがある 25. JR の電車に乗ったことがある 26. テストのやり直しを欠かさずやった 27. 勉強のわからないところを先生に質問しに行った 28. 掃除当番以外の日に掃除を手伝った 29. 登下校などで歩いているとき、道端に落ちているゴミを拾った 30. 1-2のニュースを5個以上言える</p>																	
<p>< BINGO 表 ></p> <table border="1" style="display: inline-table; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td><td style="width: 25px; height: 25px;"></td></tr> </table>																	
<table border="1" style="display: inline-table; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 100px; padding: 2px;">多かったもの</td> <td style="width: 100px; padding: 2px;">理由</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">-----</td> <td style="padding: 2px;">-----</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">少なかったもの</td> <td style="padding: 2px;">理由</td> </tr> </table>		多かったもの	理由	-----	-----	少なかったもの	理由										
多かったもの	理由																
-----	-----																
少なかったもの	理由																
<p>< 考えたこと、気づいたこと、感想 ></p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>																	

資料2 「生活の振り返りビンゴ」 ワークシート

カードが完成したら、生活班ごと(8人×5班)にかたまって座らせ、ビンゴを開始する。チェック項目は教師が選ぶのではなく、順番に班ごとに選んでいく。

ビンゴがクラスの3分の2くらいになった時点でストップし、友だちがどの内容の項目を多く選んでいたのか、また、どの内容があてはまらないのかという確認をしていく。

最後に取り組みの感想を書かせ、自分と友だちとの共通点や違いを理解させる。

(イ) 生徒の様子

チェック項目の内容を生徒たちが身近に感じるものになるように考えたものなので、とても生き生きした表情で取り組む姿が見られた。また、友だちが何を選んでいったかということに関して興味深い様子で見えていた。自分で何かを表現するというものに比べて、取り組みやすかったのではないかと思われる。

(ウ) 生徒の感想(抜粋)

- ・USJに行ったことのある人、近所の人にあいさつする人が少ないのに驚いた。
- ・家族の誕生日はみんな知っていると思っていたけどそうでもないのに驚いた。
- ・避難所は私も含めてあまり知っている人がいなかったのだからだめだなと思った。
- ・クラスのニュースが言えないのは、残念です。
- ・みんなと意見が一緒にビンゴになって楽しかった。
- ・「自分では絶対ある」と思っていたことがそうじゃなくてびっくりした。
- ・多く選ばれているのは、やるのが簡単なことだから、少ないのは面倒くさいことだからだと思います。

③「ウォッチングカード～友だちの様子を観察しよう～」

『学級ソーシャルスキル CSS ～人とのかかわり、ともに生きるためのルールやマナー～』: 河村 茂雄・品田 笑子・小野寺 正巳編著を参考に研究者が作成)

(ア) 展開

クラスを生活班(8人×5班)に分け、その中でも男女(各4人)に分けてかたまっ座らせる。その際に、自分の前に座った友達が自分のパートナーとなるということの説明をする。ワークシート(資料3)を配布し、チェッカー欄に自分の名前を、ターゲット欄にパートナーの名前を書く。その後1週間、ターゲットの行動について気づいたこと、気になったことを毎朝記入させる。

最後にウォッチングカードをターゲットに渡して、お互いどのようなところを見られていたのかをチェックする。そして、相手のことを意識して見る・自分のことを見られることについてどのように感じたかを感想に書かせる。

(イ) 生徒の様子

なかなか難しそうであった。意識してパートナーのことを見ておくのは、エネルギーが必要で、毎日同じコメントになってしまう生徒や書くこと自体が面倒臭く感じてしまう生徒も出てきた。しかし、最終日にウォッチングカードが自分の手元に返ってきた時には、表情がすっかり変化し、自分のことがどのように書かれているのかを真剣に読み取る姿が見られた。

ウォッチングカード

11月()日～12月()日

ターゲット	チェッカー

・ターゲットの様子をこっそりウォッチングしよう

①どんな仕事をしている(_____ 委員・ _____ 係・ _____ 係)

②仕事をしている時の表情はどんな感じか

③仕事を忘れずにやっている

④人に優しく出来ている

⑤あいさつしている

⑥授業を頑張っている

①誰かの役にたっている

②その他(様子に変化を感じることがあったらそれも書いてみよう!)

月・日	発見したこと(どこで、何を、どんなふうに、どうしたか)

<感想>

.....

.....

.....

.....

資料3「ウォッチングカード」ワークシート

(ウ) 生徒の感想(抜粋)

- ・人のことを観察して、良いところを見つけて書こうとすると結構大変でした。
- ・自分のことを観察された記録を見るとこんな風に見えるんだと思いました。
- ・結構良いところが書かれていたので、ちょっと嬉しかったです。
- ・面倒臭かった。毎日書くことがいっしょだった。
- ・難しかった。でも一応、1週間、ターゲットを見つめていた。
- ・そんなに見れていなかったの、適当だったかもしれない。
- ・思ったより詳しく自分のことを書いてくれていてびっくりしました。
- ・「嫌。」と言っていたことがこの1週間すごく多かったんだと思いました。
- ・いつも一緒にいても、意識してどんなことをしているかとか見たことがなかったから、とても大変で面倒でした。
- ・大変だったけど、〇〇さんが頑張っていることに気づけてよかったです。

3. 実践の考察

これらの取り組みや教育相談週間後などを通して、生徒たちの状態を把握するために12月に2回目Q-Uアンケートを行った。結果は以下のとおりである。(図4)

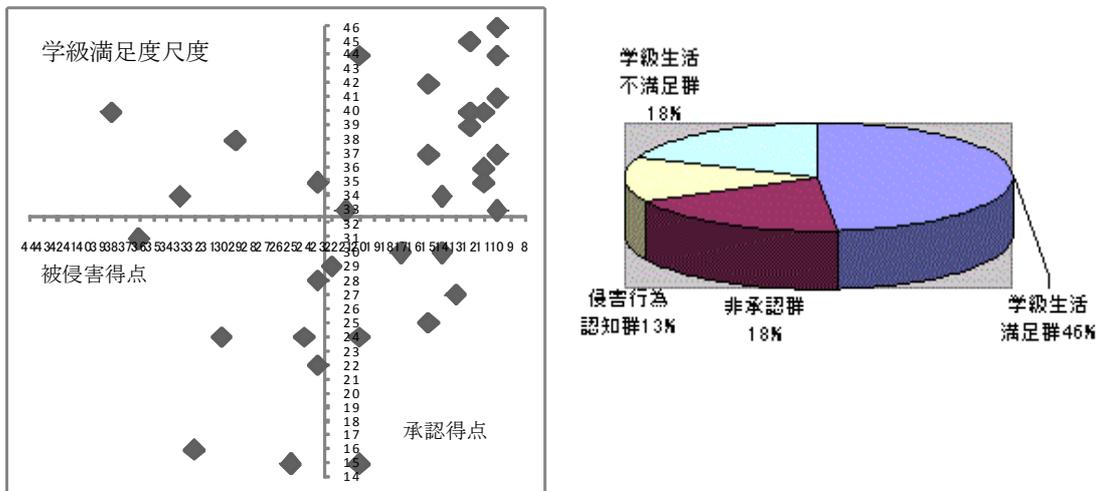


図4 Q-Uアンケート結果(12月)

6月に行った結果に比べて、割合としては学級満足群が低くなり、侵害行為認知群が高くなってしまった。侵害行為の群に入った生徒に関しては、友だちとのトラブルがあって人間関係に敏感になっていることが影響していると考えられる。そして、6月の結果において特に支援の必要であった生徒C、Dに関しては、生徒Cが非承認群へ、生徒Dは不満足群ではあるが、要支援群から出る結果となった。2人とも3学期の様子を見てみると、生徒Cはすすんで委員に立候補したり、生徒Dは友だち間のトラブルの数が減り、生活のリズムも良くなってきた。Q-Uアンケートから、かかわりが特に必要な生徒がわかり、早い段階で実態を把握し、対話を持てたことが大変良かったと思われる。教師が、いかに予防的援助をするかという点が大切である。

学級集団を表すグラフの形としては、斜めにのびる分布から縦にのびる分布に近くなった。けじめをつけて行動しなければならないという意識が、少しずつ定着してきたのではないかと思われる。しかし、人間関係の希薄さという点にはまだまだ課題が残っているので、構成的グループエンカウンターを実践する際には、生徒の思いや意見をさまざまな形でシェアリングしながら取り組んでいけるようにしたい。

(3) 実践事例3 中学2年生 グループ学習を通して学習意欲の向上を図る

1. 生徒の実態

本校では、生徒支援加配として、2年生の数学で抽出授業を行っている。抽出授業は成績下位の生徒への強制ではなく、生徒の希望を優先し、保護者の同意を得て、クラスを編成している。現在、2年生5クラスで各クラス10名前後、計53名を指導している。

4月に希望調査をおこなった時の生徒の多くは、

- ・勉強が少しでも出来るようになりたい。
- ・数学がわかるようになりたいから、抽出授業を受けたい。
- ・自分でも必要なことだと思いました。絶対参加したいと思います。

等、前向きな気持ちを表していた。

保護者の意見としては、

- ・本人の最初からの希望もあり、やる気が少しでも増してくれれば嬉しいです。
- ・抽出授業を受けて、数学が楽しいと思ってもらえたら、うれしいです。
- ・とてもありがたい授業です。ぜひ参加させたいと思います。自分の理解できないところも、気にせず先生に質問できるのではないかと思います。よろしくお願いします。
- ・本人が強く希望していますので、よろしくお願いします。

等、期待される声が多かった。

学校全体は落ち着いていて、生徒は授業に真面目に取り組んでいる。担当の抽出クラスにおいても教室に遅れずに来て、チャイムが鳴るとすぐに授業が始められる。話を聞き、黒板に書いたこともノートに取るが、授業に受身であり、宿題をやってこない生徒が多く自分から進んで勉強することが難しいのが現状である。

このような生徒に対し、意欲を持たせ、学力向上につなげるため、以下の取り組みを行う。

2. 実践

①グループ学習を取り入れる

数学が苦手な生徒のクラスであるので、問題を解くには、教師を頼ることが多く互いに教えあうのは難しいと思い、これまで一斉授業で進めていたが、2学期から、グループで相談をしたり、互いに教え合ったりする時間をできるだけ多く取るようにした。初めはとまどっていることが多く、あまり活発な意見交換ができなかったが、相談しやすい課題や発問にして、様子を見ることにした。グループ編成は話しやすいように、生徒の自由にさせた。

学習内容は図形で、「工夫して角度を求める」「合同な三角形を見つける」「合同条件を探す」「三角形の合同条件を覚える」など取り組みやすい内容で相談や話し合う時間を取った。

1ヶ月ほどすると、お互いに自分の答を確認しあうことから始まり、苦手な生徒ができていた生徒に教えてもらう場面や、女子が男子に教えていることもあった。グループはほとんど3～4人で構成されていた。

授業中や授業後に、「先生に聞くより、友達に聞く方がわかりやすかった。」「友達が教えてくれてうれしかった。」「相談できたので、問題が解けるようになった。発表できた。」等の声が聞かれた。

具体的な出来事としては、11月、これまでに問題に取り組むことがほとんどなかった生徒Eが、周りの生徒に教えてもらううち、「私なあ、九九ができへんねん…」と言いだしたので、小学校の教科書から九九の表を画用紙にコピーして渡すと、次の授業から、生徒Eはうれしそうに持ってくるようになった。授業前やクラブの時にも、友だちに聞いてもらったりして、詰まりながらも正確に言えるようになった。自分ができないことをみんなに言えたことで、気持ちが楽になったのか、授業中も、「先生、そのTの反対（垂直記号）、なに？」などと質問するようになり、授業に参加できるようになった。

②授業評価ファイルをつくる

授業に無気力で忘れ物が多く、ノートも取らない男子生徒が3人いるクラスでは、担任と相談し、他の授業でも同様であるため、3人の授業評価ファイルを作ることにした。3人の授業態度を毎時間教科担任が5段階評価し、記入することによって、3人は一日の合計点を競うようになり、忘れ物や私語も減り、ノートも取るようになった。わかりやすい目標ができたこと、3人で競い合ったことで、頑張った。教科担当も評価だけでなく「丁寧にノートを取っていました」「今日はちょっと私語がありました」等のコメントも書いて、意欲を高めるよう協力した。

今日の授業態度の評価			
()月()日()曜日			
時間割	生徒F	生徒G	生徒H
1			
2			
3			
4			
5			
6			

* 5点満点で採点よろしくをお願いします。

資料4 授業評価ファイル

3. 実践の考察

(1) 発表

グループ学習を取り入れた後、課題を黒板に書いたり、発表したり、前で説明したりする生徒が増えてきた。課題に対して、あきらめる生徒が多かったが、3学期は一生懸命取り組んでいる。説明が終わると、「先生、どこやるん？」という声が聞かれるようになった。

(2) 提出物(家庭学習)

提出物の、期限内に出せた生徒数の変化は次の通りである。

- ・問題集(ワークブック) 6/24 25人, 10/5 30人, 11/26 44人, 1/8 47人
- ・定期テストやり直し 6/30 30人, 10/13 26人, 12/4 36人
- ・サマーワーク 8/24 44人
- ・冬休みの課題 1/8 46人

(3) アンケート

生徒の意識の変化を把握するために、53人に9月初めと12月末に以下のアンケートを実施した。

表1 抽出授業に関するアンケート結果

		はい	まあまあ	いいえ
1 授業中	①集中して話を聞いている	15→32	30→16	8→5
	②ノートを取っている	44→44	8→7	1→2
	③出された問題をやっている	23→23	19→22	11→8
	④わからないことは質問している	8→8	19→20	26→25
2 家庭で	①宿題をしている	7→7	22→25	24→21
	②復習をしている	3→2	13→19	37→32
	③試験勉強をしている	16→12	27→27	10→14
3 授業中気をつけていること	①みんなに迷惑をかけないよう静かにする	32→35	11→12	10→6
	②集中していない人には、注意をする	1→0	5→7	47→46
	③わからない人には、教えてあげる	3→5	21→27	29→21
	④友達と相談するとよくわかる	14→17	27→32	12→4
4 抽出について	①抽出の方が質問しやすい	27→25	18→23	8→5
	②抽出の方が友達と相談しやすい	20→22	21→23	12→8
	③抽出の方が集中できる	35→31	12→16	6→6
	④抽出の方が数学の勉強時間が増えた	11→14	23→28	19→11
	⑤抽出の方がよくわかるようになった	28→32	19→15	6→6
	⑥抽出の人と前より仲良くなった	13→21	29→24	11→8

注： →の左は9月、右は12月のアンケートの人数

■は、プラスの変化がみられた人数が増加した箇所
アンケートの結果から、以下のことが読み取れた。

- ・グループで相談するようになってから、迷惑をかけないなど、周りに配慮できる

ようになった。(3-①)

- ・周りや相談するようになって話がしやすくなり、気軽に教えてあげられるようになった。少人数のため、お互いの距離が縮まった。(3-③ 4-②⑥)
- ・友だちと相談し合う方がわかりやすいようで、理解が深まった。(3-④ 4-⑤)
- ・相談によって学習内容がわかるようになり、授業に取り組む姿勢が変化した。

(1-①③)

- ・相談によって学習内容がわかるようになり、意欲が出てきて家庭学習の時間が増加した。

(2-①② 4-④)

お互いの関係が希薄であった生徒たちは、授業での協力によってつながりができ、今まで私語が多かった生徒が、教えてくれた友人に迷惑をかけないように説明中は静かにするようになったり、わからないまま黒板を写すだけだった生徒が質問をするようになり一斉授業の雰囲気はよくなった。

テストの点数がどれだけ上昇したかについては、学習内容にもよるため、測るのは難しいが、生徒の意識の中に、授業だけに頼るのではなく、自分自身でなんとかやってみようという、前向きな姿勢や意欲が見えてきたように思われる。

また、今まで発言しなかった生徒が質問や発表をするようになって、意外な落とし穴が見えてきた。角度を求める計算はできるが、 $\angle x$ 、 $\angle y$ の文字が読めない。アンケートを実施した時には、真剣にやろうとして「漢字が読めない」と訴えてきた。何がわからないのかが見えてきて、これまで配慮に欠けた授業をしていたことに気付かされた。わからないことを言える雰囲気になったことも、グループ学習の成果といえる。

授業中の取り組みでは、生徒の意識の変化が見られたが、提出物(家庭学習)に関しては、出す生徒は増加傾向にあるものの、まだ半数ほどである。授業中、気になったことは担任に報告し、保護者に連絡してもらったり、学期ごとに保護者に家庭での様子を書いてもらったりしているが、まだまだ保護者との連携が希薄である。

今後、確かな学力向上を図る為に、3学期末にアンケートを実施し、保護者の意見を聞き、連携を深め、協力を得ながら、生徒の意識を家庭学習にまで広げていくことが必要である。

(4) 実践事例4 特別支援学級 個別の指導計画を工夫して作成し、活用する

1. 児童の実態

本校の特別支援学級(自閉症・情緒障害)には、2人の児童が在籍している。研究では、知的障害を併せ持った自閉症傾向のI児に焦点をおくことにした。I児の実態は以下の通りである。

I児(1年男子)

行動・情緒面では言語が出ず、指示理解ができないので、周囲の大人が寄り添い本人の意思や欲求を判断する必要がある。誰とでもバイバイやタッチをすることはできるが、多人数の圧迫感や大きな音は苦手で、耳をふさいでその場に固まってしまふことがある。絵本などの興味あることは10分ぐらい集中して取り組むことができる。友だちに対しては受身ではあるが、誘いがあれば行動することができる。

生活面では、排泄や着替え、給食など大人の介助が必要な場面が多く、常に1対1の指導を必要とする。偏食はあまりなく、普通量を食することができる。自分でスプーンを使って食べることは難しいが、スプーンに取ってあげると自ら口に運ぶことができる。特に汁物が好きで、積極的に食べようとする姿が見られる。排泄は、はっきりとした意思表示はなく、大人が読み取る必要がある。着替えは、靴や靴下、帽子など簡単なものは一人でできるが、ボタンやファスナーが付いたものなどは介助が必要である。

運動や作業については、つま先で走ることが多く、ステップを踏むような走り方になる。鉄棒などに少しの時間ぶら下がることはでき目をつむりながらもボールをキャッチすることもできる。蛇口をひねったりハサミをつかったりするなど手先を使った作業は力の加減が難しい。

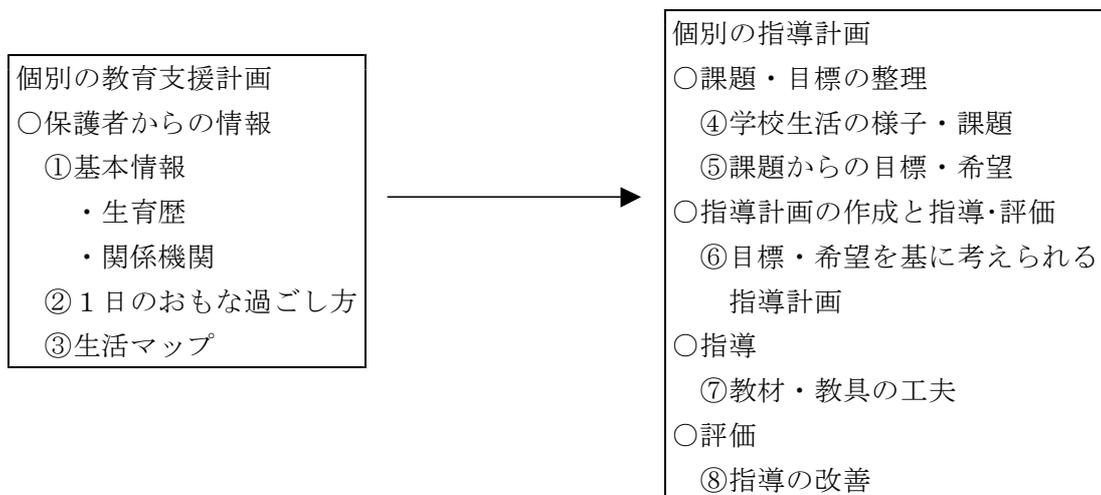
教科面では、本には興味を示し気に入った絵本をよく見る。読み聞かせは、集中している時は、5分程度聞くことができる。鉛筆はにぎり持ちで殴り書きや○が書ける。数を数えることはできない。手遊びが好きで、大人の歌に合わせて上手に模倣したり、覚えているものは一人でやったりする。

2. 実践

児童理解と継続的な支援のため、個別の教育支援計画を就学前施設から入手しようとしたが、個人情報の問題もありできなかった。このため、保護者の協力と就学前施設への聞き取りから個別の教育支援計画を作成した。

個別の教育支援計画の作成にあたり、①基本情報、②1日のおもな過ごし方、③生活マップから児童の特性を知る。その際、保護者や関係機関からも話を聞き、より具体的な情報を得る。

次に、適切な指導のため個別の指導計画を作成した。④学校生活の様子・課題を明らかにする。そして、保護者からの希望も聞きながら児童に適した目標を設定する(⑤課題からの目標設定・希望を配慮)。次に、目標・希望を基に、より具体的な手立てを考える(⑥目標・希望を基に考えられる指導計画の作成)。



個別の教育支援計画

①基本情報

個別の教育支援計画				
児童氏名	性別	生年月日		
住所		電話番号		
保護者氏名		緊急連絡先		
住所				
家族構成	氏名	生年月日・学年	続柄	備考
生育歴				
医療関係	診断・疾病			
	検査等			
	服薬			
	補助具等			
	医師の指示 その他			
医療機関名	期間	診断・処置		
療育・相談関係	機関名	期間	診断・処置	
福祉関係	療育手帳			
	身体障害者手帳			
	精神障害者保健福祉手帳			
	その他			

生育歴などを書くことで、その児童の就学前の様子などを知ることができる。I児の場合、4月に就学前に関わっていた関係機関を訪れ、I児の好きな歌（おもちゃのチャチャチャ、キャベツの歌など）や、好きな遊び（砂遊び、水遊び）を聞くことができ、つながりのある指導を行うことができた。また、プール指導においても取り組みやI児の様子を聞くことで見通しを持って具体的な計画が立てられた。

備考、その他の欄にアレルギーや気をつけなければいけないことなどを記入できるようにする。苦手なもの（牛乳や

備考、その他の欄にアレルギー（じゃがいも）を書いてもらい、また、家庭ではどのようにして食べさせているかを聞くことで、嫌いなものでも口に運ぶことで少しは食べられることを知り、給食指導に役立てることができた。

シート1 個別の教育支援計画

※個人情報保護のため内容は記載しない

また、家でいろんなことを伝えるために使っているマカトン法(*3)を教してもらい、学校でも使用することで指示が通りやすくなった。保護者に就学前の指導の記録を見せていただき、I児の変容や現在の能力を知る手がかりとなった。

*3マカトン法：ことばや発達の遅れがある人の対話のために手話法をもとにしたコミュニケーションの方法

②1日のおもな過ごし方

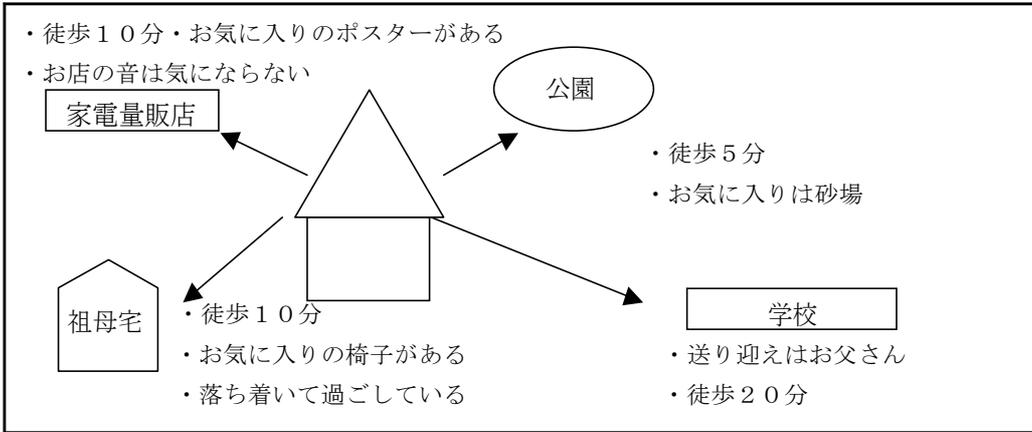
平日		休日	
時間	活動	時間	活動
5:00	ほぼ毎日この時間帯に起床 (夜中2・3度トイレのため起きる)	5:00	同じ
6:00	起きたらすぐ朝食 ・現在はビザトーストが好み ・お茶づけの汁のみ2杯	6:00	テレビなど見てすこしくつろぐ
7:40	登校 ↓	9:30	散歩 ↓
14:30	下校	12:00	帰宅後昼食
15:00	帰宅 帰宅後すぐに食事 少しテレビなどを見ながらくつろぐ	14:00	散歩(祖母の家に行った り) ↓
17:00	入浴	16:30	↓
17:30	入浴後、少しくつろいだり、少し食べた	17:00	帰宅
18:00	これくらいの時間帯に就寝 (ハミガキ終了後)	17:30	入浴
19:00	↓	18:30	入浴後食事
		19:00	これくらいの時間帯に就寝

休日には父親が散歩に連れて行き、平日のリズムを崩さないようにしている。学校の前を通過して公園や川へ遊びに行っている。運動量を比較してみると休日は、よく散歩をしているので、それに合わせて学校でも歩いたり走ったりする時間を長くするなど、学校での取り組みを考えることができた。

家庭での様子や遊び等も記入してもらうことで家庭での状況を知ることができる。家庭で気に入っているアンパンマンを学校でも遊びや教材に取り入れた。また、学校で気に入った絵本や

ビデオ（ぐりとぐら，ノantanなど）を家庭でも取り入れてもらうなど，I児が興味をもって取り組むことができるものを見つける手立てとなった。

③生活マップ



児童の生活圏の中でよく行く場所をマップに書き入れ，所要時間やその場所での児童の様子，好きなことなどを付け加えた。

保護者の話を聞きながら作成することで，普段の学校や家庭とはまた違った一面を発見することができた。公園での様子や好きな遊具はとても参考になり，学校でも取り組むことができた。

個別の指導計画

④学校生活の様子・課題

項目ごとに，今までに行った取り組みや効果のあった教材なども書き入れ，この時点での児童の課題を書くことで，以下の⑤「課題からの目標・希望」⑥「目標・希望を基に考えられる指導計画」とつなげていく。また，保護者にも記入してもらうことで，より具体的な指導計画ができると考えた。

身辺処理	<p>（食事・衣服の着脱・排泄・整容など） 偏食は少なくなってきた，自分でスプーンを使い食べることができるが，まだまだ大人の介助が必要な部分もある。一口づつ大人に許可を求めるしぐさをするところがある。 衣服の着脱は簡単なものなら時間をかけてできるが，ボタンは難しい。衣服をたたむことを今頑張っている。手洗いは指示をすることでできるようになっている。排泄は意思を出すようになってきているが，こちらが読み取ってあげる場面も多い。</p>
教科	<p>（読み・書き・計算など） 言語が喃語だけなので，読書は難しいが，本には興味を示し気に入った本をよく見ている。読み聞かせは，最後まで集中して聞くことができない。えんぴつは，握り持ちで，殴り書き，○が書ける。 数を教えることはできない。 ○や△など形の認識ができない。 手遊びが好きで，大人の歌に合わせて上手に模倣したり，覚えているものは一人でやることができる。砂場が好きで穴を掘ったり，砂の感触を楽しんでいる。シールの粘着面を意識して貼ることができる。</p>
作業活動	<p>（準備・片付け・文具の使用・掃除など） 学校の生活リズムにも慣れ，学校に楽しんで来ることができている。「かばんを片付けましょう」や「いすに座りましょう」など指で指さなくても言葉だけで指示が通ることが増えた。ドアの開閉や椅子の持ち運びなど力をいれる作業ができるようになった。特に水遊びが好きで水道の蛇口を自分でひねり遊ぶことができるようになった。</p>
コミュニケーション	<p>（自己欲求の表現・指示理解・会話・あいさつなど） 言語表現は喃語だけで，コミュニケーションをとるのは難しいが，内的な言語はあるようで，いくらかの指示は指差しをしなくても理解できるようになってきている。 自分が遊びたいおもちゃなど何か取って欲しいと大人の手をとり自分の意思を出せるようになってきた。 あいさつは相手に合わせて頭を下げたり手をタッチしたりすることができる。</p>
集団活動	<p>（交流学級・行事など） 体育大会や音楽会の練習では集団の中にスムーズに入ることができた。練習中の音楽に耳をふさぐことはあったが，練習を重ねるごとに自分がやるべきことがわかってきたようで，いつも最後までがんばることができた。 交流学級では，給食のあいさつ係としてみんなの前に立ちあいさつをすることができる。</p>
休み時間	<p>（休み時間の過ごし方など） 自分の好きなおもちゃで遊んだり本を見たりしながら過ごしている。 いろんなものに興味を持ちはじめ，遊びのバリエーションも増えてきた。</p>

シート2 個別の指導計画（学校生活の様子・課題）

③課題からの目標・希望

	保護者（希望）	担任（自立に向けた目標）
身辺処理	食事では偏食はあるが以前に比べると改善されていると思う。おはしが使えない、スプーン・フォークを使って食べるがこちらが取ってあげてから自分で口に運ぶことが多い。衣服の着脱は以前よりも上手になってきている。時間をかけてあげると少しの介助でできるようになってきた。排泄はしぐさなどで知らせる。いつもギリギリなので余裕をもって知らせるようになってほしい。	排泄の欲求を伝え、自分で排泄することができる。 自分からフォークやスプーンを使ってすすんで食べることができる。 衣服の着脱（靴の脱ぎ履きやボタンのはめ外し）が自分でできるようにする。
教科		決められた学習が終わるまで、着席する。 鉛筆やクレヨンを使って形を認識して描くことができる。 絵本やビデオ教材から言葉への関心を持つ。 手先を上手に動かすことができる。
作業活動	生活サイクルの中で大人・ともだちの言葉がけで行えるようになってきたと思う。 気持ちが続かないことが多いので介助が必要だが、少しずつ自分でできるようになってほしい。	1学期からの積み重ねで定着している部分もあるので、引き続き作業活動を時間をかけて取り組み、定着させたい。
コミュニケーション	ほしいものややってほしいことがあるときは大人の手をとったり指を指そうとする時がある。言葉がけなどで判断ができるようになってきた。言葉はまだでないが相手のあいさつに対して頭を下げたりバイバイができるようになってきた。誰にでもできるようになってほしい。	だいぶ自分の意思を出せるようになってきているので、何事に対しても意思を出せるようにしたい。 簡単なあいさつなど声に出してできるようにしたい。
集団活動	やや苦手である。特に大声が苦手である。 以前よりも落ち着いて行動できているように見える。周りの友達の様子を見て頑張っている姿も見える。周りを意識するようになってほしい。	集団の中で今何をするべきなのか考えられるようにしたい。
休み時間	楽しく過ごしている様子なので、今後、外遊びを取り入れて運動量を増やしてほしい。	一人遊びではなく友だちと関わらせていきたい。

シート3 個別の指導計画（課題からの目標・希望）

④目標・希望を基に考えられる指導計画

	年間の目標	手立て・教材
身辺処理	（食事・衣服の着脱・排泄・整容など） ボタンの付けはずしの練習をする。 給食では、指示（または自分の意思）で食べようとする。 排泄の意思表示をさせる。	練習用の教具を用意する。 介助の回数を減らす。 声かけをして意思表示を促す。
教科	（読み・書き・計算など） シール貼りで「よく見る」「手先を使う」学習をする。 読み聞かせを楽しむ。 殴り書きを楽しむ。	シール貼りの台紙を用意する。 アンパンマン・ノンタンの絵本。 持ちやすく、太い色鉛筆で書かせる。
作業活動	（準備・片付け・文具の使用・掃除など） 指示されて学習用具を出す、片付ける（はさみ・のり・えんぴつ）。	「～しましょう」と声をかける。
コミュニケーション	（自己欲求の表現・指示理解・会話・あいさつなど） 指示が通るようにする。 発声練習をする。 マカトンサインを使って簡単なあいさつをまねる。 要求する時にマカトンサインを使おうとする。	マカトンサイン、絵カードを使って指示する。 手遊び、歌。 多くの教師に呼びかけ、毎朝あいさつに来てもらう。
集団活動	（交流学級・行事など） 交流学級で安心して過ごせるようにする。 集団の中で今何をするべきなのか指示し、指示に従うように促す。	担任がついて交流学習に参加する。 周囲の友だちに関わり方を教える。 係りの仕事を（介助しながら）させる。
休み時間	（休み時間の過ごし方など） 一人遊びを十分に楽しみながら並行遊びを体験する。 外に出て体を動かす。	手を取り、他児と関わる機会をもたせる。 担任が運動場について出て、固定遊具を使わせる。

シート4 個別の指導計画（年間）

3. 実践の考察

個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成にあたり、保護者と話し合いができ、児童を見つめ直す良い機会となった。また、保護者から家庭の取り組みを聞くことから、得意なことや興味を持っていることがわかり指導の手がかりとして授業に活かし、児童が楽しんで活動することができた。

児童の変容としては、クラスの児童(4年)をまねたりして、2学期に入ってから、アンパンマンのパソコンや音の出る絵本、ボール遊びなどに興味を持ちはじめ、遊びのバリエーションも増えてきた。それと同時に、担任の手を引いたりして、「これで遊びた

い」「これを取ってほしい」といった自分の意思を態度に出すようになってきた。大きな音や、特定の音には過敏に反応するが、集団の中にはスムーズに入ることができ、また、周りの友だちの模倣をするなど、自分が何をすべきかわかっている様子も見られるようになってきた。排泄も意思を出し始め、「トイレに行く？」と、聞くと、自分から部屋のドアを開けてトイレに行こうとする姿が見られるようになった。給食では、自分でパンをちぎって食べたり、おかずなどを自発的に食べようとする姿が見られるようになり、偏食も少なくなってきた。保護者の話では学校を毎日楽しみにしているようで、病気やけがも無く欠席の無い日が続いている。担任だけではなく、保護者と共に、I児の今までの生活や現在の生活をしっかりと見つめながら指導計画を考えていくことで個に応じた指導につながったように思う。今後、⑦指導計画に即した教材教具を工夫して指導し、⑧指導の成果について評価し指導の改善に努めていきたい。

個別の教育支援計画、個別の指導計画は、大阪府教育委員会の資料を参考にする

(5) 実践事例5 保健室 保健室前掲示板を利用して

もっと知ろう、もっと伝えよう、自分のこと

1. 児童の実態

本校の児童は、学年により多少の違いはあるが、比較的落ち着いた環境で学習に取り組んでいる。低・中学年では、活発に意見を述べ、積極的に活動できている反面、「言われて腹が立ったから」と些細なことで手がでたり、他人との意見の違いを認められず、はげしい言葉で言い返してけんかにつながる児童もいる。高学年では、幼さが残る児童が多く、教師の指示に対して素直に従うが、自分の意見や気持ちを表現しない児童も少なくない。

そこで、児童が気軽に自分のことを表現したり、他人の意見を知ることができたりする方法はないかと思い、保健室前の掲示板を利用して以下のワークを行った。

2. 実践

児童の目にとまった際に実施できるよう、保健室前の掲示板に、ワークのテーマや記入の注意等と記入した用紙を貼る台紙を掲げ、その側に記入用紙をおいた。

①「MY FAVORITE SONG～わたしのだいすきなうた～」(掲示期間：10月1日～11月30日)

(ア) ねらい

- ・好きな歌を書くことを通して、自分が元気をもらえるもの(曲)を見つけることができる。
- ・他の意見を通して、新しい好きな曲を見つけたり、自分と同じだと共感したりすることができる。

(イ) 実施方法

- ・自分の好きな曲と、その曲をきいたときの自分の気持ちを台紙に書く。
- ・自分の書いたものを掲示板の五線譜にはる。
- ・他の人が書いた「MY FAVORITE SONG」



を見ての感想や自分が書いてみての感想もあれば書く。

FAVORITE (フェイバリット) とは、英語で「大好きな」とか「得意な」とか「お気に入り」の意味の言葉。
「この曲をきくと元気になる」「気がつくとき、よく歌っている」そんな曲はありますか？
大好きな曲、テレビで流れている曲、小さいころよく歌った曲、体育大会で流れる曲…、
どんな曲でもかまいません。あなたが自分らしくいられるためにぴったりの曲をみつけて
みましょう。元気がないとき、自分らしくいられないとき、この「わたしの大好きな
うた」を思い出せるといいですね。

(ウ) 実践のエピソードと児童の感想 (記入者数: 延べ67人)

- ・たまたま来ていた卒業生も「これ書いてもいい？」と楽しそうに書く姿があった。
- ・書きながら、「(曲の) こんなところが好き」「～だから好き (理由)」など書いてある内容について、掲示板前で話が弾む姿があった。
- ・自分の好きな曲を書くことに終始するものが多く、他の人の書いたものを見ての意見は少なかった。
- ・「みんなの好きな曲が知れておもしろい。」(4年女子)
- ・「みんな、嵐が好きなんだなと思った。ウフフ」(6年女子)

② 「I AM HAPPY WE ARE HAPPY ～みんななんだかいいきぶん～」

(掲示期間: 11月25日～)

(ア) ねらい

- ・自分の「言いたいこと」「言われたいこと」を言葉にしてみるにより、自分の気持ちを意識し、自分をより深く知る機会を持つ。
- ・他の人が記入したのを見ることで、それぞれの思いや考えがあることに気づく。

(イ) 実践方法

- ・「ハッピーになるために」あなたがだれかに言いたいこと、言われたいことを用紙に書く。
- ・貼ってある紙を見ながら、自分と似ているものの近くに自分の紙を貼る。
(似ているものがないときは好きなところに貼る)
- ・時々、自分の貼った紙の近くに新しい紙が貼ってあるか見てみる。

だれかが ハッピー (いいきぶん) に なるために わたしが ハッピー (いいきぶん)
に なるために 言いたいこと 言われたいこと あるよね そんなことあつめてみよう
みんな いいきぶんになれと いいな

(ウ) 実践のエピソードと児童の感想 (記入者数: 延べ21人)

- ・数人の女子児童が誘い合って、「かわいい」「ダンスが上手だね」(言われたいこと) と書いたのと、友達、家族へのがんばれメッセージ (言いたいこと) の数枚にとどまってしまっている。
- ・「お母さん、がんばってるから、『応援してる』って書きたい。」(6年女子)

③「がんばってるね！！わたし！！」（掲示期間：12月10日～25日）

(ア) ねらい

- ・がんばっていることを言葉にすることで自分を認める気持ちを育む。
- ・友だちや他学年の人のがんばりを見ることで、互いに認め合う気持ちを育む。

(イ) 実践方法

- ・がんばっていることを、紙に書き、クリスマスツリーに貼る。

だれからも ほめては もらえないけれど「がんばっていること」ってあるよね。

あさががてな人は、まい日ちこくせずに がっこうへくるだけでも、がんばってます！

にがてなやさいをたべている人も、がんばってます！

「がんばっていること」は、みんなそれぞれちがいます。人とくらべるのではなく、じぶんで「わたし、がんばってるな！」「わたし、がんばったな！」とおもうことをかいてみましょう。まずはじぶんで「わたし、がんばってるね！」とみとめてあげられるといいですね。

(ウ) 実践のエピソードと児童の感想（記入者数：延べ30人）

- ・クリスマスツリーをかざるといのかわいらしさも手伝ってか、低学年の記入が多かった。
- ・低学年ではお手伝い、勉強など、高学年ではダンスやバスケットボール、サッカーなど学校外で自分ががんばっていることを多く記入していた。
- ・「いっぱい書いて、飾るのが楽しい。」（1年男子）
- ・「最初は、書くことないなと思ったけど、みんなのを見たら私にもあると思った。」（6年女子）



3. 実践の考察

①「MY FAVORITE SONG」では、自分の好きな曲を書くので、抵抗なく積極的にできていた。しかし、なぜその曲が大好きなのかという気持ちの部分は深く考えることなく、「グループが好きだから」「楽しいから」と書いているものが多かった。小学生では、曲を聴くというのは、「楽しい」ことであり、特定の曲が他の感情に結びつくのは、これからかもしれない。今後、児童が書いた曲を、学校生活の中で聴く時間が持てれば、「楽しい」と感じる曲を聴くことによりストレスの軽減を図ったり、学校を「楽しい」と感じる機会を増やすという活用の仕方も考えられる。

②「言いたいこと・言われたいこと」では、自分の気持ちと向き合ったり、言いたい誰かを思い浮かべる時間が持てたりする工夫が必要であったのではないかと考える。また、掲示板という性質上、『ハッピー（いい気分）になるために』と限定したが、児童にとってイメージするのが難しく、書きにくいものになってしまった。

③「がんばってるね！！わたし！！」では、最初に数人の教師が書いたもの（名前入り）を貼っておいた。そのことが、児童の気持ちの敷居を低くしたようで、普段あまり自分のことを言わない児童が、夢中になってがんばっていることを記入し、ツリーの目立たない場所に貼っていた。このワークでは、誰かに「がんばっているね」と言ってもらっている児童、誰かに言ってもらわないけれど自分で認められる児童は記入

することができるが、本当に自分を認められていない児童は、小さながんばりできえ見つけることが難しいと考えられる。何度か実施する機会を持ち、小さながんばりを表現できるようにしたい。また、児童が書いた内容を「がんばってるね！〇〇さん」という言葉でかえす場があれば、他者からも認められていると感じられるのではないだろうか。

今回のように掲示板を利用した場合、児童が空いた時間を使って自由に記入することができるという利点はあるが、自分と向き合う「落ち着いた雰囲気」を作るのは難しい。また、書かれたものを見ることでの、シェアリングやふり返りができるが、十分とは言い難く、実施してみても感想や心の動きを知ることが難しい。感想用紙と入れる箱を準備して感想を書かせたり、記名式にすることで実施後の指導に活かすことができるのではないかと考える。またいずれのワークにおいてもコメントを一言添えたり、サインをするなど「見守っている」と感じさせる工夫も大切ではないかと考える。

参考文献「教室で 保護者会で 保健室で 相談室で すぐに使える！
とじ込み式 自己表現ワークシート2」 大竹直子 図書文化社

4 研究のまとめ

今年度は、個や集団の質を高めることをめざして、5人の研究部員が実践研究に取り組み、授業研究も行った。

実態を把握するために、Q-Uアンケートや希望調査、個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成等を行った。これらを活用することによって、個や学級集団の現状を客観的に捉え、児童生徒への予防的な手立て・支援を考えることができた。

日常的な取り組みや授業では、学校生活の中で存在感をもち、自己決定のできる場があること、感情や気持ちを共感できる集団があることを大切にしてきた。

「振り返りの時間をもつことで自分と向き合う」、「書いたり話したりすることで、自分の気持ちを言語化する」、「グループや学級の中でお互いの思いを知り認め合う」等を実践してきたことによって、集団の中でつながりが見え始めた。

そして、5つの実践から、自分が励まされ、認められる集団の中にいる、人とつながることが楽しいと気づいた時、自分に自信を持ち、変わり始めることができると強く確信した。

これらの実践を、一時的なもので終わらせるのではなく、まず、研究部員の学校で研究内容を報告し、そして、学校外へも発信し、広め、深めていくことが重要である。

5 おわりに

人は、人とのあたたかくてふれあいのあるつながりの中で、人の力を借り、時には人の力になりながら成長している。こうした「人とのつながり」をたくさん感じてほしいと願い、研究を進めてきた。

今後も、集団が楽しいと感じられる環境をつくることと集団の中で一人一人が生きる力を育むことを課題として実践を積み重ねていきたい。

確かな言葉の力を育てる指導の研究

—伝え合う力の育成をめざして—

指導主事	樋口博子
研究員	青木優季恵（潮小）
〃	松野冴子（浜田小）
〃	森戸寛子（浜田小）
〃	西尾鮎子（立花西小）
〃	鈴木佳世（水堂小）
〃	糸賀美和（園田北小）

【内容の要約】

本年度の研究は、昨年度の継続研究である。昨年度の研究を継続しつつ、「言語活動の充実」をキーワードに「伝え合う力」の向上、「対話・話し合い活動」の充実に向けた取り組みを実践研究する。

- 年間指導計画を作成し、日常の教育活動の場面で、「伝え合う力」を高める活動を継続して実践する。

キーワード：PISA型読解力，対話活動，精読から多読へ，ブレインストーミング
ディベート，書くこと（ノート指導），ブックトーク

1	はじめに	81
2	本年度の研究の概要	81
3	実践	
	（1）低学年の実践1（1年生）	83
	（2）低学年の実践2（1年生）	86
	（3）低学年の実践3（1年生）	89
	（4）低学年の実践4（1年生）	93
	（5）低学年の実践1（5年生）	97
	（6）低学年の実践2（5年生）	100
4	研究のまとめと課題	102
5	おわりに	102

1 はじめに

学習指導要領の国語科の目標の中に「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」とし、伝え合う力の指導を重視している。

「伝え合う力」とは、人間と人間の関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり、正確に理解したりする力である。情報化・国際化の社会で生きて働く国語の力であり、人間形成に資する国語科の重要な内容となる。

言葉で伝え合う力を育むためには確かな言葉の学びの完成を持たせることが大切である。話し方、聞き方、書き方、読み方などの言語技能・技術を確かに身に付けさせることである。言葉のすばらしさや豊かな力を実感することは、言葉に対する認識を新たにするとともに言葉を大切にし、自ら言葉を磨いていこうとする態度を育てる。さらに言葉で伝え合う場合には、伝え合う内容（何を）と確かな言葉の学びの技能・技術（スキル）を身につけさせることが大切である。話し方、聞き方、書き方等、考える技法・技術などを獲得させることが必要である。そこで、本研究においては「確かな言葉の力を育てる指導の研究」というテーマで「伝え合う力」を育てる授業実践の開発をしていく。

2 本年度の研究の概要

本年度の研究は上記テーマに迫るべく、「言語活動の充実」をキーワードに「伝え合う力」の向上、「対話・話し合い活動」の充実に向け研究を進めた。「伝え合う力」は言語活動で言えば「聞く・話す・読む・書く」のそれぞれが個別的活動ではなく、総合的に行われなければならない。そこで、部会では国語科の年間カリキュラムを作成し、3領域を総合的に学習することを目標に、伝え合う内容（何を）と伝え合う技能・技術（スキル）をカリキュラムに組み込み、めざす子ども像を明確にした。また、伝え合う方法や伝え合う相手、内容・場面などの設定を工夫することにより「対話・話し合い活動」も高まると考え手立てや指導等の実践を追究した。

(1) 研究の進め方

1. 学年毎の年間カリキュラムの作成
2. 各領域ごとの能力分析、子どもの言語生活の実態把握、表現と理解が一体となった学習形態や学習方法の研究。
3. クラス実態から課題を探り、課題克服のための授業方法を提案・実践する。また、研究のまとめでは、児童の変容を根拠をもとに成果を具体的に示す。

(2) 言語の基礎技術を定着させるための授業開発

1. 「話すこと・聞くこと」と対話

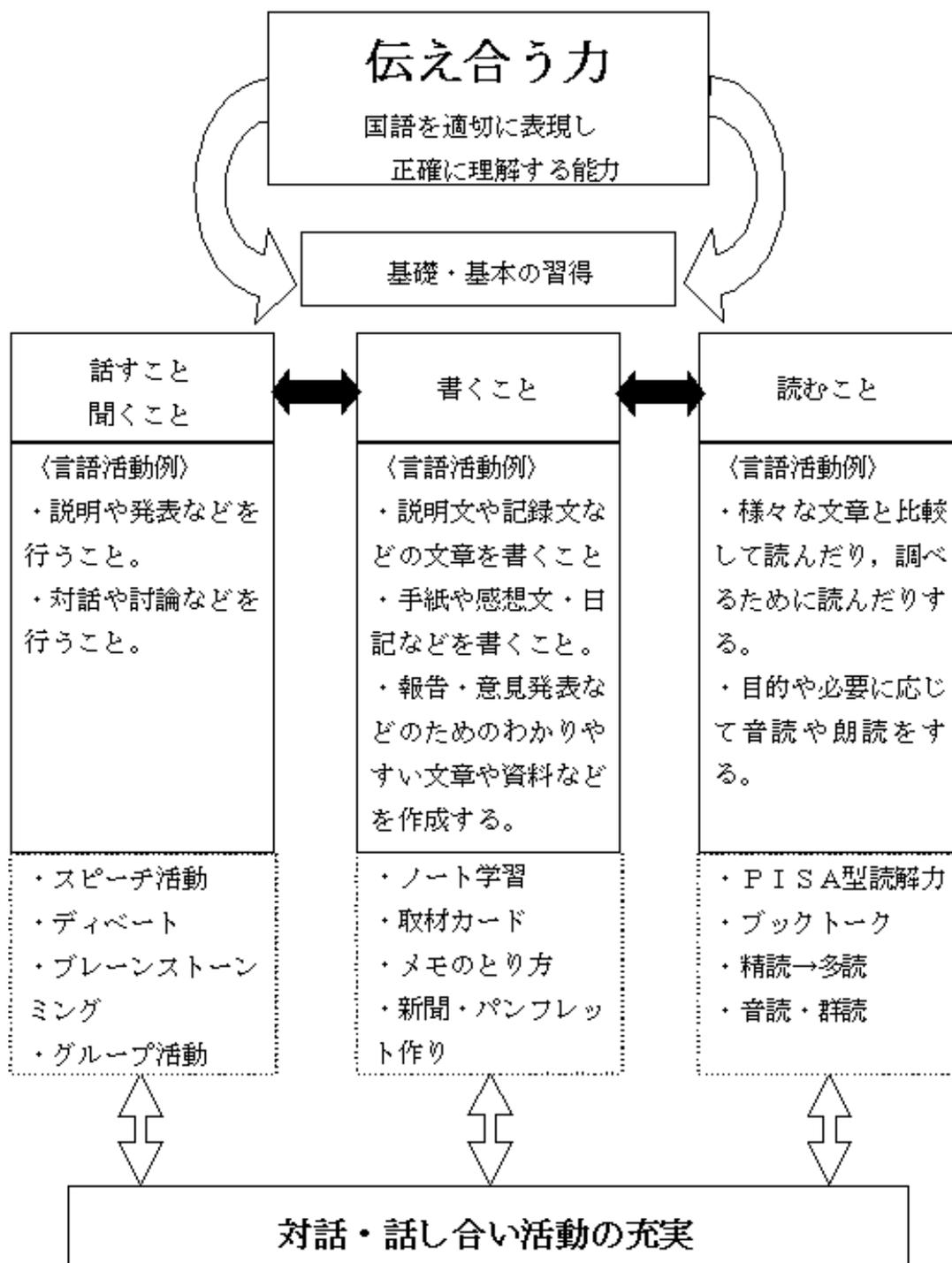
相手の話をしっかりと受けとめた上で、何らかの反応をして返す応答的なことばの力の育成。感想をのべたり、質問したり、反論したり、受けて返すことをくり返すことによって対話力がつく。

2. 「書く力」と対話能力

書く活動を通し、自己の考えを深めたり、広げたりする中で、意見や理由を明確にすることで、自己の学びを確認することができる。また他者の考えを知ることで対話しながら自分の意見を書くことができる。

3. 読む力と対話能力

作品とどこまで深い対話ができるかが、読みの深さを決定づける。作者や登場人物と対話することで読みを深めていく。疑問から課題に発展させ、他者と意見を交流することで自己の学びと他者の考えを比較し、新たな考えへと発展させていくことができる。



3 実践

(1) 低学年の実践1(1年生)

1. 児童の実態及び課題

入学当初、話の聞き方がわからず、相手がまだ話している途中で口を挟む児童も多かった。また、集中して聞くことができず、正しく聞き取ることができていない児童もいた。話すことについては、聞く相手を意識していないため、声が小さく聞き取りにくい。また、すすんで挙手できない児童もいた。そこで、話すこと・聞くことの基本的な力をつけさせることが課題であると考えた。そして、それをさらに発展させて、読み取ったことをわかりやすく伝えることができる力もつけさせたいと考えた。

2. 取り組み内容(目標)

- ・話をよく聞き、思いを相手にわかるように伝えることができる。
- ・自分の思いを正しく伝えるために、意見とその理由を述べることができる。

3. 具体的な手だてと実践

① 聞くルールの徹底

集中して聞くために、話し手に体を向けて、最後まで聞くことを徹底した。その結果、ほぼ全員がさっと体を向けて聞く習慣がついた。

② 話すための基本的な指導

はっきりと話すために、発声や口形の指導をし、継続して音読指導を行った。まだ自信がなく小さな声の児童もいるが、音読を楽しんでいる児童が多く、はっきりとみんなに届く声が出せるようになってきた。

スピーチの継続により、みんなの前で話すことに抵抗がなくなり、質問にも答えることができている。また、2学期からは、本の紹介を自主的に始め、スピーチの内容の幅が広がっただけではなく、読書量も増えた。

すすんで挙手できない児童をなくすために、友だちの発言を大切にするクラスの雰囲気づくりにも努めた。その結果、間違っても恥ずかしくないということがわかり、全員発表できる場面が増えてきた。

③ 発言力を育てる指導

児童が意見を述べる時に理由が言えるようになることを目標とした。そのために、どんな時にも意見に対して「どうして？」と尋ねるようにした。すぐに理由が言えない児童に対しては、時間をかけてわかりやすく質問しながら徐々に理由が言えるように指導した。

〈授業実践〉

『おおきなかぶ』

問い1「抜く順番が変わってもいいのか？」

○順番が変わってはだめという意見が圧倒的に多かった。

〈理由〉. おじいさんは種をまいた人だから1番。

. おばあさんとまごだったら、おばあさんの方が大きいので2番。

. まごは、犬・ねこ・ねずみの中で、大きくて力が強そうなのを呼んで

きたから、犬が4番。

- ・ ねずみが先だったら、ねこがねずみを食べてしまうかもしれないからねずみが最後。

問い2「あなたがおじいさんならどんな抜き方をするか？」

○おはなしと同じ抜き方が多かった。

〈理由〉. おはなしのとおりにしたら抜けるから。

- ・ スコップで掘って、抜く。
- ・ 水をかけて、土をやわらかくしてから抜く。
- ・ ロープで引っ張って抜く。
- ・ この方法のほうが、抜けやすいと思うから。

この授業を通して、児童は問いかげられなければ何も疑問に思わなかったことについて自分の考えを持つことができ、この物語に深く入り込むことができた。

A児は、すすんで発表できる児童であるが、この授業で自分とは違う考え方に気づき、それを認めることができた。B児は、友だちの意見を聞くことによって自分の考えを深め、ワークシートに詳しく書けるようになった。C児は、初発感想を1行書くのがやっとならしたが、友だちの意見を聞き、ワークシートに繰り返し書くことで、おはなしの続きを考え、最初より多く文章で表現することができた。

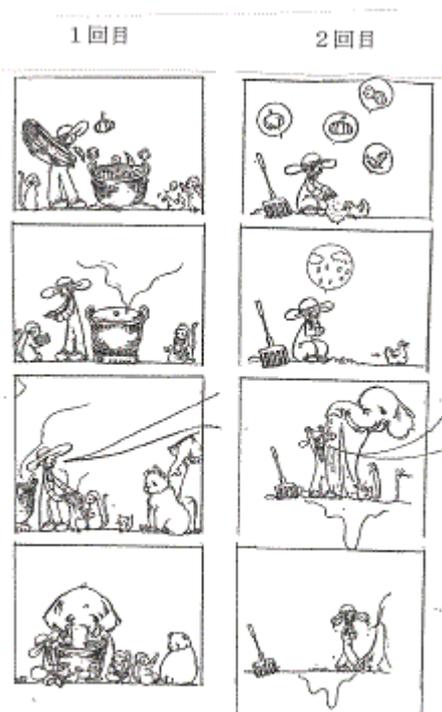
〈絵をよく見て、考えよう〉

2学期は、『おおきなかぶ』で学んだことをさらに発展させるために、本教材を取り入れた。絵本の中の4枚の絵【資料1】を見て、3枚目にセリフを入れる。的確な言葉を入れるためには、絵の前後関係を読み取り、絵を細部まで見て考えなければならない。そのためには、相手を納得させる理由が必要である。納得できる理由があれば、答えは一つとは限らない。そこで、見方によっては多様な考えのできる絵、児童を引きつける絵を選んで、教材とした。

1回目は、C児を含め会話文として書けない児童が4人いて支援が必要であったが、他の児童の発表を聞いて、全員自分の考えを書くことができた。「とりあいしないで」さるが2ひき集まっているから。「いっぱい作ったよ」ぞうがいるから。「みんなのおかげで早く作れたからみんなでたべよう」[みんなが一生懸命に作った顔に見えるから]このように、意見に対して納得できる理由を書くことができた。

2回目になると、全員が支援なしで書き上げた。ただ、前回と違って絵の見方が二分した。

「うわあ、ぞうだ。服がぬれちゃうよ。」服がぬれてびっくりしているから。「うわあ、ぞうに水をかけられた。」4枚目でくまでを忘れるほどお



3枚目の絵の主人公のセリフを考える

『ジャーマーとガロン』(くくり なつ 絵)より

【資料1】

こりながら帰っているから。「やった、ぞうが水やりをしてくれた。」手を上げて喜んでいるから。「ぞうさん、きてくれてありがとう。」2枚目であひるのガロンがぞうさんを呼びに行ってくれて、ぞうさんが来てくれたから。このように、主人公がおこっていると喜んでいるにほぼ半分に分かれた。この結果について、自分とは違う考えだけれど理由を聞いて納得できたという意見や、自分はおこっているとしか思えなかったけれど、違う見方ができることに気づいたという意見が出された。

この授業を通して、絵を読み取り、自分の考えを論理的に表現する力をつけることができた。また、答えは一つではなく、多様な考え方があることに気づき、それを認めることもできたと考える。

4. 成果と課題・考察

読解力を育てるためにはどう指導すればいいのかを考えたとき、まず基礎的な力をつけさせることが大切だと思い、聞くことや話すことの基本から取り組んでいった。次に、文字を正しく書き、文章で表現できるように、書くことを授業の中で多く取り入れた。

その上で、児童の力をより高めるために、次のようなステップで取り組んだ。

- (1) 教材を正しく理解させる。
- (2) 児童が興味を持つ発問を工夫する。
- (3) 教材を深く理解させるために、指導方法を工夫する。
- (4) 意見に対して必ず理由をつけさせる。

発問については、児童が自分の考えに対してなぜそう思ったのか、教材の中から探るように、教材に書いてあることを根拠にしないと答えられない発問を考えた。また、それは多様な考えが出るような発問でなければならない。その点が難しいところではあったが、発問を工夫することにより、授業では児童が生き生きと自分の考えを述べていた。また、友だちの意見をよく聞いて、自分の考えと比べることもできた。そして、理由をつけることにこだわって指導した結果、国語の授業だけでなく、日番のスピーチや学級会【資料2】など、意見を述べる時には理由をつけて自分の考えを伝えることが習慣になってきている。

以上のことから、発問を工夫することにより、児童の興味関心を高め、「なぜ」「どうして」「だから」に結びつけ考えさせることができた。これからも、読解力を育てるための教材研究を継続して実践する中で、児童に確かな力をつけさせたい。

【資料2 授業風景】



(絵をよく見て考えよう)



(国語でつけた力を生かした学級会)

(2) 低学年の実践2 (1年生)

1. 児童の実態及び課題

2学期当初のアンケートでは、「国語の勉強は好き」と答えた児童は90%であった。しかし、書くことについては、「文や言葉を書くことが好きではない」「あのねちょうなどに書くことが見つからない」がそれぞれ33%と、苦手意識を持つ児童が多かった。初めて学ぶことに意欲的ではあるが、自信がなかったり、どのように表現すればよいかわからなかったりする様子が見受けられた。何を書けばよいかわからなかったり、文字の習得や語彙力が不十分であったりすることが理由であると考え。また、「は」「を」などの助詞、拗音、促音、長音などの習得が不十分な児童が多い。そこで今年度は「書くことが楽しい」と思えるような手立てを探っていこうと考えた。

2. 取り組み内容 (目標)

- 書いて伝えたいような内容、体験や五感を生かせる題材、単元の設定を行う。
学んだことと実生活とのリンクを図り、実生活の中から課題や言葉を見つけさせる。
- 書くことを相手意識、目的意識を持って学習したことや考えを伝える手段とさせる。
- 書きやすい型を与えるなど、うまく表現したり、抵抗をなくすための手立てを取る。
- 書いた後の学級やペアでの交流を通して、質問・応答・推敲・よさを見つけるなど高め合いをさせる。
- 読み物や資料から想像を広げたり、読み取ったりする中で表現語彙を増やす。

3. 具体的な手立てと実践授業

『わたしはだれでしょう』(光村図書)

本単元では、身のまわりのものや生き物・食べ物 of いろいろな観点からみた特徴から作ったヒントを挙げてクイズを作り、交流する学習を行った。6年生とクイズ大会をしようという目的を持たせたため、「書くことが好きではない」割合の高い児童も意欲的に取り組んだ。当ててほしい一つのものについて、イメージマップ【資料4参照】を使ってたくさんのヒントを書き出す。イメージマップを書く練習の際に色・形・大きさ・音・におい・さわった感じ・使い道・つくり・働き・仲間などのいろいろな観点を書いたカードを提示した。また実物を(バナナやみかん)一人ずつに持たせたり、房丸ごとを見せた。実際に見ることで「～みたい」や「きいろいふくをきている」「こしがまがっている」など比喩での表現、色や手ざわりなどのくわしい描写や「おさるがすき」、「ジャングル」などのイメージの表現も広がった。イメージマップに自由に書くことや、順番を後で変えられる短冊に文を書かせたことは、書くことへの抵抗感を取り除く手立てとしてである。次に問題として、マップに書いたヒントから、3つ選んで「わたしは～です。」の形に文章化させた。なぜそのヒントを選んだのかを考えさせたり、クイズにする際にヒントを出す順番を難しいものから簡単なものになるように(①あれかなこれかな②たぶんこれだ③わかったぞ)という児童から出た合言葉の順に考えさせることで、順序を整理し簡単な構成を考えて文を書こうとする意識が見られた。作ったクイズ文を出し合う中でヒント文の選び方や順序によって、クイズが簡単になりすぎたり、また答えが限定されなかったりするとつまらないことに児童は気づき、本番のクイズ大会に向けて、自然と推敲ができるようになった。また問題を出し合う際、聞き手はクイズの答えがわかっているにもかかわらずすぐに解答を言

わず、それを確かめるための質問をさせた。そのため、答えを限定していく鋭い質問も多く出て、質問力を高めるのにも役だった。

ブレインストーミングをする様子 C1①「わたしにはおいているばしょがあります」



- ②「わたしにはかわがあります」
- ③「わたしはたべものです」「わたしはなんでしょう」

C2「これやったらバナナってわからへん」

「おいているばしょってなんですか」

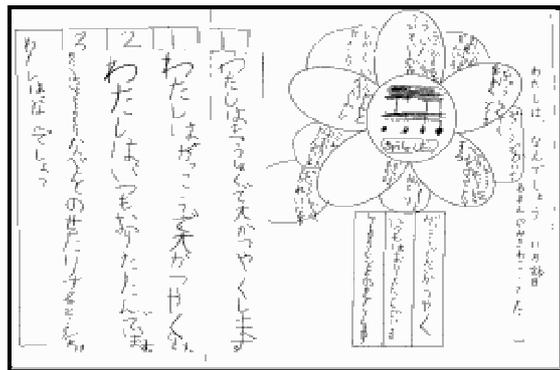
C1「ジャングル・インド・スーパーです」

T「じゃあそれをヒントに入れたらバナナってわかるかな」

【資料1 全員で作ったバナナクイズ】

- C3①「わたしはみなみのしまからきました」
- ②「わたしはむかないとたべれません」
- ③「わたしはみかづきみたいなかたちです」
- 「わたしはなんでしょう」

C4「みなみのしまからきたといういいかた
がおもしろいです」【資料1】



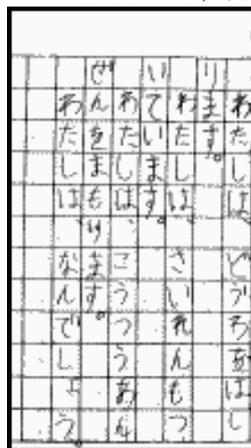
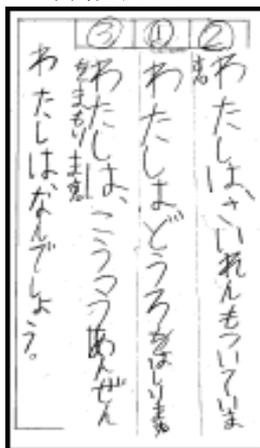
C5「これやったらバナナってきまる」

【資料2 ワークシート】

資料4④「わたしはがっこうでだいかつやくします」を④「わたしはきゅうしょくでだいかつやくします」と、違う色の短冊【資料3】に書き換えた。中間発表では「最後のヒントを聞いてもわからなかった」と評価されたため、ヒントの条件を狭め、わかりやすくしている。

ワークシートの①と②の順番を入れ替え、作文用紙に清書する際に書き換えている。【資料4】

中間発表では「一つ目のヒントでわかり、簡単すぎる」と評価されたため、決め手となるヒントを後の方へもっていった。

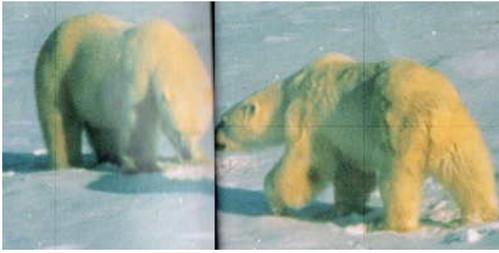


このように子ども達のブレインストーミングによって自由に多くの意見を出し、独創的なアイデアを引き出してクイズ作りをすることができた。またペアでの発表を何度か行い、お互いの問題を評価させた。最後にそれをもとにヒントの内容や順番がそれでよいか自己評価させ、推敲へつなげた。また書いたことをもとに、話し合わせることで、友だちのよい表現を見つけたり自分

【資料3 短冊の文】【資料4 清書作文】と比較をしたりすることができた。

物語『うみへのながいたび』

物語の学習前に教科書を見せないで、全場面の写真をばらばらに提示し、順番を考えるとともにその物語を作らせた。その順にした理由や、友だちのものを比較しての意見を話し合わせた。最後に教材を読んで、実際の順番や物語と比較させた。写真資料からの読み取りや理由づけ、比較をすることでPISA型読解力を育成することをねらった。



〈写真1 についての話し合い〉

C1 「オスとメスのくまがなかよくしているからおとうさんとおかあさんと思います。それで赤ちゃんが生まれるから、これが1番はじめだと思います。」

C2 「メスが顔をぐいっと近づけて、オスがしょんぼりしてるから途中でけんかしてるんだと思います。」

【資料5 挿入写真1】

C3 「たびにでかけてると思うのでこの順番にしました。」

C4 「C3さんの順番だったら、赤ちゃんの大きさが途中で小さくなってから、ちがうと思います。」

C5 「その順番だったら、途中で海になって、その後またゆきのところにもどってるから、ちょっとへんで、うみの写真は最後にした方がいいと思います。」



〈写真2 についての話し合い〉

C6 「この写真は、一番はじめだと思います。わけは、お母さんぐまがおなかのいたいと言って、しゃがみこんでいて、もうすぐ赤ちゃんが生まれるんだと思ったからです。だから赤ちゃんが出てくる前だと思います。」

C7 「C6さんとちょっとちがって、それは海に行くか悩んでるところです。」

【資料6 挿入写真2】

写真1ではくまの様子、表情を読み取って、話し合うことができた。C3、C4、C5の話し合いでは、登場人物の大きさや、場面（場所）の様子から順序を比較している。写真2では、物語を自分なりに想像する様子が見られた。書く指導や書いたものを元に話し合う指導を繰り返してきた結果、書かなくても話し合える力も身につけてきたといえる。またその後実際の教材文の読み取りの指導は、下のように行った。

① その場面の写真から気づいたことを出し合う。

② ①で出た様子が文章のどの言葉で表されているか探し、対応させる。

写真資料から読み取ったことを叙述に即して考えさせることで、語句の理解がしやすかったようである。また写真を見て自由に話し合わせることで、語彙の拡充をねらった。

4. 成果と課題・考察

9月と1月に行ったアンケートを比較すると「文をかくことがすき」の割合が67%から87%と増加している。6月ごろより、生活科や行事などとリンクして絵や文章で書く機会を多く設けてきた。また折に触れ、友だち、おうちの人の、ペアの六年生、登場人物やサンタさん等へ、手紙を書かせることで「相手意識・目的意識を持って書く」ということができてきたと思われる。また、イメージマップに自由にどんどん書いて、そこから選んで文にするなど、書くことへの抵抗感を取り除き、発想を広げる手立てをとったことも有効であったと思う。「書くことがみつかりますか」の項目では「はい」の割合が、67%から80%になっている。5W1Hや見たこと聞いたことさわったこと思ったこと等の観点を、スピーチや作文指導の際にカードを提示したり、作文メモを与えたりして繰り返し指導した。カードやメモの観点到に沿って書くことで、書くべきことがわかりやすくなったのだと思われる。またあのねちょうを継続していろいろなテーマで書かせたことも有効であったと思われる。しかし、まだそのテーマが与えられなければ、書くことに悩む児童も多い。特別なことを書くのではなく、日常の小さな気づきを取り上げられる取材力や感性を育てるところにはまだいたっていない。さらに言葉の響きやリズム、想像の美しさにも気づかせられるような指導を取り入れたい。また「を」「は」「っ」の表記や会話文「」やマスの使い方などがまだ定着していない。今後は基礎・基本の定着をさらに時間をとって繰り返し行っていく必要がある。

(3) 低学年の実践3 (1年生)

1. 児童の実態 (書くこと)

1学期に、ひらがなとかたかなの学習を行った。文字の練習を積み重ねていき、ひらがなやかたかなを読んだり書いたりできるようになってきた。しかし、ひらがなやかたかなをなかなか覚えられず、文字を書くことに大変時間を要するC児がいた。また、「は」「へ」「を」などの助詞が正しく使えない児童もいた。

7月から、日常起こったことなどを書く「あのねノート」を始めた。すらすらと書ける児童もいるが、書くことに大変時間を要したり、書く内容が全く思いうかばない児童もいた。

2. 取り組み内容 (目標)

あのねノートに書く内容をすぐに思いつくことができ、すらすらと書けるようにする。文字や文章などを楽しんで書けるようにする。

3. 具体的な手だてと実践

①ノート指導

書けるようになるためには、出来るだけ書く量を増やすことが大切であると考えた。そこで、国語の学習の時間にはほぼ毎時間ノートを書かせてきた。プリントはできるだけ使わず、ノートを使わせた。プリントを使ってしまうと、大事な所のみを書くことになるため、全部の学習内容を上手にまとめる力がつかないのではないかと、考えたためである。1年生の場合、初めは大変書くことに時間を要していたが、回数を重ねるごとにすらすらと書けるようになってきた。

<C児の指導>

教師が横について、一緒に声を出して黒板に書かれてあることを読みながら、書かせた。初めは横についていないと、書く手が止まるが多かった。そこで、黒板に書かれてある事を自分で読みながら書いたり、書き方のパターンを根気よく指導したりした。すると、12月ごろになると、黒板に書かれてあることが自分で書けるようになってきた。

②マップ作文

なかなか書く内容が思いうかばない児童が多かったので、マップ作文を週に1回程度取り組んだ。マップ作文【資料1】は、キーワードを与えることでキーワードからイメージすることを書き、言葉を通して自己のイメージを広げることができる。そして、一つのつながりへと結びつけることができる。文を書くことが苦手な児童にとっては、マップを使うことですらすらと作文が書けるようになってきた。

<C児の指導>

初めはマップを全部完成させることもままならなかった。そこで、教師が横につき、話をしながらマップを作成した。すると、まだまだ時間を要するが、マップを

こんないざいがかいてみよう！

4がつ	にゅうがくしき、あたらしいせんせい、あたらしいもたち、がつこうたんけん、はるをみつけたよ、ランドセル、さくら、さんかんび、しんたいそくてい、おはなみ、はるやすみ、
5がつ	ははのひ、あさがおをうえたよ、こいのぼり、かしわもち、ゴールデンウィークのおもいで、こどものひ、けんぼうきねんび、くさばなであそぼう、かていぼうもん、
6がつ	プールびらき、すいせい、あめ、つゆ、かたつむり、あじさい、なめくじ、ざりがに、ちちのひ、ほたる、むしばよぼうデー、ひななくれん、かえる、そのきたふれあいまつり
7がつ	たなばた、こんななつやすみにしたいな、1がつきをふりかえって、しゅうぎょうしき、せみ、あつい、うみのひ、バーベキュー、なつやすみ、いきもの、あゆみ、あさがお、
8がつ	おまつり、ぼんおどり、すいか、おぼん、うみ、くわがた、かぶとむし、はなびたいかい、はなび、ラジオたいそう、りょうこ、なつやすみ、なつやすみのしゆくだい、へいわについて、ひやけ、すいかわり、プール、
9がつ	なつやすみのおもいで、たいいくたいかい、たいふう、おつきみ、むしとり、わたしのたからもの、プールおさめ、2がつきのめあて、かかりのしごと、しゅうだんとうこう、たいふう、しんがたいンブルエンズ、
10がつ	いもほり、おてつだい、いねかり、あきみつけ、たいいくのひ、めのあいごデー、あきとあそぼう、ぼくのゆめ、わたしのゆめ、くりひろい、
11がつ	どくしょのかんそう、おちば、どんぐり、さいきんよんだほん、もみじ、ずこうてん、まつぼっくり、きゅうしょくしゅうかん、じきゅうそう、
12がつ	わたしのほしいプレゼント、クリスマス、おおみそか、じきゅうそうたいかい、さんかんび、おもちつき、おおそうじ、ふゆやすみがねんがじょう、2がつきがねんばったこと、はつゆき、
1がつ	おしょうがつ、はつもうで、ふゆやすみのおもいで、ことしのめあて、おとしだま、さむい、ゆき、せいじんのひ、どくしょかんそうばん、きゅうしょくについて、スキー、ゆきあそび、こおり、しもやけ、かきぞめ、
2がつ	せつぶん、まめまき、こたつ、みかん、おでん、りっしゅん、せいちょうしたこと、さんかんび
3がつ	もうすぐ2ねんせい、そつぎょうしき、しゅうりょうしき、さようならせんせい、ひなまつり、わたしのゆめ、できるようになったこと、はるみつけ、6ねんせいをおくるかい、6ねんせいありがとう、

つぎのようなことにめをむけてかいてみても、おもしろいよ。じぶんのかんがえかたやもののとらえかたが、ぐんぐんのびていくよ！
 ①じぶんなりにくふうしたこと②ねばりづよくやったこと③がつこうやおうちでほめられたこと④がつこうのいきかえりてみたこと⑤きせつのかわりめにかんじたこと⑥ゆきをだしたこと⑦がつこうでのペンきょうのこと⑧ともだちのこと⑨たのしかったこと⑩がつこうでみたこと⑪テレビをみてかんがえたこと⑫よそうしてみたこと⑬じぶんがせいちょうしたなとおもうこと⑭くやしかったこと、かなしかったこと⑮ゆめやきぼう⑯ほんをよんでかんじたこと⑰せんせいにききたいこと⑱ししたこともかいてもいいのですが、できるだけみたことやはなしたことをおもしろくかいていこう！！

1ねん くみ なまえ

【資料2 2行作文】

〈授業実践〉

教材名 『はたらくじどう車』

本教材は、本文に出てくるはたらくじどう車について、使い道、作り、はたらきを読みとることが目標である。読みとった内容についてワークシートを使ってまとめる場合が多いが、書く力をつけたかったので、ノートにまとめさせることにした。

〈書くためのまとめ方の工夫〉

- ・ まず目の効果的な使い方。(子どものまず目に合わせて、黒板に板書する。)
- ・ 箇条書きにする。
- ・ 長文は出来る範囲で短文に変える。
- ・ 色えん筆を効果的に使って、ポイントをつかみやすいように工夫する。

1回目の時に上記のような指導を行った。黒板に書かれてあることをまとめるのに、20分以上時間を要し、45分以内に終わらせることが出来なかった。しかし、パターンを覚えてくると、上手にまとめられるようになり、およそ12分位でほとんどの児童がノートにまとめられるようになった。同じパターンをくり返すことで、そのパターンが定着していったと考えられる。



4. 成果と課題

書けるようになるためには、書く手だてをきちんとすることが大切であると考え、研究を進めてきた。

【表1 アンケート結果】

内容	7月	12月
①あのねノートを書くことが好きですか。	大好き 25% 好き 42% ふつう 26% きらい 7%	大好き 69% 好き 20% ふつう 8% きらい 3%
②あのねノートに書くことがすぐに思いつく。	すぐに思いつく 0% 思いつく 59% あまり思いつかない 34% 全く思いつかない 7%	すぐに思いつく 35% 思いつく 35% あまり思いつかない 27% 全く思いつかない 3%

○あのねノートに書くことがすぐに思いつく、の割合が上昇している理由としては、

- ・「こんなだいざいでかいてみよう」を参考にして書くうちに、自分で書くことがすぐにおもいつけるようになった。
- ・学習中などに、「今日はこんなことで書いてみよう」などの声かけをしたから。
- ・毎日あのねノートを書くので、常にどんなことを書こうか考えながら過ごすようになったから。

以上の3つのことが考えられる。

あのねノートに書くことがあまり思いつかないの割合は、7月が34%だったのに対し、12月は27%と減ってはいるが、あまり変わっていない。この理由としては、毎日書かせているため、1週間に1度書く時と比べ、書く内容が見当たらなくなっているのではないかと考えた。このことに関しては、新しく対策を練っていく必要があると考えた。

○あのねノートを書くことが好きである、の割合が上昇した理由としては、

- ・書くことがすぐに思いつくようになったから。
- ・毎日書くことによって、書くことに対して抵抗が少なくなり、興味・関心をもって取り組めるようになったから。
- ・教師が書くコメントを読むのが毎日楽しみだから。

以上の3つが考えられる。

○国語の学習の時間に、できるだけノートを書かせ指導してきたことは、効果があったように感じられる。その効果とは、

- ・書くパターンを知ること、短時間でノートをまとめられるようになってきた。
- ・ノートにまとめられるようになったことで、自分の学びを振り返ることができるようになった。
- ・書けるようになったことで、自分の考えを整理することができるようになった。
- ・書いたことをもとにして話すことができるようになったので、話す力が以前よりついできた。

以上の4つの効果があると考えられる。

まだまだ課題は多いが、本学級の子どもたちが、これからも楽しんで書くことができるように指導の仕方を考えていきたい。そして、ただ書くだけでなく、これからは書いている内容の良さにも目を向けていきたいと考える。

(4) 低学年の実践 (1年生)

1. 児童の実態

① 話すこと

人前で話すことに抵抗感を感じていたり自分の発言に自信がなかったりするため、萎縮してしまう児童が多い。

② 聞くこと

教師や友だちの話を聞いたり、質問したりすることが好きな児童は多い。しかし、全体での話し合い活動の場になると話題とは違うことを考えてしまったり、手遊びなどをしてしまったりと最後まで聞くことができない児童がいる。1対1の対話活動では、最後まで聞くことができ楽しく対話する姿が見られる。

③ 読むこと

教科書の文や挿絵から、登場人物が考えていることや話していることを想像したり、登場人物になりきって劇をすることが苦手な児童が多い。

2. 取り組み内容 (目標)

1対1の対話活動をクラス全員とすることで、誰の前でも自信を持って話ができる、また、全体での話し合い活動の場においても積極的に発言できる雰囲気作りに努める。

重点教材を使って、登場人物の様子や気持ちを想像する力を養い、吹き出しなどに書き込みができるようにする。

3. 具体的な手だてと実践

① スピーチ活動

5月より毎日、国語科の時間を使い「いつ」「どこで」「だれと」「なにをした」「そのときのきもち」などの観点でスピーチ活動を一日に三人ずつ行った。5月下旬には、スピーチをすることが楽しいと感じるようになった児童が増えたこともあり、1対1の対話活動に取り組むことにした。また、毎日自分で話したい話題を考えさせたため、飽きずに対話活動に取り組むことができた。

② 視聴覚教材「おはなしのくに」の活用

NHKで毎週放送されている「おはなしのくに」を見た後、思ったことやわかったことなど自分が考えていることを話す時間を設定した。

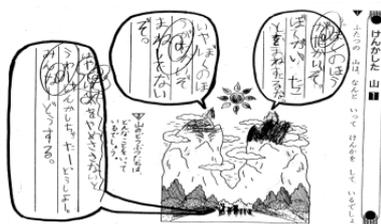
③ 授業実践～コミュニケーション能力を高めるための意見交流会～ 『けんかした山』

本單元では、「自分の考えを相手にわかるように話す」「友達の考えに興味を持って聞く」「尋ねたり感想を持つ」「登場人物の様子や気持ちを読み取る」ことを目標として、授業実践を行った。また、クラスの中から、読み取りは好きだが自分の考えに自身が持てず、発言は苦手なA児を抽出し、「話す」「聞く」「質問をする」の観点で観察・支援を行った。変容については、下記の【表1】と【資料1】を参照。

〈授業実践〉

- ・教師の範読を聞き、初発の感想を書く。
- ・それぞれの場面(4場面)で、ワークシートのふきだしに書き込みをする。
- ・[会話のキャッチボール]を使って意見交流会を行う。

- 《会話のキャッチボール》・〇〇さんと同じで～～です。〇〇さんに似ていて～～です。
- ・〇〇さんと違って～～です。
 - ・〇〇さんに質問をします。



【資料1 A児のワークシート】

A児	1時	2時	3時	4時	5時
話す	C	C	B	B	B
聞く	A	A	A	A	A
質問をする	C	C	C	B	B

(A:達成 B:概ね達成 C:不十分)

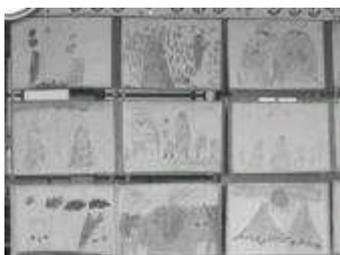
【表1 A児の意見交流会における変容】

○ A児の変容について

自分の考えに自信が持てず、積極的な発言が苦手だったが、ワークシートの良い考えに花丸をつけたり、巡視の際に声かけをしたりすることで自信を持たせた。また、意見交流会では、[会話のキャッチボール]を活用することで、友だちと同じ考えでも発言することに慣れてきたため、「話す」がCからBに変容したと考えられる。

「質問する」がCからBに変容した理由としては、5月より継続的に行っているスピーチ・1対1の対話活動でクラス全員の児童と話をしたり聞いたり、質問をしあったりすることで、自分が疑問に思ったことを躊躇することなく話せるようになったと考えられる。

*好きな場面、または自分オリジナルの挿絵を描き、どんなところが好きなのかどんな場面を挿絵にしたのかグループごとに発表しあう。



【資料2 児童が描いた絵】



【資料3・4 絵を見て話したり、質問したりする場面】



④ 授業実践 コミュニケーション能力を高めるための意見交流会『うみへのながいたび』

本單元では、「自分の考えを相手にわかるように話す」「友達考えに興味を持って聞く」「尋ねたり感想を持つ」「文や写真から、登場人物の様子や気持ちを読み取る」ことを目標として、授業実践を行った。また、クラスの中から、話す・聞くことや質問することは好きで得意だが、読み取りが苦手なB児を抽出し、「話す」「聞く」「質問をする」「読み取る」の観点で観察・支援を行った。変容については、下記の【表2】と【資料5】を参照。

授業展開

- ・教師の範読を聞き、初発の感想を書く。

- ・それぞれの場面（7場面）で、文章のみ書いてあるワークシートに書き込みをする。書き込みでは、思ったこと・わかったこと・疑問に思ったことを書かせたが、疑問に思ったことについては、自分がその疑問についての考え・予想も追加で書くことにした。
- ・〔会話のキャッチボール〕を使って意見交流会を行う。
場の工夫として、机を2列ずつのコの字型にし、話をしている児童がどこからでも見えるようにした。また、「〇〇さんにつけたして～～です。」を〔会話のキャッチボール〕に追加して話をつなげられるようにしたり、話を聞いてなるほどと思ったり、良い考えだと思ったりするときは、うなずいたり拍手をしたりなどの反応を示すことも指導した。

【資料5 B児のワークシート】



○ B児の変容について

文や挿し絵から、登場人物の様子や気持ちを考えることが苦手な B 児だったが、まず、めあてに沿った登場人物の様子や気持ちがわかる場所に線を引かせた。次に線を引いた箇所を読んで思ったことやわかったこと・疑問などを1つずつ書き込ませていった。2時間目までは教師がついて書き込ませたが、慣れてきて1人でも書き込みができるようになった。さらに、疑問については自分の予想が書けるようになったため、CからAに変容したと考えられる。

【表2 B児の意見交流会における変容】

B 児	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時
話す	B	B	B	A	A	A	A
聞く	B	B	A	A	A	A	A
質問をする	B	B	B	A	A	A	A
読み取る	C	C	B	B	B	A	A

(A:達成 B:概ね達成 C:不十分)

- ・DVD「アース」のしろくまの親子が、海への長い旅に出かける映像を視聴する。
 - ・学習して、思ったことやわかったことを、感想文として書き、発表しあう。
- 〈国語アンケートの結果と考察〉
今年度は、児童の実態把握と児童がどのような自己評価をするかを知るために、6月と12月にアンケートをとった。以下にアンケートの結果と考察をする。(数字は人数)

【表3 アンケート結果】

国語は好きですか。		だいすき	すき	ふつう	きらい
	6月	24	1	2	2
	12月	15	6	8	0
相手にわかるように話すことができますか。		いつでもできる	ときどきできる	できない	
	6月	18	10	1	

	1 2月	1 2	1 7	0	
発表することは好きですか。		だいすき	すき	ふつう	きらい
	6月	1 4	0	3	1 2
	1 2月	7	9	1 2	1

子どもたちのアンケートの理由覧を見ると、発表することは好きかという問いに対して「間違えると恥ずかしい」「緊張する」「話したいことがあるのに途中でわからなくなる」などの意見が見られる反面、「みんなの考えが聞けたり自分の考えが言えたりすると楽しい」「思っていたことが言えると気持ちがいい」「みんなが反応してくれるのが嬉しい」「自分の考えを知ってもらえるのが嬉しい」という、肯定的な意見も見られた。これは、意見交流会で、同じ考え・似ている考えであっても発表することで話す事への抵抗感が和らぎ、反応をしめすことの指導により、うなずいたり拍手されたりする機会が増え、自分の考えが認めてもらえたという満足感が得られたためと考えられる。しかし、学習が難しくなるにつれ、書き込みで教師から花丸をもらっても、自信のなさからなのか発表することが大好きな児童が減り、普通だと考えている児童が増えたと考える。

4. 成果と課題

スピーチ活動や1対1の対話活動を取り入れたことによって、クラス全員と話すことができ、質問をすることや質問をされることにも慣れてきたためか、みんなの前で話すことに抵抗を感じるものがなくなった。また、自分と同じ考えであっても〔会話のキャッチボール〕を活用することで、発表回数が増えたり友達の考えにつけたすことができるようになったりと積極的に交流会に参加できるようになってきている。

聞く姿勢については、4月当初より「〇〇さんを見ましようゲーム」を続けており、話し手の顔の見方・身体の向け方が定着しているが、集中力がなくなると姿勢が悪くなったり、手遊びをしてしまったりする児童もいるため、継続指導が必要である。

読み取りについては、教科書の文や挿し絵から、登場人物が考えていることや話していることを想像し、書き込みをすることには慣れてきたため、めあてに沿った書き込みができるようになってきた。

低学年では、登場人物の様子や気持ちを読み取るために、文だけでなく挿絵が大きな役割を果たしている。挿絵から様子を読み取るだけでなく、挿絵にふきだしを書いて話していることを書かせたり、写真を見て劇化させたりすると、一人ひとりが自分だけの考えを持っているために同じ場面でも表情やせりふが違ったり、動作が違ったりとおもしろく、児童も自分とは違う考えを知ることが楽しいと感じてくれるようになった。また、教科書にあるものとは違う挿し絵をオリジナルで描くことによって、教材を児童がどれだけ読み込んだか、登場人物の様子や気持ちをどれだけ想像できたかという評価もでき今までとはひと味違う授業展開ができたと感じている。

コミュニケーション能力を育成するとは、自分とは違う考えを知ることが楽しいと思うことからもっと知りたいにつながり、相手と話してみよう・自分の話も聞いてもらいたいという気持ちを持たせることである。今後も、互いを認め合い、自分との違いを知ることが楽しいと思える授業作りを行っていきたい。

(5) 高学年の実践1 (5年生)

1. 児童の実態

① 話すこと・聞くこと

6人までのグループ内では、ほぼ全員が発言することができるが、学級における発表や音読の目的意識が低い。(自分→教師の対話になってしまう) また、発声が不十分で聞き取れない声で話す児童が多い。

② 読むこと

説明文では聞かれていることに対し、的確な文章を抜き出すことができる児童が多いが物語文では情景から想像をどんどん広げていける児童がいるが、限られている。語彙が少ないせいか、文章を読み込み、自分の考えを書かせる活動では、簡単な言葉で表現しようとしてしまう。

③ 書くこと

既習の漢字を使わず、文を書こうとする。また、5年生の漢字テストをしていても音が同じだからといって2年生、3年生の漢字を書く児童が多い。

④ 言語事項

意味がわからなければすぐに国語辞典を引いている一方で、3年生までの漢字を習得できていない児童もいる。

2. 取り組み内容 (目標)

① 目的意識を持って、自分の考えた事や伝えたい事を的確に表現できる子

② 表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用して調べるところを習慣にし、語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつことができる子

3. 具体的な手立てと実践

① スピーチ活動

グループの中での話し合いの時間を多く取り、終わりの会でのスピーチを継続して行った。その日にあったこと振り返り、クラスの中で発表することで個人の考えを全体で共有させた。毎日書かせている「毎日の振り返り」では、終わりの会でのスピーチを聞き「〇〇さんと同じことを思った」「〇〇君のように頑張りたい」と、友達の見解を受けて自分の考えを書ける児童が増えた。

② 重点教材『五月になれば』(一学期)

まずは一人読みをし、書き込んだことを自由に発表していった。一人読みをして、わからない、気になる言葉に出会えば必ず国語辞典を引くことが定着した。また、授業中に必ず音読を取り入れることで、「大きな声を恥ずかしがらずに出す」ことの定着を図った。

③ 書くこと

あらかじめ題やキーワード、また使ってはいけない言葉を設定しておき、「簡潔に」「いろいろな言葉をつかって」書くことの練習をした。物語文の学習ではまず自分の考えや意見を書き込み、発言のための根拠を明らかにさせた。

④ 精読→多読

《一番心に残った椋鳩十作品を紹介しよう》

文学作品『大造じいさんとがん』を読み、登場人物の行動から気持ちを想像し、人物の生き方についても考えを深め、また椋鳩十の他の作品を読む「比べ読み」をすることによって作者の動物に対する深い愛情、優れた叙述、そして作者の意図を読み取っていくことをねらった。

教科書教材の『大造じいさんとがん』は、猟師である「大造じいさん」と自然の中に生きる「残雪」との関わりが、美しい情景描写と共に生き生きと描かれている作品である。また、残雪をとらえるために毎年いろいろな方法で迎え撃つ大造じいさんの猟師としての姿を、場面ごとに読み取ることができる。「なぜ大造じいさんは残雪を撃たなかったのか。」「どんな気持ちの変化があったのか。」「大造じいさんはどんな人なのだろうか。」ということなど、大造じいさんの心情をいろいろな角度からとらえて考えていくことが可能である。そして、『大造じいさんとがん』の学習で学んだ、物語を読むための「目のつけどころ」を生かして複数の椋鳩十の他の作品を読み進め、紹介することで物語の面白さに触れ、児童の読書の幅が広がっていく単元でもある。4月にとったアンケートでは、約85%の児童が「読書が好き」と答えており、意欲的に取り組める活動の中で伝え合う力をつけてほしいと思い、この単元を設定した。まず椋鳩十に対する興味・関心を高めるために、図書室やインターネットを利用して椋鳩十について調べる時間を設けた後、この学習の全体像を児童に知らせた。次に、教科書教材の『大造じいさんとがん』を学習する。このとき、物語を読むための「目のつけどころ」を学ばせた。

【資料1】そして、この学習の後、複数の椋鳩十作品を読む時間を設定した。このとき、『大造じいさんとがん』で学んだ「目のつけどころ」を生かして「登場人物」「印象に残った叙述」などの簡単なメモを取らせ、紹介する作品を決めたり、紹介の方法を考えたり

するときにも活用させた。読書体験の少ない児童には、読みやすいと思われる作品や興味を持ちそうな作品を紹介し、誰がどの作品を読んだかを把握するために、椋鳩十作品のリストを作成した。そして複数の作品の中から一番心に残った作品を選んだら個人追究の時間をとり、その追究結果をもとに「本が読みたくなる効果的なカバーを考えよう」という活動を設定し紹介の準備をさせた。その際には、本のよさが伝わるように、その根拠となる事柄などを適切に取り入れて書くことを意識させた。下書きの段階で同じ本を選んだ児童でグループを作り、お互いにアドバイスし合うことで内容が深まることをねらった。

- | |
|---|
| <p>①設定(いつ、どこ、だれ)</p> <p>②主人公・変容する人物</p> <p>③構造(冒頭・発端・山場の始まり・クライマックス・結末)</p> <p>④あらすじ</p> <p>⑤情景描写</p> <p>⑥印象に残った叙述</p> <p>⑦作品の心(筆者の意図)</p> |
|---|

【資料1 物語文を読むための目のつけどころ】

最後にクラスの友達に実際に紹介し、感想やよかった点を伝え合った。紹介された作品を「自分でも読んでみたい」と感じ、お互いの学びを伝え合うことで児童の読書活動の幅がさらに広がり、またそれを伝え合っていくという輪ができることをねらった活動である。

4. 成果と課題

スピーチや小グループでの話し合い活動を継続的に行ったが、常に目的意識を持たせるようにした。例えば終わりの会のスピーチは、基本的な話形を活用させるとともに、自分の考えを全体に向けて話すことによってお互いの考えを尊重できる学級作りを意識させた。小グループによる話し合いは国語科以外の時間にも取り入れたが、まずは自分の意見を述べ、その後他の児童の意見を聞き合うことで、様々な立場に立って考えを深められるようになったと考えられる。また、小グループでの話し合いを自分の考えに自信を持たせる場としても活用できたことが有効であった。

2学期の後半以降は、他の意見によって自分の考えが変わった、発表を聞いて良かったと言う声も出るようになった。本のカバー作りでは、同じ本を選んだ児童でグループを作ることによってテーマが焦点化され、的確なアドバイスができるようになったと考える。

この単元では「精読から多読へ」と、一つの作品だけでなく、より多くの物語に触れられるようにと考えて指導したが、反省点として物語を読むための「目のつけどころ」を十分に周知徹底させることができなかつたことが挙げられる。当初のねらいであった「比べ読み」をすることによって作者の動物に対する深い愛情、優れた叙述、そして作者の意図を読み取っていくということが不十分になってしまった。そこで、後の単元「雪わたり」で再度、物語を読み解くための手がかり【資料2】をより具体的に示し、物語文の学習を進めた。

【資料2 読み解くための手がかり】

ア. 冒頭(状況の説明)

イ. 発端(二つのもの・対立しているものが出会う)

ウ. 山場の始まり(場所・時間・人物・事件)

エ. クライマックス(決定的な変化をもたらす一文)

オ. 結末(もたらされた変容)

この読み解く手がかりを提示することによって話し合いのテーマが焦点化でき、普段「なにをしたらよいかわからない」児童には分かりやすかつたようで、意見交流が活発になった。

一つの物語を丁寧に読み取っていく授業の他に、たくさんの物語に出会い、よさを学ばせることを狙って「多読」を設定したが、読むための基本的なスキルをしっかり押さえておかないと、ただたくさんの本を読んだだけに終わってしまうことになる。まずは国語辞典への抵抗をなくし、児童の語彙を増やす。そして、読み解くための手がかりを共有し、どのように読んでいけばいいのかを共通理解したところで多読を進めていくことが大切だと感じた。

(6) 高学年の実践2 (5年生)

1. 児童の実態

学年当初の児童の実態は、休み時間などに教師に話しかけにくる児童は多いが、クラス替えもあり、お互いのことをよく知らない状態の中で、学習の場に限らず、全体の場で進んで自分の考えを伝えようという意欲をもち実行できる児童は少ない。また、教師や友達の話静静地に聞くことはできるが、話し手の意図は何か、自分に伝えたいことは何かなど話の内容を十分に聞き取ることができる児童も少ない。実際に聞き取りテストを実施(7月)したが、完璧に内容を聞き取れる子は6名しかいない。そこで、自分の考えを仲間に適切に伝える力及び仲間の意見を適切に受け取る力、すなわち「伝え合う力」を高める指導を心がけるようにした。

2. 取り組みの内容(目標)

「伝え合う力」を高めるために、

- ① 児童が自らの意見・考えをもち、仲間に適切に伝えることができるようにする。
- ② 仲間の意見を適切に受け取ることができるようにする。
- ③ 仲間の意見を自分の意見と比べながら聞き、友達と関わり合いながら話すことができるようにする。

3. 具体的な手立てと実践

〈児童全員が、実際に話し、聞くための手立て〉

① スピーチ活動

日番は、朝の会、終わりの会でスピーチを行い、班日番は、質問や感想を言う。

1学期単元「自分をアピールしよう」において、スピーチメモを作成し、全員スピーチを行った。その際、スピーチした人への感想やアドバイスを書くための聞き取りメモをとらせた。

② 声をつくる活動

全員、朝の会の元気調べで声を出し、詩の音読をする。

場に応じた声の大きさを意識させる。

③ フリートーク活動(2学期の朝の会から始める)

日番は、日常生活で「みんなに尋ねたいこと」「教えてほしいこと」「気になること」「よく分からないこと」などの話題を提供し、なぜその話題にしたか理由も話す。話題提供を受けて、他の児童が様々な意見を出し合う。司会は日番が行う。話し合いを受けて、日番が話し合いのまとめ(自分なりの結論)を話す。時間があれば、話し合いを聞いていた児童や教師が、話し合いの内容や方法のよさを話す。

④ 対話活動

学級全ての児童が、主体的な意志をもって、話し合い、聞き合い、伝え合う学習空間を創造するために、対話活動を取り入れた。おおよその流れは、次のとおりである。

「仲間と話し合う話題を確認する。→話題に基づき、自分の考えをつくる。→自分の考えを少人数で交流する。(ペア対話・グループ対話)→自分の考えを全員と交流する。(全体対話)→自分の考えをまとめる。」

⑤ 場の工夫

教室環境において、机の配置をコの字型にし、仲間の顔を見ながら話したり聞いたりしやすい配置にした。そして、教室に児童が使った「つなぎ言葉」を掲示しておくことで、仲間の意見に関わって話すことができるようにした。

〈授業実践〉

〈ディベート活動の工夫と効果〉

2学期初めの単元「考えを伝え合って深めよう」において、ディベート活動を行った。あらかじめ自分の立場を明らかにした上で、明確な根拠をあげながら論を組み立て、習慣的・感情的な話し合いではなく、根拠や理由の妥当性と合理性によって、相手を説得できるような話し合いの力を伸ばすことをねらいとした。ディベートは、筋の通った論理性と相手を説得する論証性、相手の論理を覆す反証性の力が必要となる。

このような力を養うために、フォーマットに沿って授業展開を行った。二つの事柄についての比較対象の一方を選択する話題を設定して、根拠や理由をあげながら討論し、どちらか一方を選ぶ話し合いを体験させた。対立点を限定し明確にすることによって発言しやすくなり、論点が際立ち、話し合いを焦点化させることにもなった。話題のよしあしが話し合いの成否を決める要素になるので、子どもたちが興味・関心をもって参加できるように身近な生活や学習の中から話題を選んだ。ディベートを行うときは、机を三角の形に並べ、一人が賛成側、もう一人が反対側、残る一人が判定となるように、1チーム3人、合計10チーム作った。

この活動によって、話し手の意図をとらえ、内容を十分に理解しながら聞く力、自分の意見と比べる力、大事なことを短くまとめてメモする力がついた。また、あらかじめ選んだテーマについて自主的に調べ活動を行い、資料を提示しながら話す力や相手の発言につなげて話す力、審判を納得させるように話す力が付いた。さらに、相手の意見にかみあうような反論の仕方を丁寧に指導したことで、堂々めぐりではない質の高い話し合いに深めることができた。1つのテーマに対して3回戦行うため(全員が反対、賛成、判定ができるようにまた、1回戦につき12分)2時間続きでの活動となったが、どの児童も勝ち負けよりも、「意見を言い合えて楽しかった」という学習の達成感を味わい、「はやく次のテーマでディベートをしたい」と意欲的に活動を行うことができた。

4. 成果と課題

自分の考えを仲間に適切に伝える力及び仲間の意見を適切に受け取る力を養うための指導を行ってきたが、特にディベート活動を行ったことによって、実践で述べたような力を児童は身につけることができた。国語以外の授業や学級会においても、ディベート的な話し合いができるようになり、互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う力がついてきた。さらにフリートーク活動で日番が司会を行ったことで話し合いを進行する力がつき、板書も児童に任せたことで、話の内容をしっかりと聞いて大事なことを短くまとめる力がついた。身近な考えやすい話題については、ほぼ全員の児童が話し合いに積極的に参加できるようになった。しかし、考えが深まっていくような学習課題については、ペアやグループでの対話はできるが、全体対話において、自分の考えを話したり、友達の話を聞いてつないだり反論したりする児童は限られているので今後の課題としたい。

4 研究のまとめと課題

本年度の研究では、基礎・基本を大切に、国語科三領域の学習を対話として捉えることで、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」が系統的に関連し、相互に影響を及ぼし合うことが授業実践から分かった。それぞれの領域が異なる教材・方法を用いながら本質的には同じ「対話する力」＝「伝え合う力」であることを追求することができた。また、国語科の年間計画を立て、目的意識を持って学習することで「伝え合う力」の向上、「対話・話し合い活動」の充実につながることも分かった。しかし、次年度に向けた課題もいくつかあげられる。

- (1) 年間計画を作成して、目的意識を持って学習計画を立て取り組んだが、学びの個人差が見られた。個に応じた指導法の開発及び具体的手立てが必要である。
- (2) 対話活動を主とした教材分析を行い、伝え合う内容「何を伝えようとしているのか」を整理し、伝え合う技能・技術(スキル)の定着を図る。
- (3) 生きて働く力につなげるために、日常生活の中で、伝え合う力の「言語意識」をどう持たせるか。

5 おわりに

社会に目を向けると意思の疎通が図れず、様々な問題が生じている。そういった人間関係の希薄さ感じる昨今、その影響をうけ子ども社会においても様々な問題を投げかけている。「はっきりと伝えていけば・・・」「しっかりと聞いていけば・・・」「意志の疎通を図っていけば」と。国語学習でも同様互いの言葉が交流せず、考えが深まったり広がったりする授業がつくれぬのが現状である。国語科の本質は、ことばを用いて、豊かに「話し合う」ことができ、「書き合う」ことができ、「読み合う」ことができる姿を基礎・基本が身についたとして捉えることができる。しかし、伝え合う力がうまく機能されず、そういった学習がスムーズにおこなえていないところに子どものつまずきがあると考え研究を進めた。そのつまずきを分析し、子ども達にどのようにアプローチをすれば、「伝え合う力」の定着につながるのか。様々な活動を通し、子どもの変容がみられるようになってきた。しかし、「確かな力」には至っていない。次年度では、さらに「対話能力」の向上、「話し合い活動」の充実に向けた取り組みを研究したいと考えている。

【参考文献】

- 村松賢一 編 『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』(明治図書2001年)
有元秀文 著 『PISA型読解力が必ず育つ10の鉄則』(明治図書2008年)
緒葛正弥 著 『フィンランドメソッド実践ドリル』(毎日コミュニケーションズ2008年)
池内 清 著 『小学校ディベート授業が楽々できるワークシート』(学事出版)
佐久間順子著 『シリーズ教室ディベート2小学生でもできる教室ディベート』(学事出版)

理科の基礎学力向上をめざして

— 小中連携をふまえた効果的な指導方法についての研究 —

指導主事 藤 井 健三郎
研究員 上 条 善 男 (立花北小)
" 行 本 憲 司 (名 和 小)
" 是 澤 健 治 (園 田 中)

【内容の要約】

学習指導要領において、小学校理科は「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の4領域に、中学校校は第1分野と第2分野に整理されている。そこで小学校と中学校で共通の問題を作成し、小学校では確認テスト、中学校では復習テストとして実施することで基礎学力が向上するのではないかと考え、実践した。

キーワード：小中連携，学力向上，理科

1	はじめに	103
2	研究について	103
3	実践事例	104
4	まとめ	115
5	おわりに	116

1 はじめに

『平成21年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告』*1が発表された。そこで平成19年度から21年度にかけての比較が行われている。理科は、一部改善の傾向がみられるところもあるが、小学5年、中学2年、中学3年とも全国平均を下回っており、基礎的・基本的な知識・技能を定着させるための方策を考えていく必要がある。

2 研究について

(1) 研究テーマ

理科の基礎学力向上をめざして

小中連携をふまえた効果的な指導方法についての研究

(2) 研究の内容

現行の理科学習指導要領は、小学校と中学校の接続を強く意識したものといえる。『小学校学習指導要領解説 理科編』*2によると、従来の「生物とその環境」、「物質とエネルギー」、「地球と宇宙」の三つの領域構成から、中学校の「第1分野」と「第2分野」との整合性を考えて、「物質・エネルギー」、「生命・地球」という二つの領域構成に変更されている。それに対応して、『小学校学習指導要領解説 理科編』*2と『中学校学習指導要領解説 理科編』*3に、『小学校・中学校理科の「エネルギー」「粒子」

【図1 小学校・中学校理科の「エネルギー」「粒子」を柱とした内容の構成】

を柱とした内容の構成』（図1）と『小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成』（図2）の図がそれぞれに示されている。

それをもとにして小学校と中学校で共通の問題を作成し、小学校では単元のまとめで、中学校では小学校のときの復習でそれぞれ実施することで、基礎学力を向上させることができるのではないかと考えた。

【図2 小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成】

(3) 研究の方法

1. 小学校と中学校で共通の問題が作成できるかの検証

『小学校学習指導要領解説 理科編』*²と『中学校学習指導要領解説 理科編』*³に掲載されている『小学校・中学校理科の「エネルギー」「粒子」を柱とした内容の構成』(図1)と『小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成』(図2)の図からひとつの単元を抽出し、小学校と中学校で共通の問題を作成できるかを検証することとする。

2. 小学校と中学校で共通の問題を作成

各単元において、中学校でどのように教えられていくか、小学校でどのように教えられてきたのかを意識し、それぞれで問題を作成、実施していく。その問題と実施結果を検討し、共通の問題を作成していく上での留意点を探る。

3. 小学校での実践

授業のはじめに、前時の復習として問題を実施する。その結果をもとに授業を修正する。それを繰り返し、単元のおわりにまとめテストを実施し、学力の定着の度合いをみる。

4. 中学校での実践

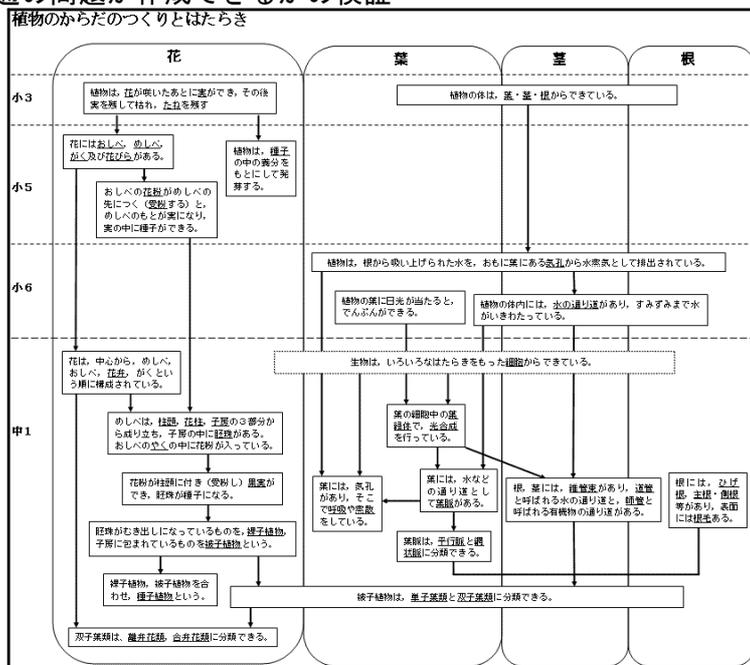
授業のはじめに、小学校で学んだことの復習として小学校の復習問題を実施する。その結果をもとに授業を修正する。それを繰り返し、定期考査で学力の定着の度合いをみる。

単元の終了後、生徒に小学校の復習問題についての意識調査を実施する。

3 実践事例

(1) 小学校と中学校で共通の問題が作成できるかの検証

「植物とからだのつくりとはたらき」について『小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成』*²(図2)を元に小3～中1までの関連性を調べた。ここでは、整理しやすいように花・葉・茎・根のカテゴリーに分けて関連図を作成した。



【図3 「植物とからだのつくりとはたらき」について関連図】

(2) 小学校と中学校で共通の問題を作成

小学校と中学校で次のような問題を作成した。

小学校			
「もののとけ方」	7枚	表1～表2	図4～図10
「流れる水のはたらき」	2枚	表3	図11～図12
「電磁石のはたらき」	3枚	表4	図13～図15
中学校			
「身のまわりの物質とその性質」	2枚	表5～表6	図16～図17
「物質の姿と状態変化」	3枚	表7	図18～図20

そして問題を作成するだけでなく、小学校では中学校でどのような学習につながっていくのか、中学校ではどのように学習してきたのかを知るために、それぞれに評価を作成した。

【表1 「もののとけ方」指導計画】

学習活動		観点別達成目標		小テスト
単元導入	もののとけ方(2時間) ○食塩などが水に溶ける ときのようすを、詳しく 調べてみよう。	関①	ものが水に溶けるようすに興味をもち、 ものを水に溶かし、ものの溶け方の規則 性を調べようとする。	
		思①	ものの溶け方や溶けたもののゆくえ、溶 ける限度などを予想することができる。	
第1次	水にとけたもののゆくえ (2時間) (1)水に溶けたものは、 どうなったのだろうか。 実験1 水溶液の重さ	技①	電子てんびんを使うなどして、水溶液の 重さを調べ、記録することができる。	○
		知①	ものが水に溶けても、水とものを合わ せた重さは変わらないことがわかる。	○
第2次	ものが水にとける量(5 時間) (1)ものが水に溶ける 量には、限りがあるのだ らうか。	技②	メスシリンダーを使うなどして、水の量 を変えてものが溶ける量を調べ、記録す ることができる。	○

	実験2 食塩やミョウバンがとける量			
	(2) 水の量を変えずに、もっとたくさん溶かす方法は、ないのだろうか。 実験3 水の温度ととける量	技③	水の温度を変えてものの溶け方の規則性を調べ記録し、まとめることができる。	
	(3) 水の温度を変えると、ミョウバンや食塩の溶ける量は、それぞれ、どうなっただろうか。	思②	ものが水に溶ける量を、水の温度や水の量と関連づけて考えることができる。	
		知②	ものが水に溶ける量は、水の量や温度、溶けるものによって違いがあることがわかる。	○
第3次	とかしたものを取り出すには (3時間) (1) 水溶液から、溶かしたものを取り出すには、どうしたらよいだろうか。 実験4 とかしたものを取り出すには	技④	ろ過するなどして、水溶液にとけているものを取り出すことができる。	○
	(2) ミョウバンの飾りを作ろう	技⑤	水溶液を冷やして、ミョウバンの飾りを作ることができる。	○
		知③	水溶液の性質を利用して、水に溶けているものを取り出せることがわかる。	○

【表2 「もののとけ方」評価】

【診断的評価】	
ものを水に溶かし、ものの溶け方の規則性を調べようとする際に、ものの溶け方や溶けたもののゆくえ、溶ける限度などを予想させ、その予想を診断的評価として用いる。	
1. もののとけ方	<ul style="list-style-type: none"> ・ものが水に溶けるようすに興味をもち、ものを水に溶かし、ものの溶け方の規則性を調べようとする。【関】 ・ものの溶け方や溶けたもののゆくえ、溶ける限度などを予想することができる。【思】

2. 水にとけたもののゆ くえ	<ul style="list-style-type: none"> ・電子てんびんを使うなどして、水溶液の重さを調べ、記録することができる。【技】 ・ものが水に溶けても、水とものを合わせた重さは変わらないことがわかる。【知】
3. ものが水にとける量	<ul style="list-style-type: none"> ・メスシリンダーを使うなどして、水の量を変えてものが溶ける量を調べ、記録することができる。【技】 ・水の温度を変えてものの溶け方の規則性を調べ記録し、まとめることができる。【技】 ・ものが水に溶ける量を、水の温度や水の量と関連づけて考えることができる。【思】 ・ものが水に溶ける量は、水の量や温度、溶けるものによって違いがあることがわかる。【知】
4. とかしたものを取り 出すには	<ul style="list-style-type: none"> ・ろ過するなどして、水溶液に溶けているものを取り出すことができる。【技】 ・水溶液を冷やして、ミョウバンの飾りを作ることができる。【技】 ・水溶液の性質を利用して、水に溶けているものを取り出せることがわかる。【知】
<p>【形成的評価】</p> <p>○水溶液とは、水にものが溶けて全体に広がり、透き通った液であることを理解する。(3-1)</p> <p>○電子てんびんを使うなどして、水溶液の重さを調べ、記録することができる。(3-2)</p> <p>○ものが水に溶けても、水とものを合わせた重さは変わらないことがわかる。(3-3)</p> <p>○メスシリンダーを使うなどして、水の量を変えてものが溶ける量を調べ、記録することができる。(3-4)</p> <p>○ものが水に溶ける量は、水の量や温度、溶けるものによって違いがあることがわかる。(3-5)</p> <p>○ろ過するなどして、水溶液に溶けているものを取り出すことができる。(3-6)</p> <p>○水溶液の性質を利用して、水に溶けているものを取り出せることがわかる。(3-7)</p>	

確認テスト(3-1) 5年組 名前()

1. 次の中で、水溶液はどれですか。すべて選びなさい。
 ア. 砂糖を水に入れてかきまぜたもので、炭は沈んでいない。
 イ. 食塩を水に入れてかきまぜたもので、炭は沈んでいない。
 ウ. テンプン(ゼラチン)を入れてかきまぜたもので、炭は白くこぼれている。

【図4 もののつけ方①】

確認テスト(3-2) 5年組 名前()

とけず前 とけた後

【説明】食塩を溶かす前と溶かしたあとで重さをはかっています。正しく実験するおかげとして、上の図で何かまじりがあります。まじりをお知らせください。

【図5 もののつけ方②】

確認テスト(3-3) 5年組 名前()

1. ① 水にとけた物質は、とけてなくなりましたか。

 ② ①のようになる理由を、いくつか例をあげて説明しなさい。

2. 食塩を水100mlにとけて飽和液をつくらせるとき、食塩の質量は何gになりますか。

【図6 もののつけ方③】

確認テスト(3-4) 5年組 名前()

1. 図1の器具は何ですか。

2. 図1の器具はどのようなときに使いますか。

3. 図1の器具を使うとき、どのような場所に置きますか。

4. 図1の器具を使うとき、目の位置はどこがよいですか。また、どの位置を鏡みればよいですか。

5. 表のとき、いくらく読み取ればよいですか。
 ml

6. 図1の器具で水のpHをはかりるときは、まずビーカーから水を注ぎます。そして水が0mlに近くなったときどのようにして水を量いいますか。

【図7 もののつけ方④】

確認テスト(3-5) 5年組 名前()

1. ミョウバンと食塩をとけた水溶液について、次の問いに答えなさい。
 ① ミョウバンと食塩は、いづれでも水にとけますか。

 ② 同じ量の水にとけるミョウバンの量と食塩の量は同じですか。

2. 食塩が水にとける量を増やすには、どうしたらいいでしょうか。次の5つの中から選びなさい。
 ① 水の温度を上げる
 ② かるまざる回数を増やす
 ③ 水の量を増やす

3. 50mlの水に食塩をとけるだけとけさせると15gとけました。100mlの水に食塩をとけるだけとけさせると何gとけるでしょうか。

4. 500gの水にミョウバンと食塩をとけるだけとけさせて、それぞれとける質量を調べました。このとき、水の温度を10℃、30℃、60℃に変えながら調べると、次の棒グラフのようになりました。AとBのどちらがミョウバンでどちらが食塩ですか。

【図8 もののつけ方⑤】

確認テスト(3-6) 5年組 名前()

1. 右の図は何をしているところでしょうか。

2. ①～④の器具の名称を答えなさい。
 ①
 ②
 ③
 ④

3. 食塩のとけり方はどうなりましたか。

4. ④の部分で③のかべにピタッとくっついているのは理由があります。どんな理由でしょうか。

5. ④の理由を説明するために使っているでしょう。

【図9 もののつけ方⑥】

確認テスト(3-7) 5年組 名前()

1. 40℃の水に、ミョウバンをとけるだけとけかし、しばらくそのまましておきました。次の問いに答えなさい。
 ① しばらくして瓶の温度が下がると、とけていたミョウバンはどうなりますか。次の②、③から選びなさい。
 ② ミョウバンは出てきません。

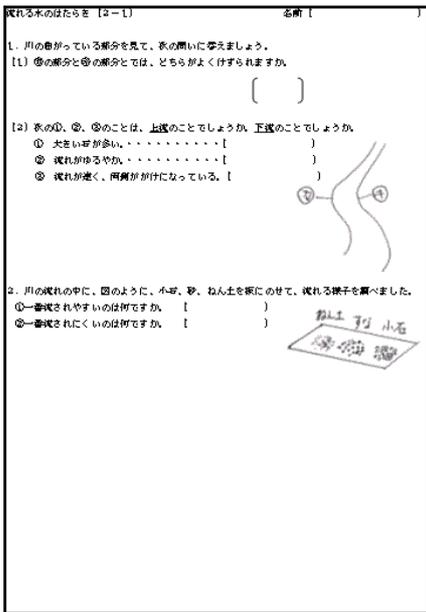
 ③ 水にとけきれなくなってミョウバンが出てきます。

② この瓶を冷やしました。ろ液からミョウバンを取り出す方法を2つ書きなさい。

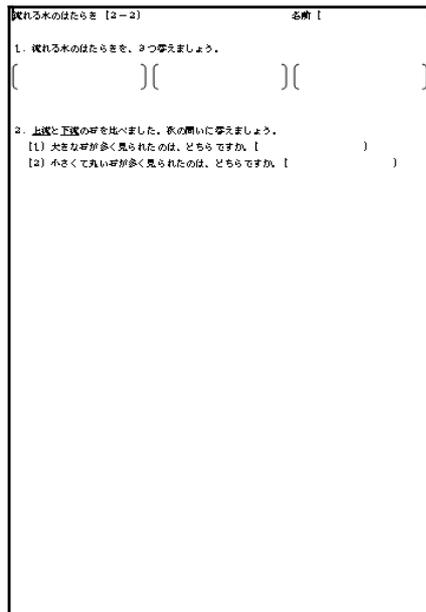
【図10 もののつけ方⑦】

【表3 「流れる水のはたらき」評価】

<p>【診断的評価】</p> <p>水の流れをつくって、流れる水のはたらきと地面の変化を調べる際に、これまでの経験をもとに結果を予想させ、その予想を診断的評価として用いる。</p>	
1. 流れる水のはたらき	<ul style="list-style-type: none"> ・川のように興味をもち、川の流れや川原、川岸などを調べようとする。【関】
2. 地面を流れる水	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水にはどのようなはたらきがあるか、予想することができる。【思】 ・流れる水は、地面を削り取ったり、土を運んだり積もらせたりするはたらきがあると見いだすことができる。【思】 ・水の流れをつくって、流れる水のはたらきと地面の変化を調べ、記録することができる。【技】
3. 川の流れとそのはたらき	<ul style="list-style-type: none"> ・川の流れは、川原や川岸の土地のようすを変化させるはたらきがあると考えることができる。【思】 ・川での観察の準備をして、近くの川のようすを調べ、記録することができる。【技】 ・流れる水には、土地を削ったり、石や土などを運んだり積もらせたりするはたらきがあることがわかる。【知】
4. 川とわたしたちのくらし	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水のはたらきと災害との関係を調べることができる。【技】 ・大雨が降って水の量が多くなり、流れが速くなると、地面のようすが大きく変化したり、災害が起こったりすることがわかる。【知】
<p>【形成的評価】</p> <p>○水の流れをつくって、流れる水のはたらきと地面の変化を調べ、記録することができる。(2-1)</p> <p>○流れる水には、土地を削ったり、石や土などを運んだり積もらせたりするはたらきがあることがわかる。(2-2)</p>	



【図 1 1 流れる水のはたらき①】

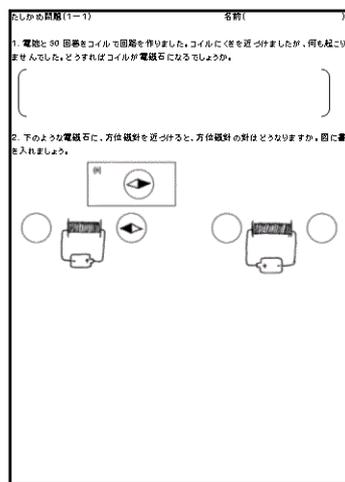


【図 1 2 流れる水のはたらき②】

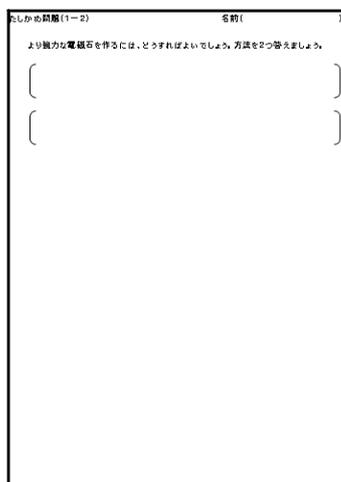
【表 4 「電磁石のはたらき」評価】

【診断的評価】	
第3学年で学習した「電気の通り道」「磁石の性質」、第4学年で学習した「電気のはたらき」の内容をどの程度理解しているかをペーパーテストによって確認する。	
1. 電磁石のはたらき	<ul style="list-style-type: none"> 導線に電流を流したときに起こる現象に興味をもち、電磁石のはたらきを調べようとする。【関】 電磁石を作って、電磁石に電流を流してそのはたらきを調べ、見つけた疑問を話し合い、整理することができる。【技】
2. 電磁石の極の性質	<ul style="list-style-type: none"> 電磁石の極の変化と電流の変化と電流の向きとを関係づけて考えることができる。【思】 電流の流れているコイルは、鉄心を磁化するはたらきがあり、電流の向きが変わると、電磁石の極がかわることがわかる。【知】
3. 電磁石の強さのひみつ	<ul style="list-style-type: none"> 電磁石の強さと電流の強さやコイルの巻き数とを関連づけて、電磁石の強さの変化を予想することができる。【思】 電流計などを使って、電磁石の強さの変化を計画的に調べ、記録することができる。【技】 電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻き数によって変わることがわかる。【知】 電磁石の性質やはたらきを使って、おもちゃ作りをしようとする。【関】 電磁石の性質やはたらきを利用したおもちゃを作ることができる。【技】
【形成的評価】	

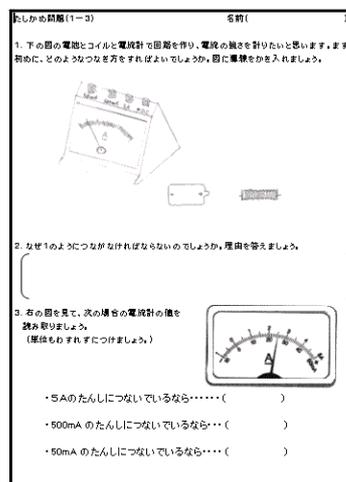
- 電流の流れているコイルは、鉄心を磁化するはたらきがあり、電流の向きが変わると、電磁石の極が変わることがわかる。(1-1)
- 電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻き数によって変わることがわかる。(1-2)
- 電流計などを使って、電磁石の強さの変化を計画的に調べ、記録することができる。(1-3)



【図 1 3 電磁石①】



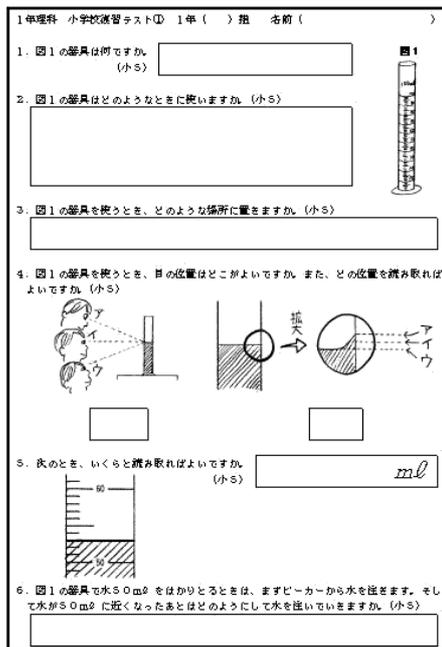
【図 1 4 電磁石②】



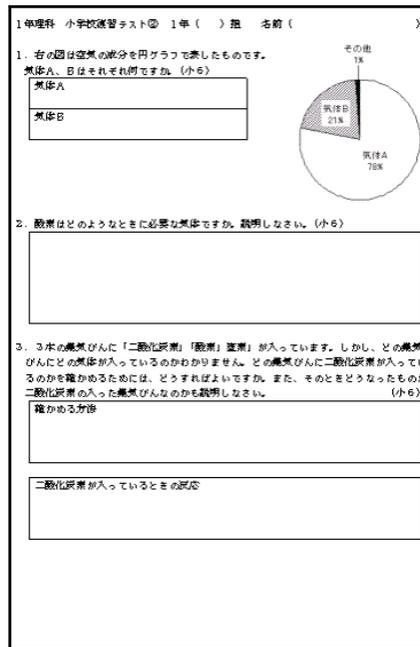
【図 1 5 電磁石③】

【表 5 「身のまわりの物質とその性質」評価】

1. 金属と金属でない物質を区別するには	①金属・非金属, 実験 1
【診断的評価】	
○メスシリンダーの使い方 (テスト①-1, 2, 3, 4, 5, 6)	
2. 金属どうしを区別するには	②メスシリンダー・上皿てんびんの使い方 ③プラスチック ④密度
3. 白い粉末状の物質を区別するには	⑤ガスバーナーの使い方 ⑥実験 2, 有機物・無機物
【診断的評価】	
○水素が発生するとき (テスト②-1)	
○空気の成分 (テスト②-2)	
○酸素のはたらき (テスト②-3)	
○石灰水が二酸化炭素で白くにごること (テスト②-4)	
4. 目に見えない気体を区別するには	⑦実験 3 ⑧気体のつくり方と性質 ⑨気体の集め方
【形成的評価】	
○第 1 章の内容	



【図 16 水溶液の性質】



【図 17 気体のつくり方と性質】

【表 6 「水溶液の性質」評価】

<p>【診断的評価】</p> <p>○水溶液とは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水にものが溶けて全体に広がり、すき通った液。(テスト③-1, 2) ・水に溶けたものは見えなくなってなくなったのか。(テスト③-3①) ・水に溶けたものがなくなっていないことはどうしてわかるのか。(テスト③-3②) ・水の溶ける前と溶けた後では、重さはどうなるか。(テスト③-4) <p>○ろ過</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ろ過のしかた。(テスト③-5②) ・ろ過によって取り出せるものは。(テスト③-5①③④) 	
1. 物質が水にとけるとはどういうことか	<p>①実験 4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コーヒーシュガーとデンプンを水にとかす。 ・ 溶かす前と後の全体の質量をはかる。 ・ 溶け残りをろ過する。 ・ ろ液をかかわす <p>②溶けるということを粒子のモデルを使って説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 溶けると非常に小さな粒になるため見え

	<p>なくなり、液が透明になる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水がこの粒と粒の間に均一に入りこみ、この状態がいつまでも続くため、長時間置いても液の下の方がこくなることはない。 ・溶かす前と後で全体の質量は変わらない。 <p>③溶質・溶媒・溶液，純粋な物質・混合物，濃度</p>
<p>【診断的評価】</p> <p>○ものが水に溶ける量には限りがあること（テスト④－１①）</p> <p>○溶ける限界の量はミョウバンと食塩で違うこと（テスト④－１②）</p> <p>○水の温度を上げると溶ける量はどうなるのか（ミョウバンと食塩）（テスト④－１③）</p> <p>○溶かしたものを再び取り出す方法（冷やす，水を蒸発させる）（テスト④－１④）</p> <p>○冷やしたときに再び出てくる量を図で示す（温度と溶けた量のグラフを用いて）（テスト④－１⑤）</p>	
<p>2. 水にとけている物質はとりだせるか</p>	<p>④実験 5</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食塩と硝酸カリウムを水に過剰に溶かす。 ・温度を上げて溶ける量が増えるか調べる。 ・水で冷やして再結晶するようすを観察する。 <p>⑤溶解度・溶解度曲線，飽和水溶液，再結晶</p>
<p>3. 酸性，アルカリ性とはなにか</p> <p>4. 酸性とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせるとどうなるか</p>	<p>→ 移行措置 3年へ</p> <p>→ 移行措置 3年へ</p>
<p>【形成的評価】</p> <p>○第2章の内容</p>	

【表7 「物質の姿と状態変化」評価】

<p>【診断的評価】</p> <p>○あたためたり冷やしたりすると水は固体・液体・気体と状態が変化すること（テスト⑤－1，2①②）</p> <p>○水の沸騰する温度（100℃）とこおる温度（0℃）（テスト⑤－3，4）</p>	
<p>1. 物質はどのように姿を変えるのか</p>	<p>①物質の状態変化</p>
<p>2. 物質が状態変化するとき体積や質量はどうなるの</p>	<p>②実験7，状態変化にともなう体積や質量の変化</p> <p>③状態変化と熱（粒子のモデル，粒子の運動）</p>
<p>3. 物質が状態変化する温度は決まっているか</p>	<p>④水の状態変化と温度，沸点・融点</p> <p>⑤実験8</p>

【形成的評価】

○第3章の内容

1. 実験 小学校復習テスト① 1年()組 名前()

1. 氷の甲で、水銀球をすべで覆ひなさい。(小4)

ア. 水銀球をすべで覆ひなさい。氷は溶けていく。
イ. 水銀球をすべで覆ひなさい。氷は溶けていく。
ウ. デンブンを水に入れておきまぜたもので、氷は溶けていく。

2. 氷に付いた水銀球は、とけてなくなってしまうのですか。(小5)

① ② ③ ④

3. 氷を溶かすとき、氷が溶けたとき、氷の質量は増えたり減りますか。(小5)

4. 氷に水銀球を付かせ、とけていったとき、氷の質量は減りますか。その理由を説明しなさい。(小5)

① ② ③ ④

5. 氷の質量を測るとき、とけていったとき、氷の質量は減りますか。その理由を説明しなさい。(小5)

① ② ③ ④

6. 氷の質量を測るとき、とけていったとき、氷の質量は減りますか。その理由を説明しなさい。(小5)

① ② ③ ④

7. このとき、氷に付いた水銀球は、氷の甲から落ちますか。(小5)

ア. 水
イ. 氷



【図 18 状態変化①】

1. 実験 小学校復習テスト② 1年()組 名前()

1. ミヨウパンと氷は、いくつでも氷に与えますか。(小5)

2. 氷を水にとけるだけとけさせました。このとき、とける氷の質量を測るための装置として、もっとも適するものを氷の甲の図ひなさい。(小5)

3. 質量の氷に、ミヨウパンと氷を付けたとけさせました。このとき、とけるミヨウパンの質量と氷の質量は同じですか。(小5)

4. 5.0gの氷に氷を付けたとけさせ、1.0gの氷に氷を付けたとけさせると同じですか。(小5)

5. 5.00gの氷にミヨウパンと氷を付けたとけさせ、それぞれとける質量を測りました。このとき、氷の質量を10℃、30℃、60℃と変えながら測ると、氷の溶け方のようになり、氷とミヨウパンの質量は同じになりますか。(小5)

Temperature (°C)	Mass of ice melted (g)
10	17.9g
30	18.0g
60	18.5g

Temperature (°C)	Mass of ice melted (g)
10	3.8g
30	3.3g
60	28.7g

6. 氷に付いた水銀球を、再び取り出す方法を考えなさい。(小5)

【図 19 状態変化②】

1. 実験 小学校復習テスト③ 1年()組 名前()

1. 水を冷やしたりあたためたりすると何になりますか。(小4)

① ② ③ ④

2. 水の状態を「液体」というのに対し、氷の状態を何といいますか。1の(①)、(②)にあてはめて答えなさい。(小4)

① ②

3. 水を冷やしていったとき、こぼれ始める温度は何℃ですか。(小5)

① ② ③ ④

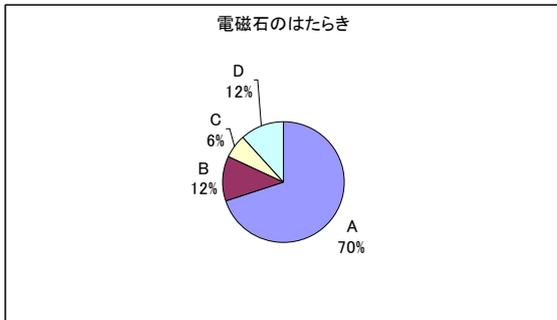
4. 水をあたためていったとき、凍結する温度は何℃ですか。(小5)

① ② ③ ④

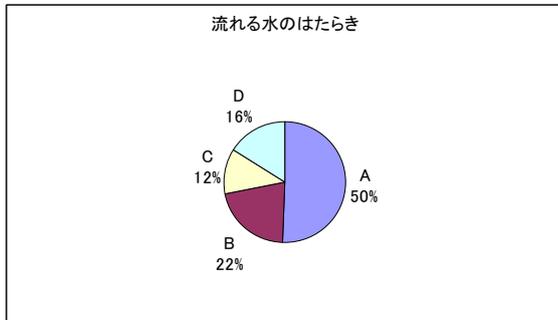
【図 20 状態変化③】

(3) 小学校での実践

小学5年児童35人に対して、授業最後に確認テストを行ってから単元末テストを行った結果は、図21と図22のようになった。



【図 21 小学校での実践①】



【図 22 小学校での実践②】

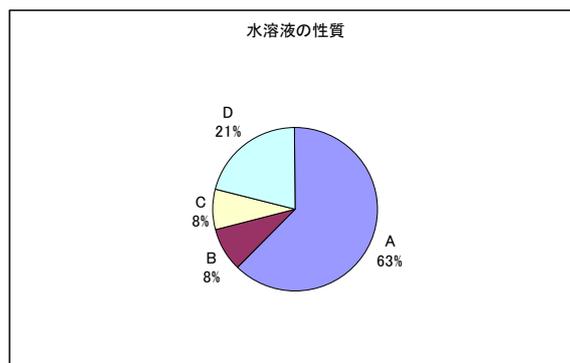
- Aは確認テストでも単元末テストでも正解した児童
- Bは確認テストでは不正解だったが単元末テストでは正解した児童
- Cは確認テストでも単元末テストでも不正解だった児童
- Dは確認テストは正解であったが単元末テストで不正解だった児童

(4) 中学校での実践

中学1年生徒240人に対して、授業の最初に小学校の復習テストを行ってから

期末考査を行った結果は、図23のようになった。

今回の実践でDにあたる生徒は数%しかいなかったが、グラフ(図23)中Dの割合が21%にも達しているのは、調査した小問題の1問の記述問題で小学生までの表現では正解であるが、中学生の回答としては表現が不足していた生徒が多かったためである。

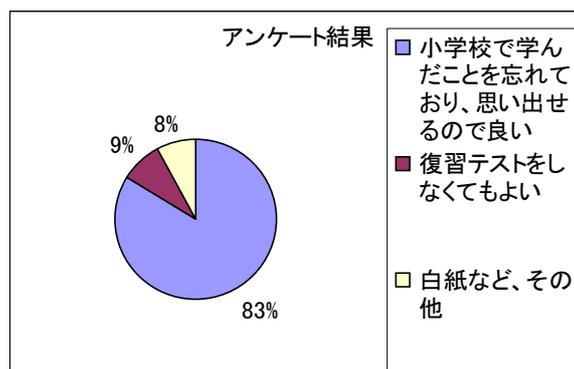


【図23 中学校での実践】

- Aは復習テストでも期末考査でも正解した生徒
- Bは復習テストでは不正解だったが期末考査では正解した生徒
- Cは復習テストでも期末考査でも不正解だった生徒
- Dは復習テストは正解であったが期末考査で不正解だった生徒

アンケート結果

生徒にとって小学校の復習テストはどうであったか、自由記述させた。その回答は、小学校で学んだことを忘れており思い出せて良い、復習テストをしなくてもよい、その他の概ね3種類に分類できた。その結果は、図24のようになった。



【図24 アンケートの結果】

次に自由記述のいくつかを抜粋する。

- ・小学校で習ったところが一番苦手です。だから苦手なところを完ぺきにし、すらすらと解けるように復習したいです。
- ・テストは難しかったので、全く覚えてなかったです。でもテストをやっていくうちにだんだん思い出しました。
- ・小テストをやったら、自分が小学生の時やって忘れていたこともわかるし、先生もみんなどんなのがよく忘れていたのかわかって授業がしやすいと思う。
- ・中学校に入ってから、小学校のテストをするとは知らず、おぼえていなくてあまり書けなかった。

4 まとめ

小学校と中学校で共通の問題を作成するためには学習指導要領解説の資料はとても役に立つことがわかったが、それだけでは作成することはできないことがわかった。「植物と

からだのつくりとはたらき」について関連図（図3）からわかるように、低学年から高学年になるにつれて、関連する項目が細分化される。復習テストを行う際に、どの単元で学習してきたかが明確になる必要がある。このことを解決するためには、問題をデータベース化することが必要である。

問題を作成する中で、問題となったのはどのような言葉で児童生徒に教えているかということであった。例えば、メスシリンダーをどのような場所を使用するかという問いで、小学校では「まっすぐな所」「たいらな所」でも可であるが、中学校では不足で、「水平な所」のような言葉が求められる。学習内容だけでなく、小学校では中学校でどのような言葉で教えられていき、中学校では小学校ではどのような言葉で教えられてきたのかを意識することが重要である。

小学校での確認テストの結果から、確認テストを行うことは基礎学力を向上させるために有効であることがわかった。確認テストを行うことで、授業の改善や個々の児童への支援など細かい指導が可能になると考えられる。

中学校での復習テストとアンケートの結果から、復習テストを行うことは基礎学力を向上させるために有効であることがわかった。生徒が小学校の時に学習した内容を思い出すことで、学習効果を高めることができるからである。また、教師もどのような学習をしてきたのか、どのような認識をしているのかを知ることで、授業の改善をしていくことができるからである。

5 おわりに

今回の研究から、小学校での確認テストと中学校での復習テストが、基礎学力を向上させることに有効であることがわかった。特に問題作成における過程で授業における目標分析が明確になり、授業改善につなげることができた。

今後の課題は、言語活動についてどのようにアプローチしていくか、今回の結果をどのように広げ深めていくかである。

【参考資料】

- * 1 『平成 21 年度 尼崎市立小・中学校 学力・生活実態調査報告』 p.11 p.17 p.23
尼崎市 平成 21 年 12 月
- * 2 『小学校学習指導要領解説 理科編』 p.14 p.15 p.16 p.17
文部科学省 大日本図書 平成 20 年 8 月 31 日
- * 3 『中学校学習指導要領解説 理科編』 p.12 p.13 p.14 p.15
文部科学省 大日本図書 平成 20 年 9 月 25 日

個別ドリルシステムの効果的な活用について

指導主事 大 濱 洋 治
研究員 久 下 愛 美 (杭瀬小)
" 谷 口 沙 織 (立花小)
" 合 内 瑠 美 (武庫の里小)

【内容の要約】

平成 19 年度，児童の学力を向上させるために導入した「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」について，システムの内容をより充実させるとともに，平成 19・20 年度の研究内容とは違う側面から，基礎学力向上に向けて，システムを活用した効果的な指導方法についての研究を行う。

キーワード：小学校，ぐんぐん，個別ドリル，計算，漢字，
画面ドリル，フラッシュカード，難易度，KR 情報
学習履歴，つまずき，学力向上，活用方法，学習効果，個別指導

1	はじめに	117
2	研究の概要	117
3	効果的な活用実践	118
4	研究のまとめ	134
5	おわりに	134

1 はじめに

本市では、学力向上の取り組みの一つとして平成 19 年 8 月より「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を全小学校及び特別支援学校に導入した。これは計算や漢字の読み書きの力を習得するため、主に習熟度に応じた個別問題プリントを印刷して利用するものである。

本システムは計算及び漢字の読み書きに限定されたものではあるが、これら基礎基本となる力を定着させるために効果的な活用を図ることで、児童の学力を向上できる。

そこで、本研究部会では引き続きこのシステムをより使いやすく学習効果の上がるものにしていくとともに、今年度の取り組みとして、個別問題プリントを印刷して利用する以外の機能を利用した効果的な活用について研究を進める。

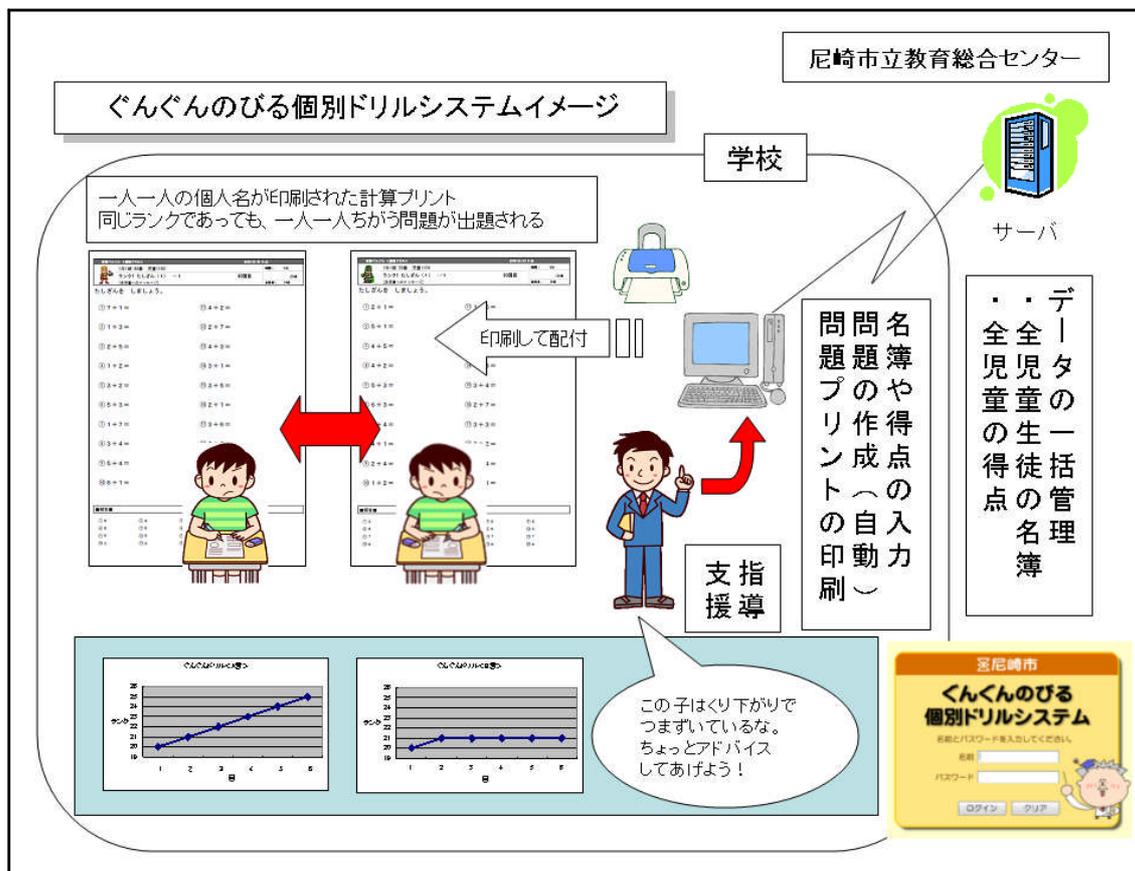
2 研究の概要

(1) 研究テーマ

「個別ドリルシステムの効果的な活用について」

(2) テーマ設定の理由

「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」(以下、「ぐんぐん」という。)は、個々の児童の習熟度に合わせて計算や漢字を繰り返し学習できるシステムである。授業進度に合わせて学習内容を定着させるために利用したり、個別指導のためのデータにしたがり、繰り返し復習等に利用できる。(図 1)



【 図1 「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」イメージ 】

昨年度までの研究では、「ぐんぐん」の主たる機能である「個別問題プリントを印刷して利用する」ことについて、その効果的な活用方法を探ってきた。「ぐんぐん」を利用した児童・教員を対象にアンケート調査を行ったり、システムの初期設定の変更、学年や問題の難易度に対応する適切な実施時間の設定や実施問題数についての検討の他、「ぐんぐん」を実施した学級と実施しなかった学級において、同一の評価テストの結果による比較調査を行った。

比較調査の結果からは、児童の興味関心を持続しつつ、学習履歴を利用した、的確で、かつていねいな個別指導の実施が「ぐんぐん」をより効果的に活用する方法であることがわかった。

今年度は、これまでの「個別問題プリントを印刷する」機能を利用した効果的な活用方法をさらに奥深く追求していくのではなく、この方法以外の機能を利用した効果的な活用について、「ぐんぐん」の活用の幅を広げるための研究を進める。

(3) 研究の方法

① 「個別問題プリントを印刷する」機能以外の機能を利用した、効果的な活用の実践を検討実施する。

ア. フラッシュカードの活用方法を探る。

イ. 個別の画面ドリルの活用方法を探る。

② システムの機能拡大に向けた取り組みをする。

[外国語活動]

英語ノートデジタル版は、指導者用の提示型として利用するのが主な利用方法であるので、ここでは子どもたち自身が利用することで、英語に慣れ親しむことができるような手軽な教材を開発する。

※ システムの改善点を検討する。

ア. 新教科書に合わせたランクの組み替え及び復習ランクの設定

イ. 励みのメッセージの見直し (KR 情報)

3 効果的な活用実践

(1) フラッシュカードの活用

活用実践 A 1

第1学年 算数科 国語科

第1学年 算数科

単元名：「あわせていくつ ふえるといくつ」 全4ランク (ランク1～4)

「のこりはいくつ ちがいはいくつ」 全4ランク (ランク5～8)

第1学年 国語科 全12ランク (ランク1～4, 9～16)

単元名：「けんかした山」

「たのしかったことをかきましょう」

「本のせかいをたのしもう」

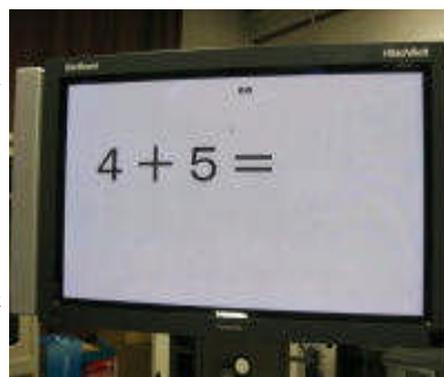
「みんなにつたえよう」

① 指導方法

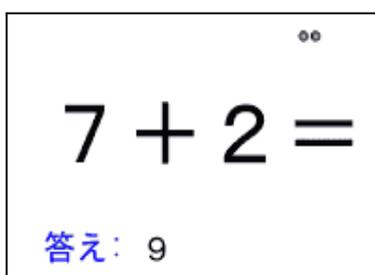
フラッシュカードを活用した取り組みとして、主に授業の後半で活用した。全体の活動からペアの活動、個人の活動を行った。

●全体の活動

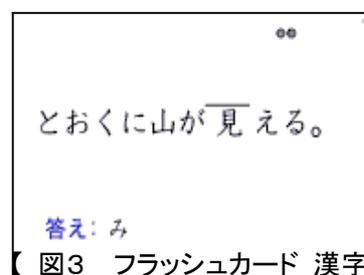
コンピュータ室にある大画面（50インチ）（写真1）を使い、授業の導入（又はまとめ）として、足し算、引き算の暗唱（暗算）、漢字の読みについて実施した。フラッシュカードの操作は、問題と答えを手動で表示するように設定し、児童の反応に合わせて、すべて教師が操作した。（図2）（図3）



【写真1 フラッシュカード】



【図2 フラッシュカード 計算】



【図3 フラッシュカード 漢字】

●ペアの活動

(ア) 児童の画面に指導用コンピュータから児童のコンピュータ画面にフラッシュカードの画面を送信し、問題数を決めて実施した。1人が問題を解いて答えを声に出して言い、ペアの児童が答えを聞いて正しいかどうか確認をする。操作は、教師が行った。

(イ) 児童一人一人がそれぞれの児童用コンピュータの画面でフラッシュカードを行い、決められた時間内にペアの児童が何問正解したかを確認する。操作は、問題を出す児童に行わせた。

●個人の活動

(ア) ペアの活動の（ア）と同様に、児童のコンピュータ画面にフラッシュカードの画面を送信し、決められた時間内問題を解いて答えを声に出して言う。

(イ) 画面ドリルやその他活動の時間が空いた時に、自主学习として自分で操作しながら行わせた。

② 効果

計算に対して、苦手意識を持っている児童も全体で声を出すことにより、自信を持ち、フラッシュカードの計算に取り組むことができた。そして、指を使い計算する児童もまだ見られるが、徐々に少なくなってきた。また、ペアや個人での活動においては、時間や問題数を決めることにより、「全問正解したい」「前よりもたくさん問題が解けた」など児童の活動への意欲に繋ぐことができたと思われる。

本学級のほとんどの児童は、習った漢字を使おうとするが、なかなか正しい使い方

ができておらず、当て字のようになっていたが、フラッシュカードを使うことにより、漢字の読み方だけではなく、正しい使い方を知ることができ、正しく使うことができるようになってきた。

また、個人の活動においては、児童が自分で操作することで、自分の苦手なランクを選び繰り返し学習できた。

③ 課題

全体の活動において、大画面で行う場合は、操作もスムーズに行うことができるが（写真2）、指導用コンピュータからそれぞれの児童用コンピュータの画面にフラッシュカードの画面を送信すると、タイムラグが出てくるため、問題が表示される前に他の児童の解答を聞いてしまうことになるので、児童が自分で個々の児童用コンピュータを操作する方が良かった。



【写真2 正答者から帰る】

しかし、これらの方法は声を出して問題を解いていくため、全体の学習では、苦手な子も自信を持って活動でき、集中力のない子も一緒にできていたが、個人の活動の時には、周りの声が気になって、なかなか集中できない児童もいたので、この場合、答えを声に出していくのではなく、紙に書いていくなど別の方法を取るべきではなかったかと思われる。

今回は、問題と答えを「手動で表示する」設定でフラッシュカードを実施してきたが、児童がフラッシュカードに慣れてくれば、1年生でも「自動で表示する」設定が利用できるのではないかと考える。問題の自動表示時間は、1～3, 5, 7, 10, 15, 20秒後から選択でき、答えの自動表示時間は、問題の表示と同時、1～3, 5, 7, 10, 15秒後から選択できるようになっており、児童一人一人の計算スピードに合わせた表示時間の設定により、個人の活動がよりスムーズに実施できるのではないだろうか。

活用実践A2

第3学年 算数科

第3学年 算数科

単元名：「新しい計算を考えよう」

わり算の計算

単元名：「大きな数」

① 指導方法

授業の導入で使用する。わり算は、計算過程において乗法九九を用いて求めることができる。そこで、既習事項の振り返り（乗法九九）にフラッシュカードを使用した。

この手順については、概ね次のようになる。

1.フラッシュカードの出題更新間隔や答えの表示方法や表示なしを設定する。出題は手動で提示し、答えの表示も手動で行う。（図4）児童は、大画面の前に集合する。



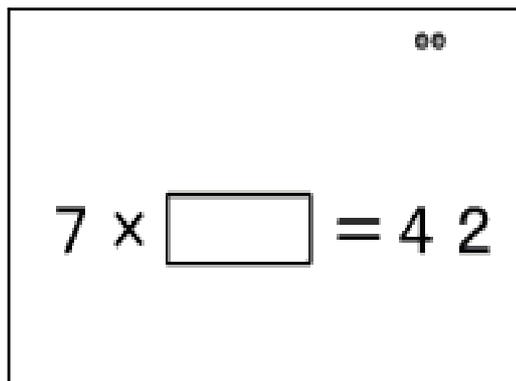
【 図4 フラッシュカード 設定 】

- 2.問題が提示されるとすぐに答えさせる。
最初は全員で答えさせる。(図5)
- 3.一通り全員で答えさせ終わると、次は、
班ごとや一人で答えさせていく。出題更
新間隔を手動ではなく2秒後などにす
る。(図6)

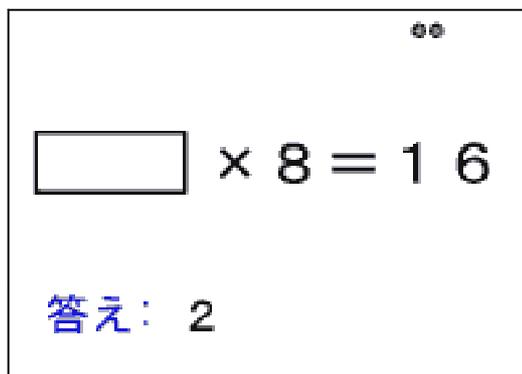
② 効果

児童は大きな声を出して意欲的に問題に
答えようとし、フラッシュカードを見てす
ぐに答えるということを楽しんでいた。(写真3)(写真4)ゲーム感覚で学ぶこと
ができ、集中して取り組む児童が多く、回数を重ねるごとに、答える速さやテンポが
よくなった。その上、たくさん問題を解こうとまでしていた。

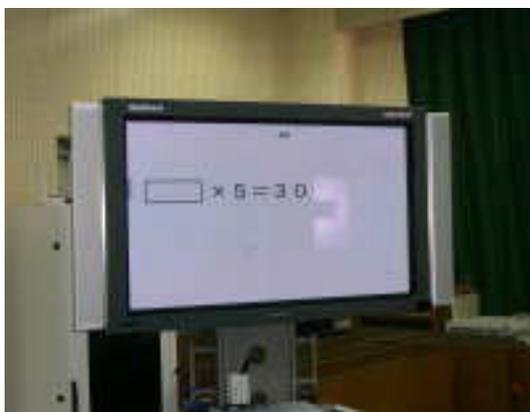
最初は出題(問題の表示)を手動で操作することでフラッシュカードに慣れさせて
おき、2回目以降は同じランクの問題で、出題更新間隔を2秒後にしたり、答えの表
示をしたりして組み合わせるなど、これらの設定を変更することでより効果的にフラ
ッシュカードを使用することができた。また、児童の答えさせ方を変えることによっ
ても、児童は緊張感を持って最後まで答えることができた。



【 図5 ランク80かけ算のきまり(1) 】



【 図6 ランク80
かけ算のきまり(1)答えあり 】



【 写真3 フラッシュカード 大画面 】



【 写真4 全員で声に出して解答 】

(児童の感想より)

- ・フラッシュカードはいろいろできていいけど、一番いいところは、答えがぱっと出るのがすごいと思いました。悪いところは、早すぎるとできなくなる場所です。
- ・フラッシュカードは、2秒とかを決められるから便利だなと思いました。毎日やってもあきなくておもしろいからいいなと思いました。
- ・フラッシュカードは、時間内にしないといけないということがわかりました。早すぎると答えられないところもありました。でも、楽しかったです。
- ・フラッシュカードは、1秒では早くて難しかったけど、3秒ぐらいだったらできているからまたやりたいです。答えが出ると、答えが見直せるからいいと思います。
- ・すぐ計算できるけど、すぐに声を出して言うのは難しかったです。

③ 課題

繰り返しや繰り返し下がり的问题が出題されると、フラッシュカードの出題ペースに合わせてすぐに答えることが難しくなる。さらに、正しい答えを答えることも困難となる。

フラッシュカードの問題が自動で表示されるよう出題更新間隔を設定し、一人ずつ答えさせていく場合、問題を解くのに個人差があり、テンポよく答えられないこともあった。よって、単元内容(ランク)や答えさせ方に合わせた出題更新間隔を設定させる必要がある。

活用実践 A 3

第6学年 算数科

第6学年 算数科

単元名:「比」 全5ランク (ランク414~418)

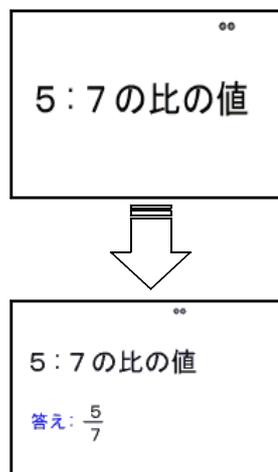
① 指導方法 (全5時間)

第1時 【目標】比の意味と表し方を理解する。

【学習活動】2つの量の表し方を考え、「比」の表し方と定義を知る。

◎授業のまとめ(確かめ)として、5分間フラッシュカードに取り組む。

【ランク414】比の値 (図7)



【図7 フラッシュカード 比の値】

- ・フラッシュカードの操作…出題，答え表示共に手動で行うように設定。
- ・まず，答えがわかった児童を指名して答えさせ，問題に慣れてきたところで，全員で声をそろえて答えさせる。
- ・初めて学習する内容であったため，出題の間隔や答えを表示するタイミングを担当が操作しながら，答えのわかった児童を指名して進めていくことにより，ひとつひとつ確実に解いていくことをねらいとした。また，問題に慣れてきた頃，全員で答えさせた後，画面に答えを表示するという進め方に変えたことで，全員が主体的に活動できることをねらいとした。

第2時 【目標】 等しい比の意味とその表し方を理解する。

【学習活動】 $2:3$ と $10:15$ は同じ割合といえるか考える。

◎授業の導入で，前時の復習としてフラッシュカードに取り組む。

【ランク414】 比の値

- ・フラッシュカードの操作…出題は手動，答えは2秒後に表示されるように設定。
- ・始まりの2分間は，答えがわかった児童を指名して答えさせ，一問ずつ解説を入れる。次に，全員で声をそろえて答えさせる。最後に，希望者を2名ずつ指名し，競争させる。(写真5)
- ・希望者を指名してどちらが速く答えることができるか競争させること



【写真5 フラッシュカード 競争の様子】

で，場の設定に変化を持たせ，さらに楽しく活動することをねらいとした。

第3時 【目標】 等しい比の調べかたを理解する。

【学習活動】 $2:4$ と $5:10$ の比が等しいかどうかの調べ方について考える。

◎授業のまとめとして，5分間フラッシュカードに取り組む。

【ランク415】 比を簡単にする

- ・フラッシュカードの操作…出題，答え共に手動で行うように設定。
- ・まず，答えがわかった児童を指名して答えさせる。問題に慣れてきたところで，全員で声をそろえて答えさせる。
- ・第1時と同じく初めて学習する内容のため，出題の間隔や答えを表示するタイミングを担当が操作しながら，ひとつひとつ確実に解いていくことをねらいとした。

第4時 【目標】 比の性質を利用して，比の一方の量を求めることができる。

【学習活動】 縦と横の長さの比が $5:8$ になるようにする。縦の長さが 45cm のとき，横の長さは何 cm にすればよいか考える。

◎授業の導入で，前時の復習としてフラッシュカードに取り組む。

【ランク415】 比を簡単にする

- ・フラッシュカードの操作…出題は手動、答えは2秒後に表示されるように設定。
 - ・全員で声をそろえて答えさせる。最後に、希望者を2名ずつ指名し、競争させる。
- ◎授業のまとめとして、5分間フラッシュカードに取り組む。

【ランク416】比の利用(1) 【ランク417】比の利用(2)

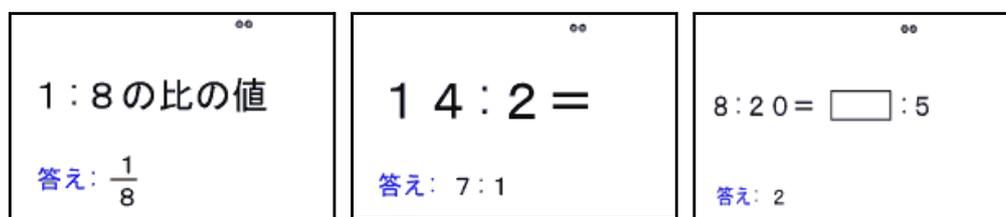
- ・フラッシュカードの操作…出題、答え共に手動で行うように設定。
- ・まず、答えがわかった児童を指名して答えさせる。問題に慣れてきたところで、全員で声をそろえて答えさせる。

第5時 【目標】学習の内容の理解を確認する。
【学習活動】「たしかめよう」に取り組む。

◎授業の導入で、単元の復習としてフラッシュカードに取り組む

【ランク418】〈まとめ〉割合の表し方を考えよう (ランク414～417)

※図8のように、問題が混ざって出題される。



【図8 フラッシュカード まとめランク】

- ・フラッシュカードの操作…出題間隔2秒、答えの表示2秒で設定。
 - ・まず、全員で声をそろえて答えさせる。次に、隣とペアになってどちらが速く答えることができるか競争させる。
- ② 効果

校内LANに接続して教室で使用したので、授業の中で簡単に活用することができた。また、スクリーンに大きく映し出すことができるため、全員でひとつひとつ問題を確認しながら解くことができた。

出題更新間隔や答え表示の設定を自由に選択することができるので、クラスの実態に合わせた学習ができる。また、同じ時間の中でも、答え表示の間隔を速めることで、レベルアップさせていくこともできる。

授業の導入で使用する時には、主に前時の復習を中心に行った。板書する必要がなく、時間をかけずにたくさんの問題を解くことができ、さらに子どもたちの意欲や集中力を高めることができた。全員で声を出して答える安心感もあり、計算の苦手な児童も笑顔で取り組んでいた。

授業の後半で使用する時には、主に授業のまとめ(確かめ)として活用した。出題更新間隔や答え表示の設定を手動にしておくことによって、ひとつひとつ解き方を考えながら進めることができた。問題に慣れてくれば、表示間隔を2秒、1秒と縮めていき、ゲーム感覚で楽しく学習することもできる。

単元終了後の子どもたちの感想は、「楽しい」「もっとやりたい」「文字が大きくてわかりやすい」「答えが表示される前に自分が答えられると嬉しい」「自信がつく」「い

ろんな問題が解ける」などが多かった。複雑な計算でなければ、今回のようにフラッシュカードを活用することで、限られた時間の中で、楽しみながら計算に取り組むことができる。

③ 課題

授業前に準備しておけば簡単に利用できるが、慣れるまでに時間がかかる。また、教室で使用するためにはコンピュータやプロジェクタが必要であるが、数に限りがあるので全学級で使用することは困難であるように思う。

子どもたちの反応は比較的よかったが、中にはスピードについていけない児童もおり、取り組み方をさらに工夫する必要がある。

(1) 画面ドリルの活用

活用実践 B 1

特別支援学級 算数科 (児童 2 名)

<児童の実態>

○共通点

児童 2 名ともコンピュータを使うことが好きで、お絵かきソフトでは好きなイラストをスタンプで貼り付けたり、自由線機能を使って自分の名前をマウスで書いたりできる。また、算数ソフトも好きで、とても楽しみながら取り組んでいる。

文字の入力は、文字変換ソフトのクリックパレットを使うと一人で行える。仮名入力では清音と濁音、半濁音の入力は一人で行えるが、拗音は一人で入力できないため、入力する際には、教師が補助をしている。また、漢字変換は、2 名とも 1 年生の漢字をおよそ書ける程度であるため、今後指導していく予定である。

○A児

自閉症でこだわりがある。プリントの端をかじったり、ティッシュを食べたり、その他の固形物を口に入れたりすることもある。また、授業中に急に席から離れたり、教室から飛び出したりすることがあり、多動傾向でもある。

算数では、計算問題の答えを何度も間違ったり、わからなかったり、学習内容が混乱したりすると、パニックを起こす。そして、物を投げたり、机を手でかなり強く叩いたり、「 $7 - 3 = 5$ あってる。6 あってる。7 あってる。8 あってる。9 あってる。」等と、問題と答えを言って大声で泣いたりする。児童の様子を見て、パニックを起こしそうな時は、ブロックを使って実際に数を数えることで計算の答えを導かせ、気持ちを落ち着かせている。

学習内容としては、繰り上がりのあるたし算、繰り下がりのあるひき算、簡単な二桁+二桁のたし算が筆算ででき、かけ算は九九をほぼ唱えることができる。しかし、既習の学習内容が混乱しており、「 $6 + 2 = 4$ 」「 $3 + 5 = 18$ 」「 $9 - 2 = 11$ 」などの誤答がみられることから、定着には更に時間がかかると考えられる。

○B児

与えられた学習課題に黙々と取り組むが、学習で困ったりわからなかったりする

ことがあっても、自分から教師に伝えることがあまりない。従って、困ったりわからなかったりする状況のまま、次に進んでしまったり、手が止まっていたりすることがある。

算数では、計算問題のプリントをする際に、1回で全問正解することの喜びを感じ、丸をつけてもらうのをとても楽しみにしている。

学習内容としては、繰り上がりのあるたし算は指を使って計算をすることができ、繰り下がりのないひき算はブロックを使って計算をすることができる。また、簡単な二桁+二桁のたし算が筆算ででき、かけ算は $2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 5$ の段を唱えることができる。しかし、たし算とひき算が混乱しており、「 $8 + 1 = 7$ 」「 $6 - 3 = 9$ 」等の誤答がみられることから、A児同様、定着には更に時間がかかると考えられる。

① 指導方法

○共通事項

特別支援学級に常設してあるノートパソコンを校内LANに接続し、一人ずつ画面ドリルに取り組ませた。

ログインは本学級の児童の実態を考慮し、児童名は全て平仮名で設定した。ログインをする際には仮名入力をさせ、ログイン後、画面ドリルを始めるまでは教師がついてクリックする場所を児童に一つ一つ指示した。そして、半角英数字になるように入力設定をした後、児童に画面ドリルの計算問題を始めさせた。

児童が数字を入力する際、一桁の数字はすぐにキーを探して入力できたが、10より大きい数になると、該当する数字のキーがないため、児童が混乱し、当初は数字の入力ができなかった。従って、10を入力する際は「1」と「0」を押す、15を入力する際は「1」と「5」を押す、とマンツーマンで一つ一つ指導することで、10より大きい数が入力できるようになった。

また、できるだけマウスの操作ミスによる児童の混乱を防ぐため、エンターキーを主に使うように指導をした。更に、漢字が読めない箇所があるので、画面ドリルの操作を一連の流れとして繰り返すことで、画面ドリルの進め方を定着させた。

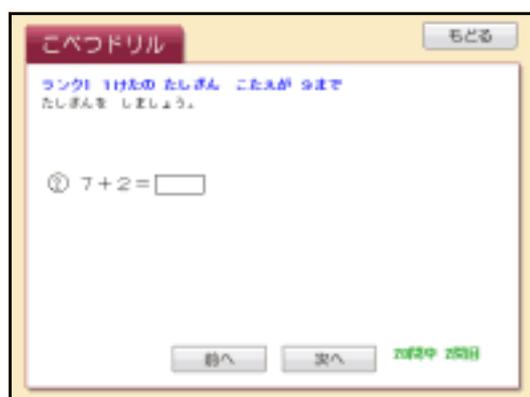
具体的には、以下の通りである。

1 「始める」をクリックする(図9)

2 答えを入力し、エンターキーを押して次の問題に進む(図10)



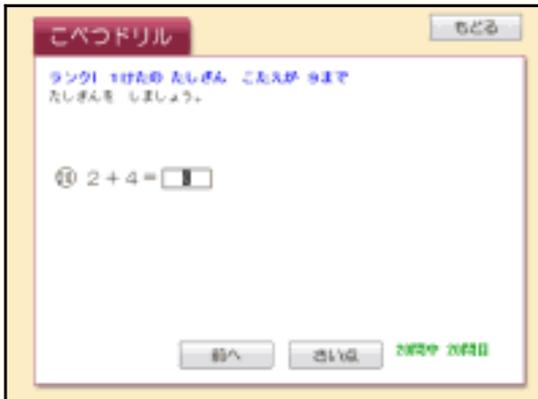
【 図9 画面ドリル 個別 スタート 】



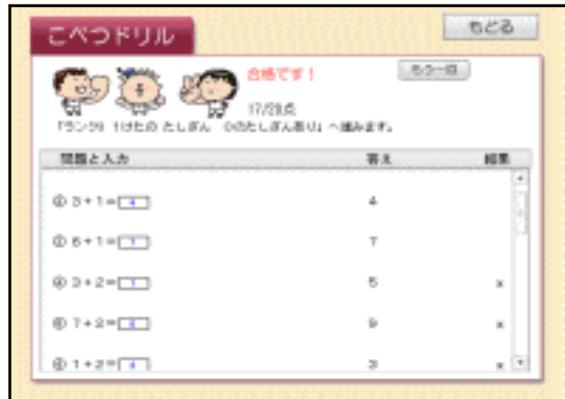
【 図10 画面ドリル 個別 解答入力 】

3 エンターキーを押した時に、数字の周りが黒くなったら、「さい点」をクリックする（図 11）

4 回答の一覧がでたら、「もどる」をクリックする（図 12）



【 図11 画面ドリル 個別 解答終了 】



【 図12 画面ドリル 個別 採点 】

5 また、「始める」をクリックして、新たに始める

学習のランクは、児童の学習状況によって判断し、進級をせず繰り返し同じランクを学習させたり、進級させたりした。

○A児

障害の特性から、授業時間内の予定を明確にする必要があり、急遽変更するとパニックを起こしやすくなるため、画面ドリルをする際には、タイマーを5分で鳴るように設定し、タイマーが鳴ると問題の途中でも終わらせた。



【 写真6 画面ドリルの取り組み 】

○B児

計算をする際には指を使ったり、ブロックを使ったりしても良いことを教え、画面ドリルの学習内容に応じて、教具を持たせた。

② 効果

2名とも、画面ドリルをしている間は、学習に集中し、落ち着いて黙々と取り組むことができた。（写真6）（写真7）特に、A児についてはコンピュータの操作をすぐに覚え、画面ドリル中はパニックを起こすことなく取り組むことができた。また、「コンピュータをするよ」と言うと、とても嬉しそうに張り切って画面ドリルをしていた。



【 写真7 画面ドリルの取り組み 】

そして、コンピュータの操作を一連の流れとして定着させたことで、児童が一人で画面ドリルに取り組むことができた。

③ 課題

ランクの設定が教科書通りになっているため、児童の学習状況に合わせて、繰り上がりのないたし算から繰り上がりのある一桁＋一桁のたし算にランクを変える際には、一度ランクの設定をし直す必要があり、不便だった。また、進級が教科書の単元順で設定されており、たし算の次にひき算になっている。(図 13)しかし、本学級の児童はたし算とひき算の思考の切り替えに時間がかかるため、ひき算の問題を全てたし算で答えていたり、反対に、たし算の問題を全てひき算で答えていたりしていた。よって、自動進級で次々ランクを上げていくことが児童には合わず、同じランクを繰り返させることが多くなってしまった。画面ドリルのランク進行を教師が設定

学年とランクを選んでください。

1年	ランク1	1けたのたしざん こたえが 9まで
	ランク2	1けたのたしざん こたえが 10まで
2年	ランク3	1けたのたしざん 0のたしざんあり
	ランク4	[まどめ] 4 あわせていくつ ふえるといくつ (ランク1~3)
3年	ランク5	1けたのひきざん 10のひきざんなし
	ランク6	1けたのひきざん 10のひきざんあり
4年	ランク7	1けたのひきざん 0と10のひきざんあり
5年	ランク8	[まどめ] 5 のこりはいくつ ちがいはいくつ (ランク5~7)
	ランク9	10と 1けたのたしざん
6年	ランク10	十いくつ ひく いくつ (10になるひきざん)
	ランク11	たしざん (11から19までのかず) + (1けた) くりあがり
	ランク12	ひきざん (11から19までのかず) - (1けた) くりさがり
	ランク13	[まどめ] 6 10よりおおきいかず (ランク9~12)
	ランク14	3つのかずのたしざん 0のたしざんあり くりあがりなし
	ランク15	3つのかずのたしざん こたえが19まで くりあがりなし
	ランク16	3つのかずのひきざん くりさがりなし

【 図13 1年のランクの配列 】

できるようにすれば、児童の学習状況により合ったものとなるを考える。

「プリントでドリルをする」の「練習ドリル」では異なった単元のミックス問題を設定して作ることができるが、画面ドリルでは設定ができない。画面ドリルでも異なった単元のミックス問題が設定できるようになれば、更に児童の実態に合わせた問題を作成し、学習内容が定着し易くなると考えられる。

計算問題の答えを入力した際に、正解してもすぐに丸がつかないで次の問題が表示されてしまうため、児童が正解する喜びをすぐに味わえなかった。更に、採点結果の表示画面(図 14)では、どの問題が正解し、どの問題が間違っているのか、児童が自分で理解するのが難しく、自分自身で合格の喜びや得点

問題と入力	答え	結果
⑩ 0+1= <input type="text" value="2"/>	1	x
⑪ 3+6= <input type="text" value="4"/>	9	x

【 図14 画面ドリル 採点画面 】

が上がることの喜びも味わうことができていなかった。よって、計算問題の答えを最後まで入力し、自動採点されても、児童が自身の結果を見直し、何問正解しているかが全くわかっていなかった。そのため、児童にとっては、画面の計算問題をし、自分が導き出した答えを入力し、次の問題に進む、ということの繰り返しになってしま

い、次第に飽きてしまっていた。特にA児は、タイマーが鳴る前に「コンピュータじゃないの。」と言い出すこともあった。児童の意欲づけを工夫すると共に、採点方法についても工夫する必要がある。

児童が自分で画面ドリルを進めていくと、児童の学習履歴を確認しても、得点と合否判定はわかるが、同じランク内でもどのような問題が多く間違えているのか、分析ができなかった。例えば、次の学習履歴（図 15）を参照すると、この児童は、ランク5の「1けたのひきざん」では、1回目と2回目は0点となっているが、3回目は急に合格しているのがわかる。しかし、どんな答えを入力して0点だったのかがわからない。また、ランク7の「1けたのひきざん」で2回とも不合格になっていることと、その得点はわかるが、どのような問題を間違えているのか、傾向がつかめない。ランク5の1回目と2回目については、前のランクがたし算であるので、ひき算の問題に関わらず、たし算で計算をしたものと考えられるが、児童の回答が不明であるので、実際のところはわからないままである。ランク7に関しては、後日、児童に改めて同じランクをさせたところ、「7-0」等、0をひく問題と、「3-3」等、答えが0になる問題を全て間違えていたことがわかったので、これらの計算について改めて指導した。

あなたの学習履歴 テキストをコピー

履歴一覧 全て 日付順

	ランク	回数	印刷日時	点数	結果
▶	ランク4 [まとめ] 4 あわせてい	1回目	S 12/4 15:10	20点/20点	合格
▶	ランク19 1けたのたしざん く	1回目	S 12/4 15:19	0点/9点	合格
▶	ランク20 1けたのたしざん く	1回目	S 12/7 9:29	14点/20点	合格
▶	ランク20 1けたのたしざん く	2回目	S 12/8 13:59	20点/20点	合格
▶	ランク20 1けたのたしざん く	3回目	S 12/9 14:22	17点/20点	合格
▶	ランク1 1けたのたしざん こた	2回目	S 12/10 9:10	18点/20点	合格
▶	ランク2 1けたのたしざん こた	2回目	S 12/10 9:19	19点/20点	合格
▶	ランク3 1けたのたしざん 0の	2回目	S 12/10 9:49	19点/20点	合格
▶	ランク4 [まとめ] 4 あわせてい	2回目	S 12/10 9:52	20点/20点	合格
▶	ランク5 1けたのひきざん 10	1回目	S 12/10 9:55	0点/20点	不合格
▶	ランク5 1けたのひきざん 10	2回目	S 12/10 9:59	0点/20点	不合格
▶	ランク5 1けたのひきざん 10	3回目	S 12/10 10:08	16点/20点	合格
▶	ランク6 1けたのひきざん 10	1回目	S 12/10 10:13	17点/20点	合格
▶	ランク7 1けたのひきざん 0と	1回目	S 12/10 10:21	15点/20点	不合格
▶	ランク7 1けたのひきざん 0と	2回目	S 12/17 9:26	9点/20点	不合格

P:印刷 S:画面 L:ローカル

【 図15 児童の学習履歴 】

以上のように、画面ドリルを児童一人で進めさせると、本学級の児童は採点の一覧を自分自身で分析できないため、同じ間違いを何度も繰り返す。児童に画面ドリルをさせる時は、履歴を確認し、不合格のランクは後日、練習ドリルのプリントをさせたり、児童が画面ドリルをしている時に隣で入力の様子を見たりしたりして、間違っただ箇所を分析する必要がある。

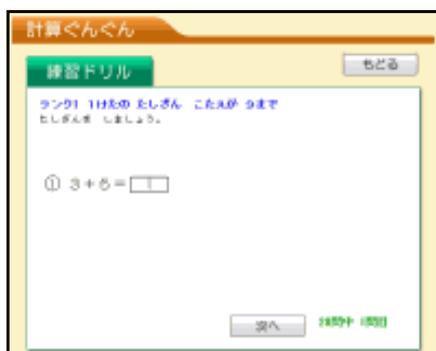
第1学年 算数科

単元名：「あわせていくつ ふえるといくつ」全4ランク（ランク1～4）

「のこりはいくつ ちがいはいくつ」全4ランク（ランク5～8）

① 指導方法

最初は画面ドリルの「練習ドリル」（図16）を使い、キーボードの使い方（入力の仕方）を練習した。何度か練習した後、時間を設定して画面ドリルの「個別ドリル」を各自進めていった。（図17）



【 図16 画面ドリル 練習 】



【 図17 画面ドリル 個別 】

② 効果

学級の児童のほとんどがゲーム機を持っており、普段からゲームをすることが多く、コンピュータを使う「ぐんぐん」の画面ドリルは、ゲーム感覚で行っていた。そのため、フラッシュカードの時と同様、計算を苦手とする児童も楽しみながら計算し「ぐんぐん」に取り組んでいた。

1学期、個別ドリルプリントでの学習では、なかなかランクを上げていくことができなかった児童も、その場ですぐに合否が確認でき、合格するとランクが上がっていくこと（合格というコメントが出てくること）により、意欲的に画面ドリルに取り組めた。また、友達も一緒に行うため、競争意識が沸き、競い合ってドリルを進めることができた。（写真8）（写真9）



【 写真8 画面ドリル 個別 】

③ 課題

児童の計算力に差があり、次々にランクを上げていく児童やなかなかランクを上げられずに



【 写真9 画面ドリル 個別 】

いる児童がいる中、画面ドリルの進級設定が全体でしか行えないため、目標のランクを決めていても、目標ランクを超えて行ってしまいう児童が数人いた。

コンピュータ室で一斉に行うため、入力や計算に時間がかかる児童はなかなかランクを上げられず、速く計算できる児童との差ができてしまった。差ができた児童に対しては、プリントでの個別ドリルの結果が画面ドリルに反映されるように設定し、プリント学習で補っていかねばならないと考える。

また、キーボードの操作（入力）に時間がかかるため、画面ドリルでは、「漢字ぐんぐん」の学習を行うことができなかった。一人一人操作に慣れ、文字入力ができるように操作学習の時間が必要だった。しかし、文字変換ソフトのクリックパレットなどを使用すると、マウスで文字の入力をすることで「漢字ぐんぐん」の学習を行うことができたのではないかと考える。

活用実践 B 3

第3学年 算数科

第3学年 算数科

単元名「わり算を考えよう」 あまりのあるわり算の計算

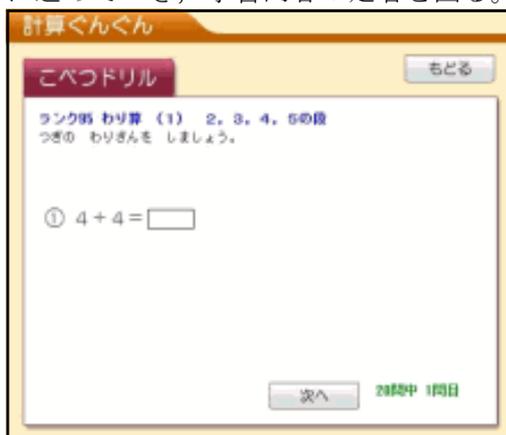
① 指導方法

児童一人一人のペースで、ランクを順番に進めていき、学習内容の定着を図る。

② 効果

画面ドリルはパソコンを使って学習するので、個別ドリルのプリント学習以上に楽しく興味をもって学習することができる。(図 18) ランクがどんどん上がっていくことも楽しく、達成感が得られる。

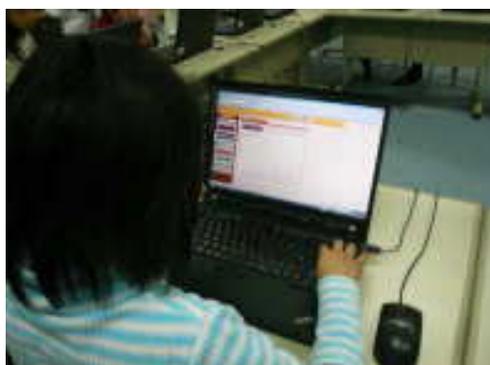
最初は、画面ドリルの計算は簡単で、「ぐんぐん」のログインの方が難しいと感じる児童が多かったが、すぐに慣れ意欲的に取り組むことができた。2, 3度不合格になってもあきらめずに問題を解くことができた。また、ランクが上がり問題が難しくなっても、粘り強く問題を解いている姿がみられた。(写真 10) (写真 11)



【 図18 画面ドリル 個別
ランク95 わり算(1) 】



【 写真10 画面ドリルに取り組む 】



【 写真11 画面ドリルに取り組む 】

(児童の感想より)

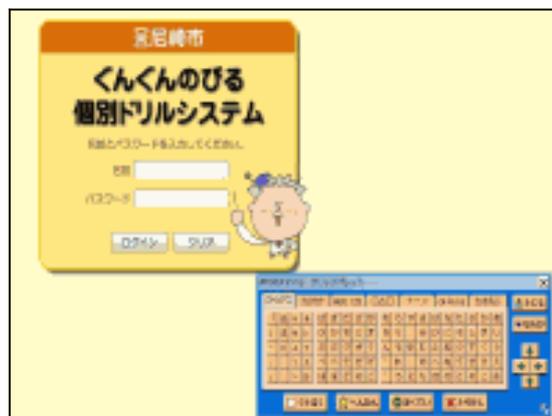
- ・はじめは「ぐんぐん」に名前を入れるのが大変だったけど、今は楽しく勉強できます。計算するのは難しいけど、数字を入れるのは簡単でした。
- ・レベルがどんどん上がっていった楽しく勉強できました。算数プリントよりもっと楽しいです。これからもがんばりたいです。
- ・最初はすごく簡単だったけど、だんだんランクが上がっていくと繰り返りがあるから難しくなってきました。紙を持ってくると速くできました。「ぐんぐん」でおもしろいことができうれしかったです。パソコンで勉強ができて楽しかったです。
- ・いつも家でパソコンの勉強ゲームをしているけど、学校と違うので学校の方が楽しくてわかりやすくてもっとやりたくなったり、家でもやりたくなりました。難しかったけど、だんだんできるようになってきてうれしかったです。
- ・紙で書くのより、パソコンですると全然違いました。筆算が一番難しかったです。

③ 課題

3年生でローマ字を習いたてのため、ローマ字入力でログインすることができる児童が少ない。素早くログインできるかどうかで、問題を解く時間に違いが見られた。名前の変換でも差が見られた。問題を解くのは楽しくできたが、ログインするのが大変という意見が多い。ローマ字入力が難しい児童には、文字パレットを使用して画面をクリックすることで文字を入力させた。(写真 12) (図 19) 33人中13人パレットを使用した。



【写真12 文字パレットの入力】



【図19 ログイン画面と文字パレット】

ランクが上がると画面上だけで、計算することが困難になってきた。特に繰り返りや繰り返り下がりがあると難しくなっていた。そのため、紙と鉛筆を用意して解く児童もいた。

筆算の計算では一の位から計算し答えを求めていくが、入力では上の位からになっており、答えを入力しにくい。繰り返り上がり繰り返り下がりの問題になると、上の位からの入力では、入力ミスが増えるため間違いが多くなり、次のランクに進めない児童もいた。書く物を用意すると1回で合格していたので、筆算の計算方法と同じように、一の位から入力することができたら、入力ミスによる間違いが減るのではないかと感じた。

第 6 学年 算数科

単元名：「比」 全 5 ランク (ランク 4 1 4 ~ 4 1 8)

① 指導方法

- ・対象：学習内容の習得が不十分だと思われる児童
- ・場所：算数教室
- ・指導者：学力向上推進教員
- ・時間：休み時間、放課後

画面ドリルを学級の児童全員が個別に進めていくためには、コンピュータ室に移動しなければならない。しかし、普段の授業で毎回コンピュータ室に移動することは大変困難である。そこで今回は、反復練習が必要だと思われる児童のみを対象として画面ドリルに取り組みさせることにした。

まず、授業中の様子やプリント学習の結果から、対象児童を決定した。対象となった児童は、休み時間や放課後を利用して、教室の隣にある算数教室に自分で通うこととし、そこには数台のコンピュータを常設することで、いつでも画面ドリルができる環境を作った。

② 効果

計算することが苦手な児童であるが、コンピュータを操作する楽しさもあり、フラッシュカード同様楽しんで取り組んでいた。個別プリント同様、ランクが上がっていくことも児童にとっての楽しみの 1 つであったようだ。また、筆記用具などの準備物は必要なく、コンピュータに入力するだけでいいことから、普段なら面倒臭がる児童も意欲的に取り組めた。

算数教室には、学力向上推進教員がいるため、対象児童がコンピュータの操作で困ることはなかった。また、問題の解き方がわからないときには、すぐに尋ねて解決することができた。さらに今回は対象児童を限定したため、周りのペースを気にせず、じっくり考えながら進めることができ、フラッシュカードとは違って 1 問 1 問確実に解こうとする姿勢が見られた。

③ 課題

今回は、学力向上推進教員の力を借り、隣の教室で手軽に取り組むことができたが、そうでなければ休み時間や放課後に取り組むことは大変困難である。もし担任だけならば、授業中に全員をコンピュータ室に連れて行って一斉に取り組ませることになる。しかし、それでは毎日継続して取り組ませることができず、計算力の定着は難しいと思われる。

また今回は、少人数を対象としたため、コンピュータの操作方法でつまる児童への対応もスムーズに行えたが、人数が増えると、同じように取り組むことは難しい。そこで今後は、クラスの児童全員が、自主的に、継続して取り組めるような方法を探っていかなければならない。

4 研究のまとめ

今年度は「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」について、その主たる機能である個別ドリルを印刷して利用する方法ではない、他の機能を利用した効果的な活用方法を探ってきた。

その機能の一つ、「フラッシュカード」は難しい計算には不向きであるが、暗算のできる単元を選んだり、計算用紙があれば実施できる範囲を少し広げることができる。今年度の研究から、プロジェクタや大型ディスプレイなどの大画面を見ながら、大きな声で答えを言い合うという全体の活動でも、2人組みになり互いに正答数を競い合うペアの活動でも、正答しないと帰ることができないルールなどゲーム的な要素を含めた個人の活動でも、ちょっとしたアイデアで学習に変化を持たせることができ、児童の興味関心を引き出し、楽しく学習することができることがわかった。また、次の問題や答えの出題時間を変えることができるのも魅力の一つになっている。その上、コンピュータ教室ではなく、普通教室で使用できるようにすれば、さらに、単元の学習過程における毎時間の導入にも確かめにも利用でき、活気とリズムと変化のある授業が展開できる。

「画面ドリル」は個別の活動となるので、コンピュータ室で一斉に行うか、算数教室などで一部の児童のみが行うかの方法があるが、通常学級だけでなく、特別支援学級での利用も可能であることがわかった。どの児童に対しても、操作に慣れるというステップを踏ませることで、「画面ドリル」の「個別ドリル」へと発展でき、児童が粘り強く学習に取り組む姿が明らかになった。しかし、文字入力の壁や筆算の答えの入力順序、学習履歴における誤答分析の限界、一列に並んだランクから指導に必要な内容だけを選択・再構築できないなど、システムが持つ改善すべき点も明らかになった。

最後に、システムの機能拡大に向けた取り組みでは、外国語活動が支援できるものを検討し、基本データの一部を作成した。文科省の配布した英語ノートデジタル版は、指導者用の提示型教材として主に利用するものである。そこで、子どもたち自身が利用することで、英語に慣れ親しむことができるような手軽な教材を開発する計画を立てた。現在は、英語ノートデジタル版に出てくる単語を精選し、それらを手書きしたイラストをデジタル化し、そこへ着色した段階である。今後はこれにネイティブな音声をセットして、フラッシュカードのような仕組みが構築できればと考えている。

5 おわりに

本システムは、新教科書に合わせたランクの組み替えや励みのメッセージ（KR情報）の見直しをすでに完了している。そして、今回出てきた改善すべき点とともに、システムはまだまだ進化させなければならない。全国的にICTの環境整備が進む中、近い将来、たくさんの教室で、本研究を参考にした「ぐんぐん」の活用がより一層進められていることを期待したい。

参考文献

- ・ 研究報告書 紀要1号 昭和61年3月 尼崎市立教育総合センター
- ・ 研究報告書 紀要7号 昭和62年3月 尼崎市立教育総合センター

平成21年度 尼崎市立教育総合センター

専任講師

大阪女子短期大学	教授	住本	克彦
京都女子大学	教授	吉永	幸司
奈良教育大学	准教授	伊藤	剛和
兵庫教育大学	准教授	加藤	久恵
兵庫教育大学	准教授	吉田	達弘
尼崎市立梅香小学校	校長	佐々木	道治
尼崎市立常陽中学校	校長	田中	誠一
尼崎市立園田中学校	校長	大龍	雅子